

松本市林山腰遺跡

—県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書—

1988・3

松本市教育委員会

松本市林山腰遺跡

—県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書—

1988・3

松本市教育委員会

序

里山辺地区には多くの遺跡が存在しており、国府推定地や針塚遺跡の弥生時代再葬墓はよく知られている処となっております。これらの遺跡は薄川右岸にありますが、左岸の地は弘法山古墳や林城の眼下に広がり、古代～中世において重要な地域であったことがうかがえます。神田地区も含めて遺跡も多いのですが、発掘調査が少ないためもあり、実態はよくわかつていません。

林山腰遺跡は林城の西麓にあり、薄川左岸では東端の遺跡です。以前縄文時代の石棒が採集され、山麓の小遺跡と考えられてきました。今回県営は場整備事業に先立ち緊急発掘調査を実施しましたが、その結果当初の予想に反し、縄文時代中期～後期の大きな集落跡であることが判明しました。中でも柄鏡形敷石住居跡は松本平でも数少ない調査例となりました。

本調査の成果は、時を同じくして行われた千鹿頭北遺跡の調査とともに、今後この地の歴史を解明してゆく上で重要な資料になろうと思われます。

最後に、本調査にあたり、地元改良区、里山辺公民館ならびに山辺歴史研究会、また地元の方々には多大なるご理解とご協力を賜り、心より謝意を表して序といたします。

昭和63年3月

松本市教育委員会

教育長 中 島 俊 彦

例　　言

1. 本書は昭和62年8月7日～9月14日にかけて行われた、松本市里山辺林に所在する林山腰遺跡^{ほやしゃまこじ}の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は県営は場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、長野県松本地方事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行ったものである。
3. 本書の編集は事務局が行い、執筆はI：事務局、II-1：太田守夫、III-3-(2)：関沢聰、その他を竹原学が行った。
4. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。

土器復元	五十嵐周子、岩野公子、施沢智恵子
土器拓影	五十嵐周子、百瀬利子
遺物実測	赤羽包子、西川卓志、牧田浩幸、若井孝夫、島田哲男、土橋久子、関沢聰、竹原学
トレース	土橋久子、竹原学
造構写真	熊谷康治、竹原学
5. 遺物の写真撮影は宮崎洋一氏にお願いした。
6. 検出遺構は都合により主要なものについて本文中に図示し、他は全体図(1/60)に示した。また遺物についても、そのすべては掲載し得なかった。
7. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記述を重視したため文章として掲載できなかつたが、出土遺物及び図類と共に松本市教育委員会が保管している。

目 次

I 調査の経緯と経過	
1. 事業の経緯	1
2. 調査体制	1
II 遺跡の環境	
1. 遺跡の立地と自然環境	4
2. 周辺遺跡	7
III 調査結果	
1. 調査の概要	9
2. 遺構	
(1) 住居址	11
(2) 柱列	20
(3) 竪穴状遺構	20
(4) 集石	20
(5) 土壙・ピット	21
3. 遺物	
(1) 土器	25
(2) 石器	61
(3) 土製品	72
IV 調査のまとめ	74

挿 図 目 次

第1図 林山腰遺跡の位置と調査地点	2	第15図 雨堀遺跡 2次調査出土遺物	31
第2図 調査範囲	3	第16図 出土土器 (1)	33
第3図 土層柱状図	6	第29図 出土土器 (10)	46
第4図 周辺遺跡	8	第30図 出土土器拓影 (1)	47
第5図 慈眼寺の配置と調査区	10	第43図 出土土器拓影 (10)	60
第6図 第2・8号住居址	12	第44図 出土石器 (1)	67
第7図 第3号住居址	14	第48図 出土石器 (5)	71
第8図 第3号住居址遺物分布	15	第49図 出土土製品	73
第9図 第4号住居址	17		
第10図 第4号住居址張出部	18		
第11図 第5号住居址	19		
第12図 主要土壙 (その1)	22		
	1	付図1 林山腰遺跡I地区全体図	
第14図 主要土壙 (その3)	24	付図2 林山腰遺跡II地区全体図	

I 調査の経緯と経過

1. 事業の経緯

- 昭和61年 8月29日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、長野県松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 昭和62年 4月28日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 6月1日 昭和62年度県営は場整備事業山辺地区林山腰遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月20日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 8月6日 林山腰遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 10月29日 林山腰遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 11月6日 林山腰遺跡埋蔵物の文化財認定通知。

2. 調査体制

調査団長 中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

調査担当者 神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場責任者 竹原学（社会教育課嘱託）

調査員 太田守夫（地形・地質）

土橋久子（考古学）

協力者 赤羽包子 赤羽貞人 朝倉定人 新井織太 石川末四郎 大出六郎

大久保忠光 太田千尋 大谷成嘉 金井要二郎 小池直人 小松啓吾

神戸巖 酒井文雄 濑川長広 中村恵子 林昭雄 藤本嘉平

穂刈真己 丸山直之

事務局 浅輪幸市（社会教育課長） 小松晃（文化係長） 洞田睦子

柳沢忠博（主査） 大村敏博（主査）

熊谷康治（主事） 直井雅尚（主事）



第1図 林山腰遺跡の位置と調査地点



第2図 調査範囲

II 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と自然環境

(1)位置と地形

本遺跡は、松本市里山辺林の東部の山脚に当る、山腰地籍に位置している。松本市街を西流する薄川の中流域にかかる金華橋とは、わずか200mの近接地（左岸）である。付近一帯は薄川扇状地のはん氷原で、西ないし南西へ傾く地形面を形成している。遺跡のるる地形面は、長さ約250m、傾斜 $\frac{30}{1000}$ の斜面である。東部の林城山（史跡林城跡）の先端（北西）の南西側の山脚に沿っているので、薄川や薄川扇状地から遙へいされた形となっている。そのため林城山の山ろく面（崖錐）のようにも見える。林城山の南西側にはこのほか、傾斜度の高い長さ800mほどの大嵩崎の谷（平均傾斜 $\frac{104}{1000}$ ）があり、北西に下ってくる。この地形面（方向～北西）と遺跡のるる地形面（方向～南ないし南東）が谷口で接し、東西性の縫合帶と低湿帯をつくっている。発掘地の第III地区はこの低湿地に接しているため、ゆう水がみられる。この低湿地は、大嵩崎の谷を下った流れと合し、林集落の南の山脚を小流と低湿帯をつくって西流している。林集落のはん氷原はこの低湿地へ向い南西の傾斜面（傾斜 $\frac{26}{1000}$ ・方向南～南西～西）をつくっている。以上の地形面の傾斜方向、傾斜度や東西性の低湿帯からみると、明らかに遺跡のるる地形面は、薄川扇状地（はん氷原）に属するものであることが理解される。さらに大嵩崎の谷に発達した林城山からの崖錐地形～山ろく面は谷口まで終り、それより北の遺跡のるる地形面に及んでいない事実である。無理に山脚に山ろく面をさがしても、幅5m前後に過ぎない。それだけ山腹山脚が急しゅんであるともいえる。これらの観察から、薄川のはん氷は、林城山の先端にさまたげられ、そのかけが生れ、遺跡のるる地形面の南ないし南東方向をつくったものと考えられる。山腹山脚が急しゅんで、山ろく面を欠くことについての構造的運動の存否は判つきりしていない。

(2)遺跡の堆積層

遺跡のるる地形面が、薄川の扇状地の堆積層であることは、発掘地の地層やそこに含まれた礫・疊層によって示されている。

第3図はI・II・III各発掘地区の地層断面である。いずれも斜面を整地した水田であり、上から1・2・3の順の棚田で、高度差はそれぞれ1m前後である。

第I地区は、旧慈眼寺の跡地が水田化されたもので、林集落へ広がるはん氷原の尾根に近い。從って礫の堆積が目立つ。その上慈眼寺跡地の始末や、開田の整地のために上層部は大分かく乱されている。

第II地区と第III地区とはいずれも土層の発達がよく、共通した土層がみられる。礫は土層中に散

在するだけで、細・小礫に属する。

まず堆積、あるいは土層中に含まれる礫についてみると、形は円礫か亜円礫で、明らかに河床礫である。礫の種類は多い方から安山岩、石英閃綠岩、緑色火山岩、礫岩である。これらの礫は薄川起源のもので、隣接の林城山の岩石は第三紀層内村累層の泥岩・砂岩を混えていない。このことからも、遺跡の地形面が薄川扇状地の堆積であることが証明できる。

次いで土層をみると、第II・III地区には共通性がみられ、いずれも扇状地（はん溝原）末端の堆積の状態で、土層は砂質であるが、顯著な礫層や大・中礫を含まない。地形的には扇状地と屈曲の多い両側の山地、扇状地と扇状地との接觸地に、低湿なくぼ地としてつくられることが多い。実際に大嵩崎の谷の地形面との間に、前述のようにほば東西性の低湿地をみることができる。

土層の堆積も耕土（水田）の下は、鉄・マンガン分の汚染を受けた褐色～赤褐色土、厚薄の違いはあるが腐植質と思われる灰黒色土、褐色土、黄土色土の順となっていて対応し、灰黒色土、褐色土が縄文中期・後期の遺物や住居跡の出土層となっている。第III地区的最下部は粘質である。

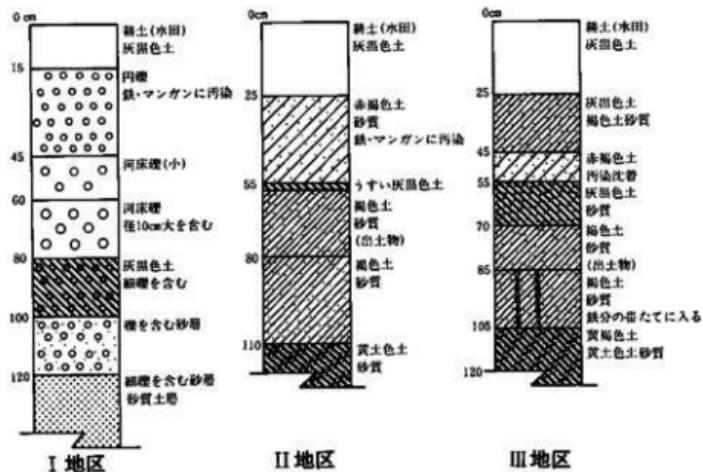
ただ第I地区は前述のような環境もあって、10cm以上の径をもつ河床礫（大～30×25cm）が含まれている。しかし下部に行くに従い径も小さくなり、細礫・砂層・砂質土層に変化する。深さ80～100cmにある細礫を含む灰黒色土層は連続がよく、第II・III地区的灰黒色土層に相当するものであるろう。従って上部の砂礫層のはのちはん溝の堆積物で、それだけ灰黒色土層は他地区的灰黒色土層より深所にあることになる。

(3) 地形の形成と遺跡

そう考えると、縄文期遺跡の時代は、薄川の影響があったとしても、灰黒色土層・褐色土層を地表とした地形面であって、今日みられる大量のはん溝原堆積物を除いたものが考えられる。実際に薄川中流域の現在の地表面における堆積物は大量なものであり、大嵩崎の谷も次第に崩土により、地形面を高めて行ったものと考えられる。

(4) 住居跡に運びこまれた礫

地層中の礫についてはすでに述べたが、住居跡中の礫も産地は同じ薄川上流のものである。礫種は安山岩・石英閃綠岩・緑色火山岩で、径は15×30cm大の円礫である。また出土石器類は安山岩が多数で、一部に石英閃綠岩がみられた。第4号住居址敷石の鉄平石はおそらく、薄川上流の安山岩の板状節理のものであろう。そのほかに、第3号住居址より亜円礫の赤玉石（鉄石英、10×8×4cm大）が一つ発見されたが産出地はわからない。



第3図 地層断面図

2. 周辺遺跡（第4図）

林山腰遺跡の周辺、薄川扇状地上には多くの遺跡が存在している。時代は縄文から中世まで幅広いが、その内でも弥生時代以降の集落・古墳が目立っている。

旧石器時代 現在弘法山古墳東麓でポイントが採集されているほか、遺跡は知られていない。

縄文時代 この時代の遺跡は調査例が少なく、その実体はよく分かっていない。特に神田周辺、県～清水周辺の低地では包含層が地下深く、現在知られている以上に遺跡が広がる可能性もある。

薄川右岸では清水・薄町・上金井等で中期の遺物が採集されている他、針塚遺跡では早期～後期の遺物が確認されている。また左岸では本遺跡で石棒2点が採集され、神田・千鹿頭・平烟で土器片・石鎌等が発見されている。

弥生時代 薄川扇状地扇端の低地、清水～神田地区にかけては、中期～後期の遺跡が連続する。現在清水・県町・富士電機敷地・神田等の遺跡が知られており、特に県町ではこれまでに5次の調査が行われ、中期末を中心とする後期・古墳時代～平安時代に及ぶ住居址82棟が検出されている。

一方、これらの遺跡群より上流、右岸微高地には針塚遺跡がある。昭和57年の調査で前期末～中期初頭の再葬墓群が発見され、遠賀川系・条痕文系・水式系からなる土器群は、中部高地での弥生文化の受容過程を究明する上で重要な資料となった。

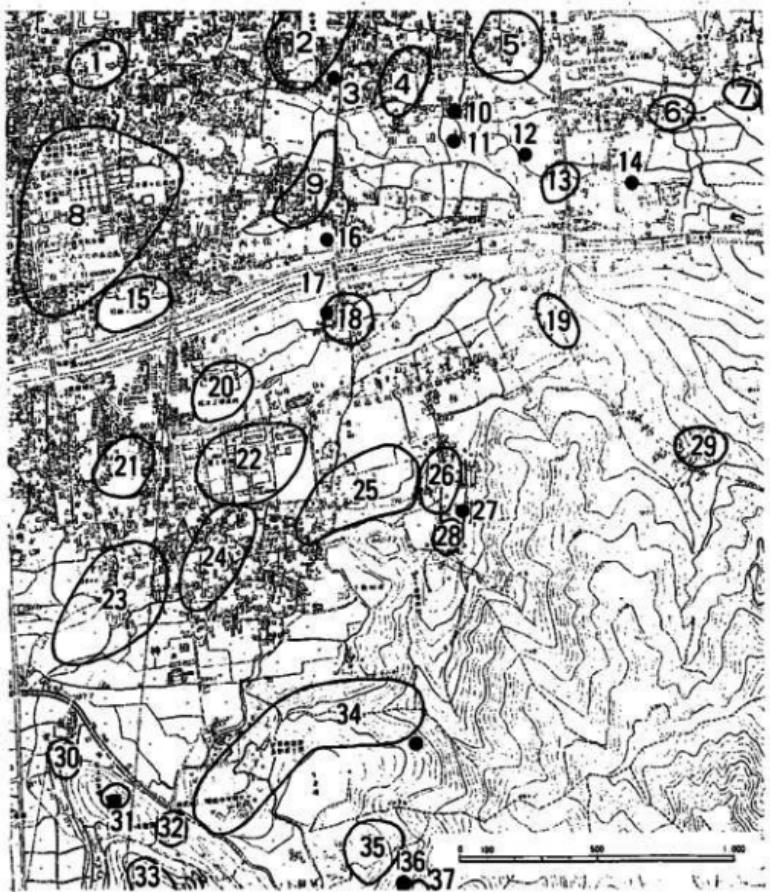
古墳時代 薄川扇状地上には古墳が多く、特に右岸の荒町・大塚・針塚・猫塚等の古墳は積石塚として知られ、方墳が多いとされる。右岸では巾上（直刀・馬具・管玉）・御神符（円墳・直刀・劍）がある。これらの古墳は未調査のまま埋没したものが多く、実体ははっきりしない。

以上平地・山麓の古墳に対し、扇状地の南を画す中山丘陵上には弘法山古墳がある。昭和49年に調査され、前期の前方後方墳と判明、礫都中より半三角縁神獣鏡・劍・斧・鎌等が出土している。また和泉川を隔て棺護山には中山36号古墳があり、やはり半三角縁神獣鏡が出土、前期古墳として知られている。

次に集落址に目を転じると、右岸では下原・県町でそれぞれ後期の住居址が調査されている。また左岸では千鹿頭北遺跡の調査が、本遺跡の調査と並行して行われ、前期5・後期48の住居址が検出された。そのほか左岸の遺跡は富士電機敷地・御神符等が知られている。

奈良・平安時代 遺跡数は増加し、扇状地各所に見られる。薄川右岸では県町で住居址の調査があり、また松商学園敷地では八稜鏡が出土、他に清水・山田・禿川寺・上金井・小松・針塚等で遺物が採集されている。次に左岸をみると千鹿頭北で13棟の住居址が検出され、松本工業高校敷地からも遺物の出土をみている。この外三才・神田・山間部の大嵩崎でも遺物が出土している。

以上薄川扇状地を中心に遺跡を概観してきたが、その調査はまだ端緒についたばかりであり、今後の進展が期待される地域である。



1. 清水
2. 下原
3. 荒町古墳
4. 山田
5. 児川寺
6. 菅町
7. 上金井錦田
8. 猿町
9. 小松
10. 大塚古墳第2号
11. 大塚古墳第1号
12. 鈴塚古墳
13. 鈴塚
14. 猫塚
15. 松商学園
16. 北河原屋敷古墳
17. 巾上古墳
18. 巾上
19. 林山腰
20. 松本工業高校
21. 筑摩
22. 富士電機工業
23. 三才
24. 神田
25. 千鹿頭
26. 御神符
27. 御神符古墳
28. 林
29. 大嵩崎
30. 平畠
31. 弘法山古墳
32. 下和泉
33. 漱黒山十三塚
34. 檜隈山古墳群
35. 生妻
36. 弥生山古墳第1号
37. 弥生

第4図 周辺の遺跡

III 調査結果

1. 調査の概要

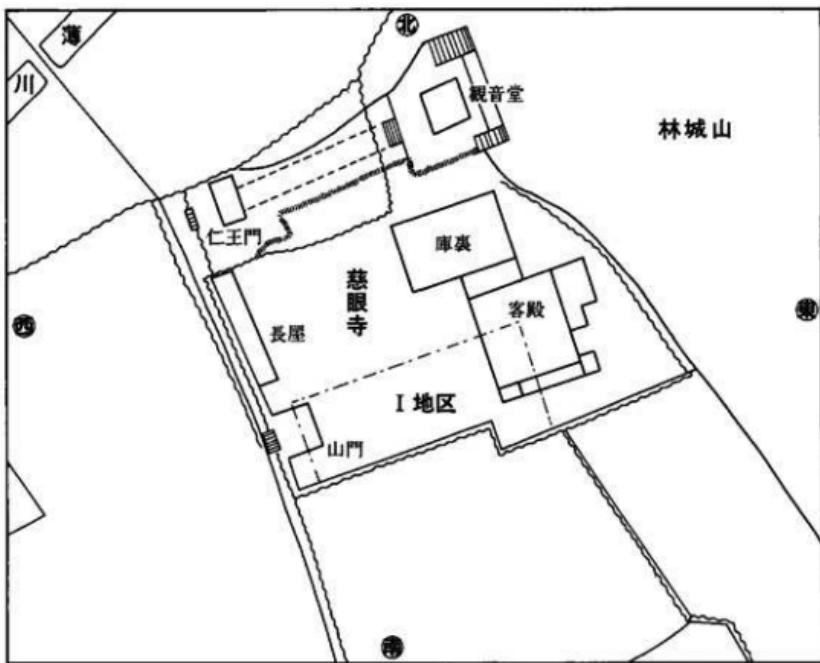
遺跡の位置と調査地点 本遺跡は松本市の東、里山辺地区に所在し、薄川の扇状地が林城山（金華山）と現薄川に挟まれた地点に位置している。今回の調査地は金華橋の南約200～350mにかけてで、林城山の稜線が急激に変換、平地となった面である。現地目は水田となり、北から南へと傾斜、比高3.6mを測る。調査区は南北に3ヶ所設定し、北からⅠ～Ⅲ区としている。本遺跡発見の端緒となった山辺学校歴史民俗資料館所蔵の石棒は、Ⅰ～Ⅱ区の間やや山寄りの葡萄畑より出土している。また明治の廃仏棄釈以前小笠原氏の祈願所であった慈眼寺がこの地にあったとされている。

慈眼寺の位置と調査の結果 この寺は当初金華山福山の峯にあったものだが、慶長16年（1611）石川康長が山麓のこの地に移転、観音堂を造立したとされている（注1）。文政三年（1820）の古絵図（注2）によると、諸堂の配置は第5図の様になっている。当時の道路・田畠の地割は現在でも残っており、第2図の現況図と対応している。特に本調査Ⅰ区南縁の石垣は当時の慈眼寺敷地の南縁に一致し、従ってⅠ区は慈眼寺の山門と客殿の一部にかけて位置することになる。

さてⅠ区の調査結果であるが、当初山門・客殿遺構の存在を期待して調査を進めた。しかし耕作土・床土を除去すると礫層となり、各所に人頭大～ひと抱えもある石を埋めこんだ搅乱が見られた。この搅乱には近世以降の陶器片・瓦片等とともに慈眼寺のものと思われる礎石が混入していた。搅乱の他には寺院に関わる遺構は見当たらず、調査を打ち切った。この地域には戦時に地下式の軍機工場が建設されており（注3）、検出された搅乱はその痕跡と見られる。また戦後再び整地し水田にしており、これらの造成などにより慈眼寺址は壊滅したものと考えられる。ただ当時の地割だけは現在に伝わっており、建物の位置が知れた点だけは幸いであった。

遺構・遺物の概要 今回の調査面積は1010m²になり、遺跡の推定面積からするとわずかだが、縄文時代中期を主体として前期～後期・平安時代～近代に渡る各種の遺構と多くの遺物を得ている。

検出遺構は縄文時代中期竪穴住居址3・土壤106・集石1、縄文時代後期敷石住居址1、平安時代竪穴住居址2、中・近世竪穴状遺構2・柱列4・土壤5・ピット13となっている。縄文中期の竪穴住居址は初頭・中葉のもので、円形プランのほぼ中央に炉を有する。後期のものはいわゆる柄鏡形敷石住居で円形の主体部に長方形の張出部が付く。土壤は特にⅡ区に集中してみられ、多くは円～楕円形を呈すが規模は大小ある。集石はⅢ地区に1基検出されたが、下部に土壤等はない。これらの土壤・集石は中期に属している。平安時代の遺構は方形の竪穴住居址2棟のみで、これらはⅡ区で切り合って検出された。どちらも東壁にカマドをもっている。最後に中・近世の遺構だが、これらは遺物の出土がなく、遺構の覆土や形態から中世もしくはそれ以降と考えた。また、今回図示しな



第5図 慈眼寺の配置と調査区

かったが、先に触れた第二次大戦中の軍機工場の遺構がある。これはI・II区で見られたが、著しく破壊を受けており、時間的な余裕もなく調査できなかった。戦時中の強制労働や軍需工場の疎開の実体を知る生の史料だけに、遺憾なことであった。

出土遺物は上記の遺構、包含層より縄文土器・石器・土製品・須恵器・土師器等多量に出土した。このうち縄文土器は中期初頭の良好な資料が得られ、特に土壤21の一括土器は編年資料として耐えうる内容をもつ。また4住の後期土器についても同様である。石器は石鎌・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・石皿・凹石・石棒等があり、なかでも磨製石斧・石皿・石棒は4住より目立って出土している。その他平安時代の遺物も量的に少ないものの、いくつかの完形品が得られた。

最後に全体について要約すると、縄文中期初頭と後期前葉を主体とした集落址を確認できた点、またそれぞれの時期の土器・石器の一括資料を得られた点、松本市内初の柄鏡形敷石住居址を検出した点が挙げられよう。

注1 富川謙祐「寺院と仏教」『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二巻』 1968

2 痘原邦夫氏所蔵の慈眼寺と林村の土地訴訟文書。資料の掲載にあたっては周氏の快い承諾をいただきこの場を借りて御礼申し上げる。

3 太田陽春・小松芳郎「因説・松本の歴史 下」1986

2. 造構

(1)住居址

①第1号住居址

本址はI区東壁に沿い設定したトレンチの中央西壁下に検出された。造構は灰黒色土層中より掘りこまれ、下層の黄褐色砂層上面でプランを把握した。しかし造構のほとんどがトレンチ外にあり、円形であることは窺い知れるものの規模は不明である。壁は垂直に近く20cm程立ち上がり、壁沿いの床面は軟弱であった。

遺物は図示できるものはないが、縄文中期初頭の土器片が少量出土した。

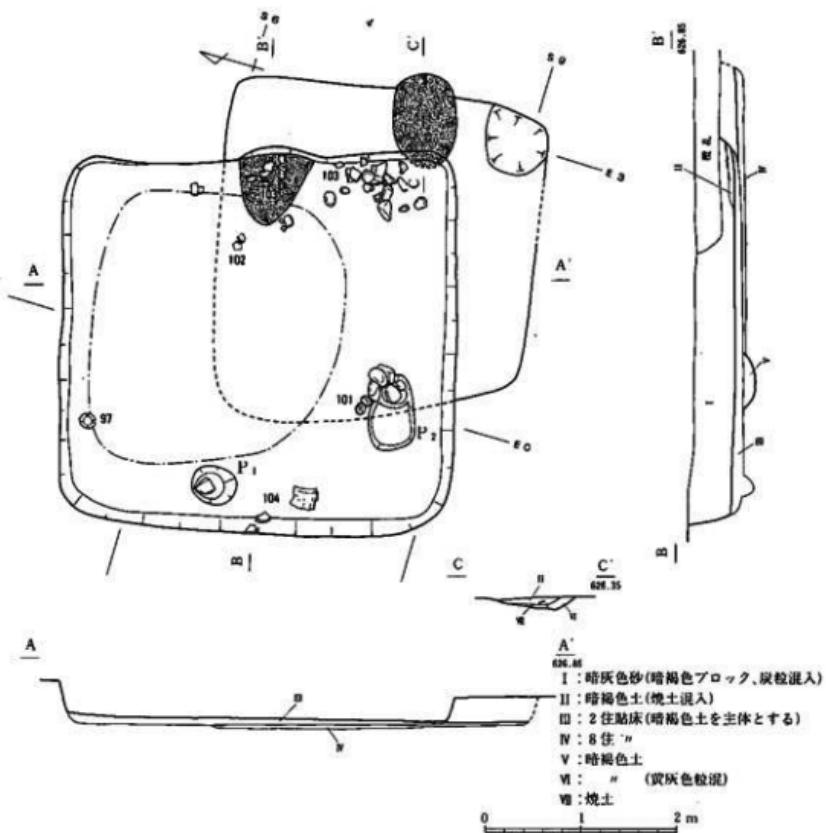
②第2・8号住居址（第6図）

第2号住居址 II区東寄りに存在する竪穴住居址で、8号住居址の大部分を切って構築されている。造構の輪郭は褐色土面で検出された。プランは南北4.15m×東西4.05mの方形で、主軸をN-74°-Eにおく。覆土は上～下層まで土質・土色は変わらず、黄褐色のブロックを多く含む一括埋土の様相を呈していた。垂直に掘りこまれる壁は容易に捉えられ、西側で48cmの深さを有しているが、東側を中心に軍機工場の搅乱で上部が破壊されていた。疊混じりの暗褐色土を貼る床面は壁下を除き堅く、特に8住との重複部分は平坦に良くたたきしめている。東壁の中央やや南寄りにはカマドが設けられているが、天井部・袖等は失われ、よく焼けた火床が残存しているのみであった。この火床面は舌状を呈し、幅75cm・奥行85cmを測る。底面は浅く7cm程くぼみ、土師器甕（103）が潰れていた。なおカマドの周囲には大小の石材が散在しており、特に南側壁下床面では拳大の礫が多く、これに混じってカマド内と同一個体の甕片が見られた。これらの石材は被熱しており、本来カマドを構成していたものとみられるが、状況より人為的に壊された可能性もある。その他床面には2基のピットが見られた。P₁は東壁下にあり直径47cm・深さ35cmの円形ピットである。内部には20cm大的の角礫が存していた。南西コーナー付近にはP₂がある。形態は東西に長く77×50cmの横円形をなし、東半は深さ15cmで2段に落ち込む。この部分には内部に2個の円礫が存し、ピット外縁にはやや大きい礫が4個、内部を囲むように配されている。その他には柱穴等検出されなかった。

遺物は縄文土器を除いて覆土中には少なく、床面近くに復元可能なものが5個体あった。まずカマド内およびその東側では先に触れた土師器甕があり、また西壁中央にも104の甕があり、その数片は壁に張り付いていた。その他北壁下には土師器内黒杯が床面よりやや浮き、正位で出土した。

本址の時期は土器よりみて平安時代前期（9世紀代）に位置づけられよう。

第8号住居址 2住にその大半を切られ、さらに戦時中の搅乱によりに覆土をほとんど削平された住居址である。従って造構は東～南壁・カマドの基底部と床面を残すのみであった。プランは一辺3.3mの方形で、2住よりやや小さいが軸は同方向である。床面は2住より若干高く、同様に暗褐色土を貼っている。カマドはやはり2住同様東壁中央やや南にあるが火床部を残すのみで、良く焼



第6図 第2・8号住居址

けた底面上には土師器甕片が遺存していた。ピットは南東隅に接して直径60cmの皿状に浅くくぼむものがある他、北西隅にも同形同大のものが見られる。

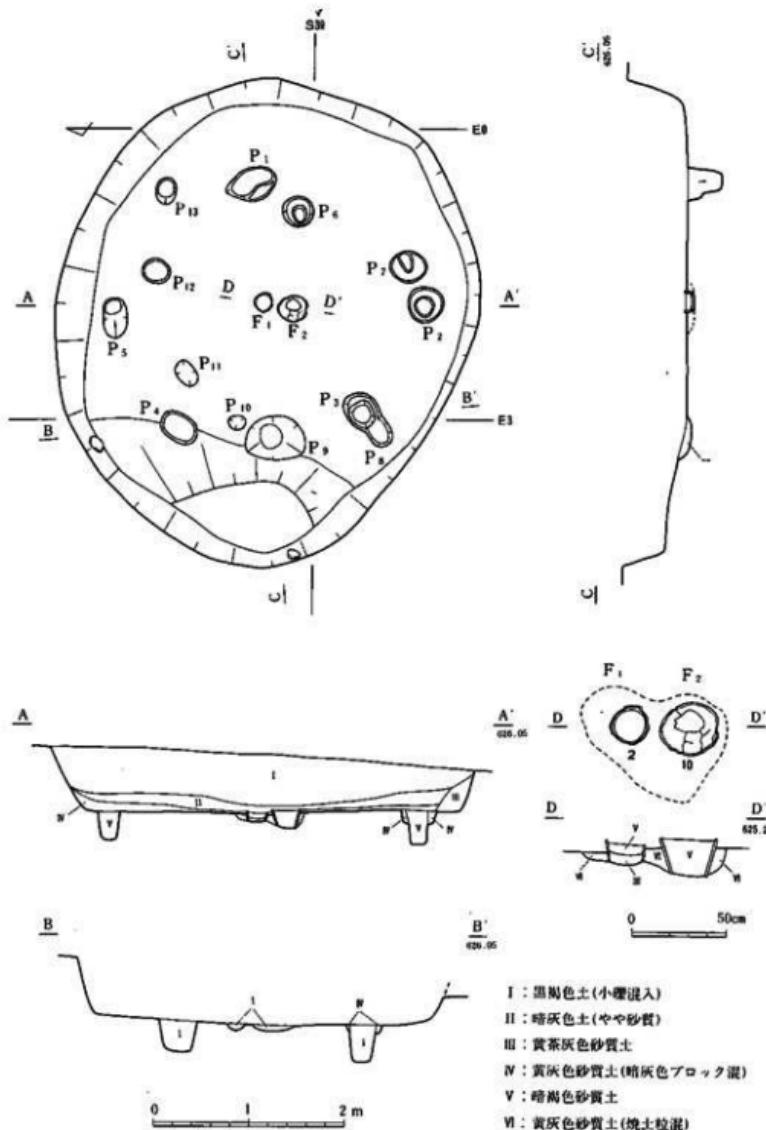
遺物は土師器小形甕・甕、須恵器有台杯・無台杯があるが量は少ない。これらの遺物より見て造構の所属時期は平安時代前期（9世紀代）で、後行する2住が軸、カマドの位置をそろえている点、土器は本址に多少古い要素があるものの大きな時間差が見られない点からして2住は本址の建て替えと思われる。

③第3号住居址（第7・8図）

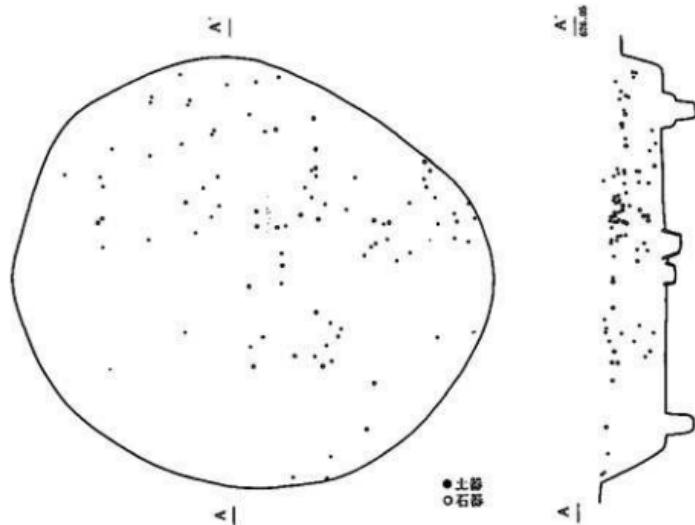
本址は田区北端に検出された竪穴住居址である。遺構は褐色土中より構築され、覆土も暗色のため検出は困難であった。他遺構との切り合い関係は南西部の上半を土壤21に切られ、北半覆土上面では柱列1が掘りこまれる。竪穴の平面形は西壁の尖る楕円形で、規模は東西5.1m・南北4.3m、ほぼN-90°-Eに軸を振る。壁は斜めに掘りこまれ、最大壁高68cmを測る。覆土は下層および壁下は自然堆積の様相を示している。しかし上層～中層にかけては黒色砂質土が厚く堆積し上層を中心には拳～人頭大の礫が投げこまれていた。下層ではこのような状況は見られず、明らかに人為の結果と考えられる。床面は黄褐色砂層にあるため不明瞭で、非常に軟弱であった。概ね中央炉址付近がやや低く、西壁下にはテラス状の高まりが存在する。炉・柱穴の位置より推して入口部としてよいだろう。炉は中央わずかに東寄りに存在する埋甕炉で、南北に2基が並ぶ。北側のF1は口径27cmの口縁部がキャリパー形に開く深鉢の下半部を欠いて用いる。土器（2）は正位に6cm程埋め込み、口縁部からの深さ17cmを測る。炉内には焼土・炭等見当たらないが、土器は被熱により器面が荒れている。尚口縁部は破損し、炉の付近より出土している。F2は外傾して開く深鉢の上半部を用い、はやり正位に埋設している。大きさは口径30cm・現存高21cmをはかりF1より大きい。口縁端部は欠損するが、床上に5cm程出ている。本炉も炉内には焼土・炭が見られないが土器は被熱していた。F1・2は共に床面上に口縁部を出しておらず、互いに切り合ってはいない。一方が破壊されていることもなく、このような状況からは炉の新旧は見出せない。しかし以下に述べる柱穴をみると1度の建て替えを行っており、炉はF1の劣化が著しい。おそらく建て替え時に先行するF1はそのままにして隣にF2を設置、住居の廃絶時まで双方を用いたのではないだろうか。ピットは全部で13基ある。このうちP₁～P₅・P₆・P₇が主柱穴と考えられ、直径40cm前後の円ないし楕円形、深さ30cm内外を測る。対応関係はP₁～P₅の5本が考えられ、P₆・P₇はそれぞれP₁・P₂に対応する新旧関係にあると思われる。その前後関係は明確に捉えられなかった。そのほかピットはP₈・P₁₂が柱穴に近い位置にあるが他のものとともに浅い。

遺物は土器・石器があり、全体に量は多いものの完形またはそれに近いものは少ない。土器には深鉢・浅鉢があり、石器は石鎌・石錐・石匙・スクレイパー・ビエスエスキーユ・打製石斧・磨製石斧・凹石・石皿等多種・多量に出土している。これらの遺物の出土状況は、炉に使用されていた深鉢2点を除き、そのほとんどが覆土中の出土である。特に前述の集石の有り方に対応して、覆土上層では全域に、中層では中央、各柱穴を結んだ範囲に集中する。そして下層～床面にはほとんど見られず、上層はより量が多い（第8図）。土器は破片がほとんどで、石器も他の礫とともに投げこまれている。覆土の堆積状況も考えると、住居が廃絶して一定の時間をおいた後に、遺物の廃棄が開始されほとんど埋没した段階でそのピークに達したものと説明できよう。

本址の時期は炉体土器よりみて縄文時代中期初頭と考えられよう。



第7図 第3号住居址



第8図 第3号住居址遺物分布

④第4号住居址（第9・10図）

本址はII区の中央西寄りに検出された柄鏡形敷石住居址である。プランは灰黒色土中で把握したが土色の差が微妙で、検出作業は困難であった。遺構は円形プランの主体部に長方形の張出部が取り付き、主軸をN-35°-Eに向ける全長7.05mの規模を有する。主体部は直径4.4mで残存壁高28cmを測る。東壁および西壁は調査時の誤認により上部を削ってしまった。張出部は長辺3.1m・短辺2.3mで25cmの壁高を有する。覆土は暗褐色砂質土の単層で、拳大～人頭大の円礫・角礫が多量に投げこまれている。張出部にはひと抱えもある大礫が多く存し、これは後述する遺構の一部をなしたものと考えている。また礫中に敷石の一部をなしたと思われる板石も見られる。

主体部の敷石は住居廃棄時に石材の抜き取りが行われ、西壁・東壁・北壁下に残るのみであった。覆土中には敷石に使われた石材は少なく原位置を保つ土器は土の面にのっており、あるいは炉址周辺には敷石は施されなかったかもしれない。石材は安山岩の板状節理を、30cm前後の大きさに加工して用いる。間隙には小円礫も用いるが、基本的には板状石で敷石を構成する。敷石面の輪郭は北壁下は壁に沿うが、東西壁側では直線的に配置しているらしい。南側は石材が残存せず、張出部との関係は不明である。炉址は主体部中央に石組炉が設けられる。形態は南北に長い長方形で、住居主軸と平行に設ける。内法は56×50cm・床面からの深さ20cm・炉石上端からの深さ33cmを測る。炉石は断面方形ないし長方形の礫を用い、西側は棒状のものを二重に配する。北側のものは被熱して表面が割れ、内側に倒れかかっている。また石材の下端は炉底までは及んでいない。炉底面は焼け

ておらず、73の深鉢下半部を中央に立てる。炉内の埋土はこの土器の上端と炉石下端を結んだ線で上下に分かれる。下層は焼土・炭を含む砂質の土で、人為的に埋め、この面を炉底にしているようである。遺物は炉内南端に石皿（51）があり、炉外では西側炉石外床面に注口土器（92）が立っていた。その他主体部床面の施設はP₁～P₃がある。P₁は円形、P₂は溝状のピットでどちらも浅く、本来は敷石下にあったものかもしれない。P₃は西壁下にある小ピットである。

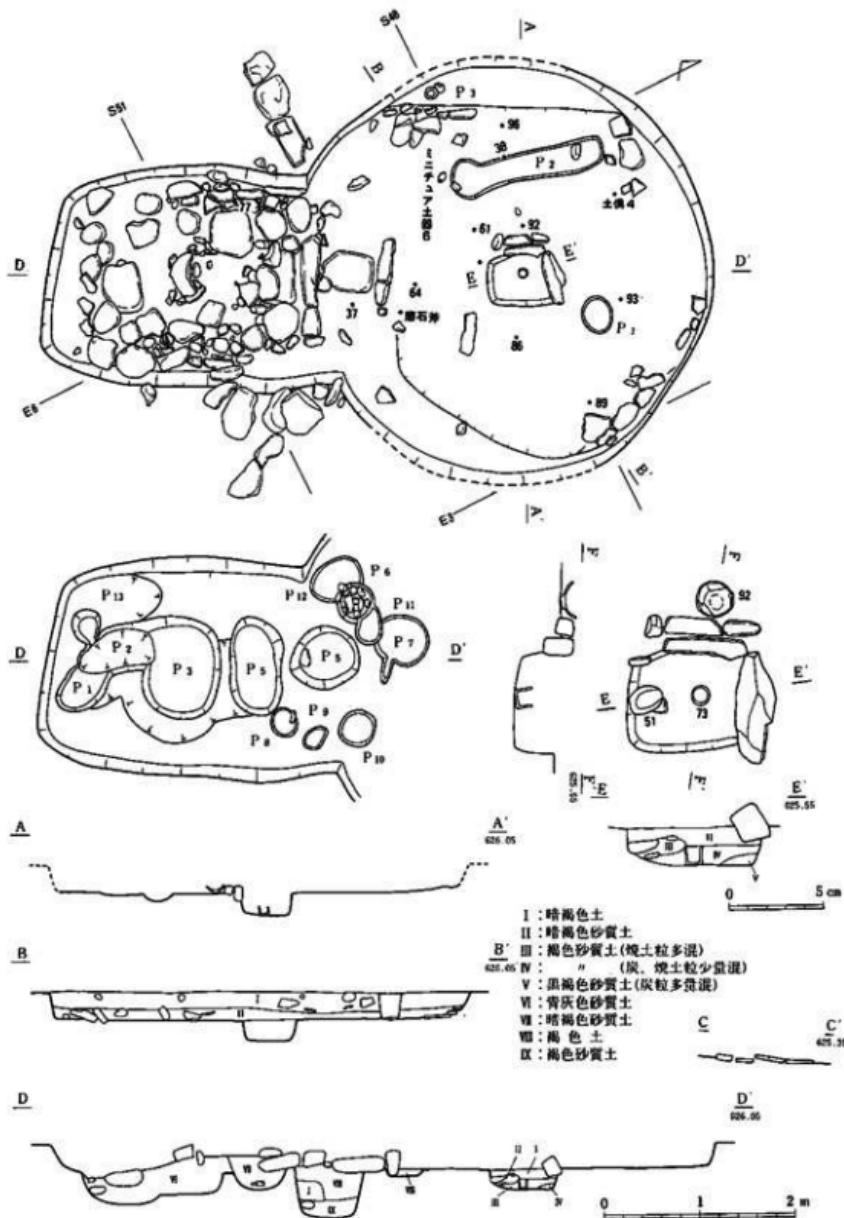
張出部の敷石は一部の石材が抜き取られ、南端付近では陥没しているものの、良好に残存している。石材は主体部とは逆に偏平な河原石を用い、板状の石材はわずかに間隙に詰める程度しか用いない。配置状況は東西壁下は棒状の円礫を壁に沿って並べ、区画としている。区画内は30～50cm大の円ないし方形の礫を縦方向3列に配する。このうち西側列北から3番目の礫は表面が磨かれている。また中央列は一部抜かれるものの大形の一枚石を連ね、他より列を明確に通している。列の北端は炉に向かって突き出しており、棒状の石材（いわゆるかまち石）を横たえる。この南には方形55cm大の平石を挟み同様の棒状石を置き、他2列と端をそろえる。さらに南隣には方形の大石を置いており、その南縁両側には石棒を立てている。東側の石棒は長さ30cmで約10cm床上に出ている。西側のそれは長さ47cmもあり、後に述べるピットにほとんどが埋没していた。

本址は床面の敷石に加え、張出部竪穴外にも配石が見られる。まず張出部東壁には肩に沿って長さ50cm前後・厚さ30cm前後の方形の石材を埋めこむ。住居址掘り下げ段階では同様の石材が張出部覆土中に散乱しており、壁をとりまいて組まれていた可能性がある。次に主体部と張出部の接点より翼状に同様の石材を3個置いている。これらの石材の上面はおむね平坦な部分を用い、レベルをそろえる。この上面レベルは検出面のレベルと同じで、また竪穴の深さからみても当然当時の地表はもっと高かったと思われる。従って当初はもう数段石垣状に重なっていた可能性もある。

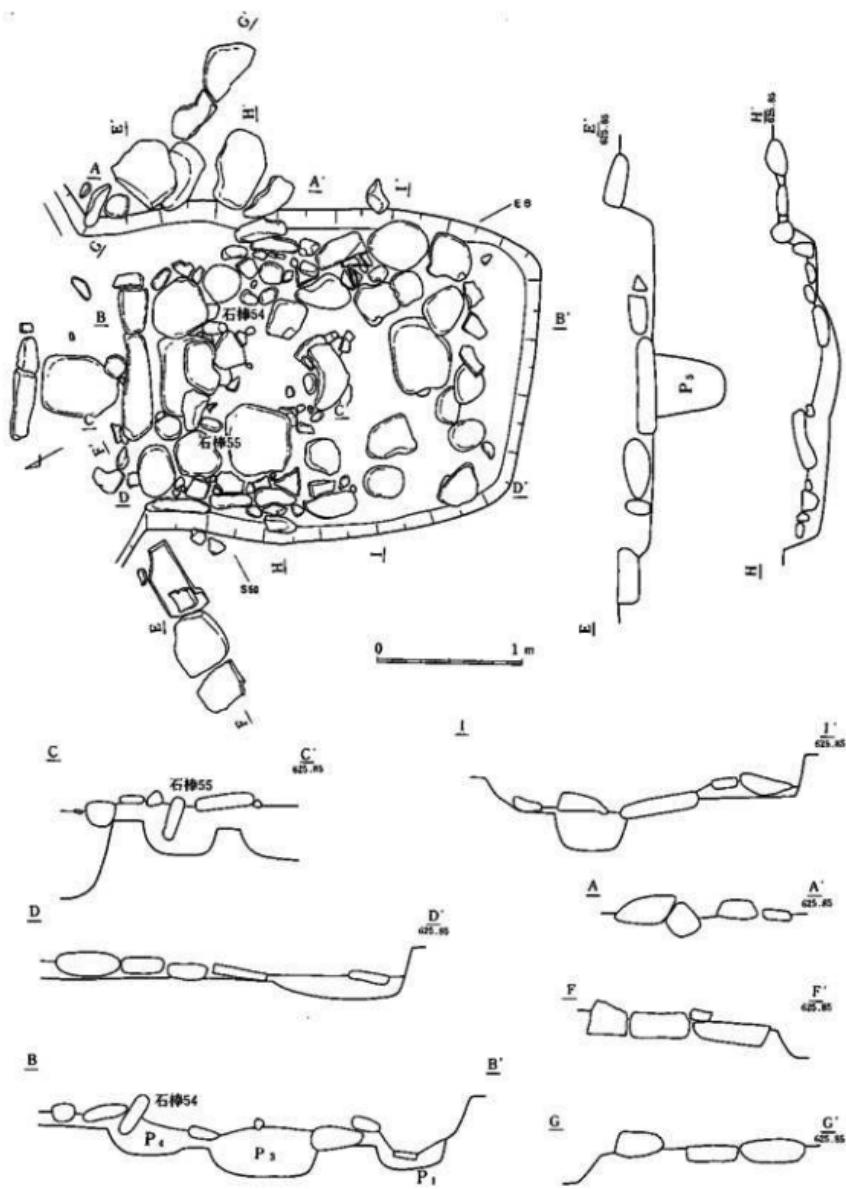
張出部の敷石を除去すると、大小13基のピットが検出された。この内P₁～P₅・P₈は敷石中央列下に位置する。P₁は北端のかまち石下部にある浅い円形ピットである。P₅は直径70cm・深さ53cmで、方形の断面を呈する。上面には大形の1枚石が載る。P₈は深さ20cmで、楕円形をなす。先にふれた石棒はこのピット中に入り込んでいた。また底面より5cm程浮いて板状の割石が沈み込むように6枚入っていた。P₃はP₄と同様の形態・深さをなす。上層には79の土器が存していた。P₁・P₂は不整な形態で、配置もそろわない。ピット中には敷石が沈み込んでいた。その他P₆・P₁₀はP₅の両側にあり、径40cmの円形を呈する。P₆は5～15cm大の礫が詰まる。

本住の遺物は量・種類共に豊富で、土器は縄文後期壙之内II式の深鉢・鉢・注口土器が主に破片で多く出土、石器では石鎌・ビエスエスキュー・打製石斧・磨製石斧・凹石・石皿・石棒がある。殊に凹石・石皿は量が多く、41点を数える。次いで石皿・磨製石斧も多い。土器・石器共その出土状況は大半が礫とともに投げこまれていたもので、石皿は破損品、二次加工が多く、敷石として使用されたものも多いと思われる。その他土偶・ミニチュア土器が出土している。

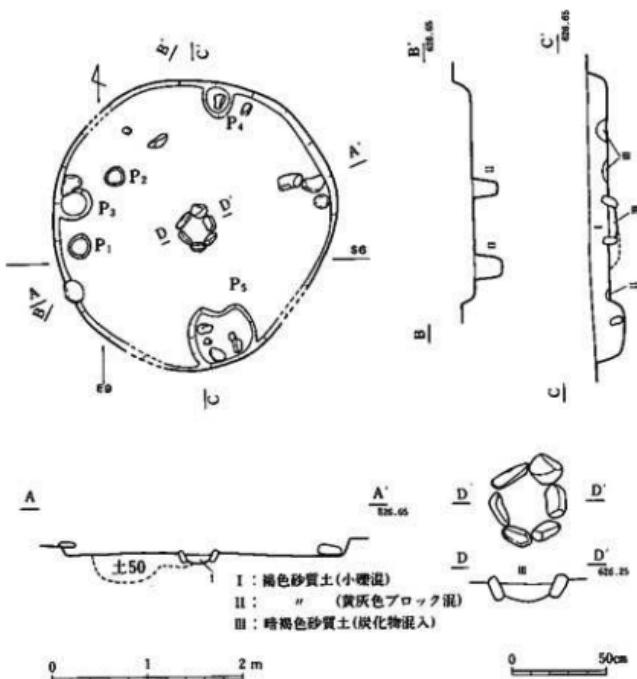
本住の所属時期は土器よりみて縄文時代後期壙之内II式期と考えられる。



第9図 第4号住居址



第10図 第4号住居址張出部



第111図 第5号住居址

⑤第5号住居址（第111図）

本住はII区西北隅に検出された竪穴住居址である。竪穴は褐色土層中より掘りこまれるが、検出が困難なため下層の黄褐色砂質土面で検出・掘り下げを行った。他遺構との重複関係は土壌150を本住が切り、土壌75・79・123には切られている。プランは直径3mで小形の円形をなし、壁はまっすぐに掘りこまれる。残存壁高は20cm前後で、壁面は比較的良好に残存する。主軸方向は入口部がはっきりしないため不明である。床面は黄褐色砂質土中に設けられ、平坦かつ堅緻であった。炉は床中央に存在する小形の石組炉である。長さ15~20cm・厚さ7cm前後の偏平な円碟6個を斜めに立て、円形に囲っている。上面での炉の内法は33cmで、炉石上端からの深さ27cm・床面からの深さ20cmを測る。炉底および炉内に焼土は見られない。ピットは5基あり、西壁寄りのP₁・P₂は径20cm前後、深さ30cm程で柱穴の可能性がある。しかし他に柱穴らしきピットは見当たらない。P₃は南壁に接して存在し、70×60cmの北壁がくびれる形態をなす。深さは15cmで内部には10~15cm大の碟5個が存在していた。他にP₅・P₄があるが、どちらも径30cm・深さ13cm程で壁に接している。

遺物は大変少なく、15片を拓影で示すのみであった(150~164)。その多くは縄文時代中期初頭に

位置付けられ、1片中葉のものが見られる。石器は石匙・磨製石斧が各1点ある。磨製石斧はP・東脇の壁に貼り付いていた。

本址の所属時期だが、土器の多くは中期初頭に属する。しかし炉は大きさ・形態を見る限り初頭には遡りえず、前葉～中葉、とりわけ後者のものに近い。従って1片のみだが存在する藤内式土器をもって本址の時期に当てたい。

(2)柱列（付図2）

III区に4列が検出された。柱列1は3住を切り、東西に2間分（柱間1.74～1.84m）が確認された。柱列2は調査区西壁沿いに5間（柱間1.77～1.95m）あり、4住を切っている。柱列3・4は柱列2より垂直方向に伸び、2間が確認される。当初2～4を含め掘立柱建物を想定したが、ピットの配列が合わない。これらの柱列はいずれも直径25cm前後、検出面からの深さ30cm程の円形ピットで構成される。覆土も大抵灰色の砂質土で共通しており、柱底をもつものも見られる。またピット底面には約10cm大の礫を置く例もあり、第4号住居址を切る柱列2のピット中には底面に4住の敷石を利用しているものも見られた。

柱列の所属時期は、伴出遺物がないため不明である。ピットの形態・覆土の色は松本市島立・島内等で調査がされた中世遺構のそれと近似しており、本址も中世かそれ以降のものと考えたい。

(3)竪穴状遺構（付図1）

II区より2基が検出された。竪1は2住の覆土中に掘りこまれ、大半を搅乱により失う。南北を向く一辺3m程の方形になると思われ、西壁～西北隅が残存する。壁高20mを測り、床面は平坦だが堅くない。竪2は調査区西南隅にあり、東西2.95×南北2.7mの隅丸方形を呈する。壁は5cm程を残し、床は平坦に造り出す。西～南にかけて拳～人頭大の礫が帯状に連なる。

竪1・2ともに出土遺物はないが、柱列同様灰色の覆土をもち、同時期の遺構と考える。

(4)集石（付図2）

本址はII区南寄りでの検出過程で礫の集中が認められ、遺構とした。礫は径2.5mの範囲にあるが、周囲は粗で、中央部一辺1mの三角形に集中する。礫は拳大の円ないし角礫を敷くが、重なりは認められない。また礫除去後に下層を精査したが土壙は見られない。

遺物は周辺を含め縄文時代中期初頭の土器片が散在しており、本址の時期はこれに求められよう。また礫中には凹石・打製石斧が見られた。

(5) 土壌・ピット（第12～14図・付図1・2）

今回の調査で検出された土壌は総数111基だが、これらは覆土・遺物の違いにより縄文時代のものと中世以降のものに分かれる。またそれぞれの内でもいくつかに分類しうる。

① 縄文時代の土壌

総数106基がある。その分布はII区全域に90基が広がり、III区は少なく南部にかたまっている。これらは全て中期初頭に属し、調査面積が少ないので全貌は不明だが、同時期の3住を境に北側に分布域があるといえる。またIII区南部は自然環境の項で述べた如く低湿地に接しているが、この周辺にも多少土壌が集まる傾向が見られる。

土壌の形態は基本的に円形と楕円形があり、不整なものもそのどちらかを基調としている。量的には円形が84基で8割を占める。円形土壌の平面規模は10～160cmまであり、30～80cmのものが主体的である。30cm以下のものはピットとすべきだがここに含めている。100cm以上のものは少数見られ、代表的なものに土壌21がある。楕円形は30～150cmあり、30～40cm・100cm以上のものを除けば円形よりやや大きく、70～90cmが主体となる。

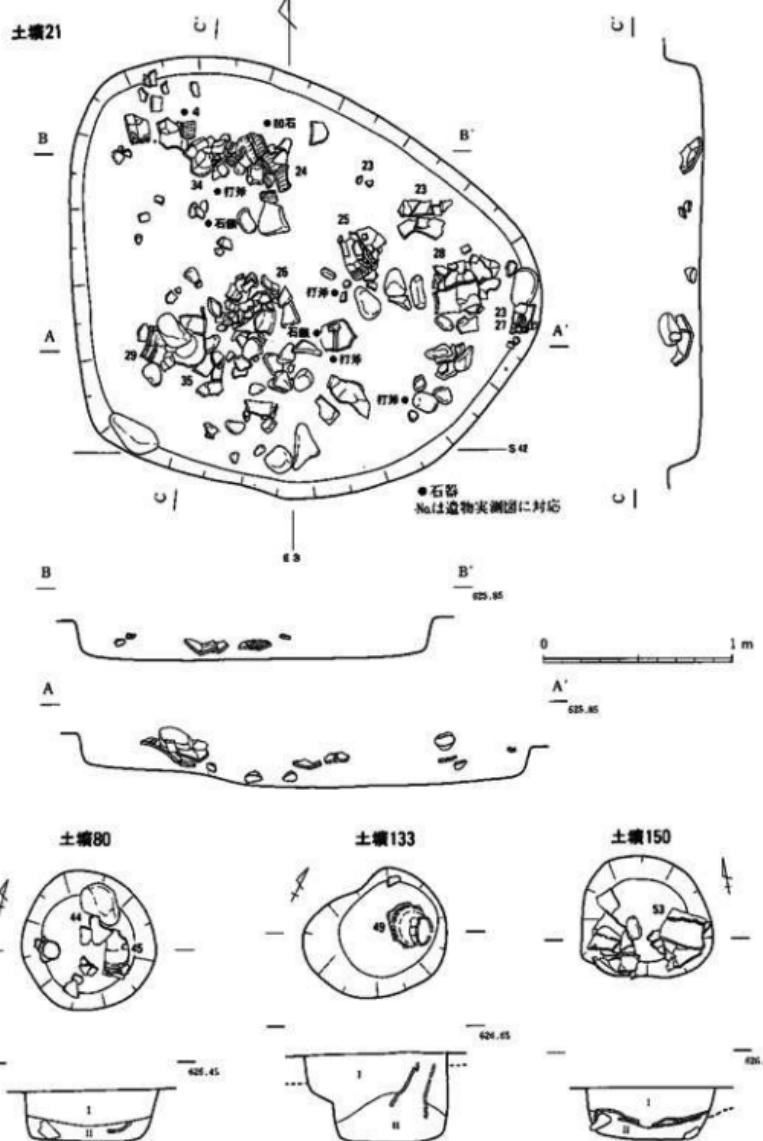
土壌の断面形はその多くが方形ないし逆台形で、壁下端が不明瞭な半円形またはすり鉢状のものは少ない。内部が袋状に広がるものは今回見られなかった。また断面が方形のものは深い傾向にある。平面形との関係は楕円形の大形のものに台形～半円形が多い点の他、特に傾向はない。その他底面が2段に落ち込むもの（土壌70・127・128・125等）も見られる。

覆土はほとんどのものが暗褐色～褐色の砂質土で、分層のできないものが多い。特にブロックを多く含む、人为的埋土を示すものもない。しかし覆土中に拳大～人頭大の礫を1～10数個意図的に入れるもののがII区に21例程存在する。礫は底面より浮いている場合とそうでない場合があり、当初土壌上、あるいは上層に組んでいたものが沈みこんだような状況を呈するものも見られた（土壌69・71・74・88・95等）。そして礫と底面の間には炭を多く含む黒色土が堆積している。

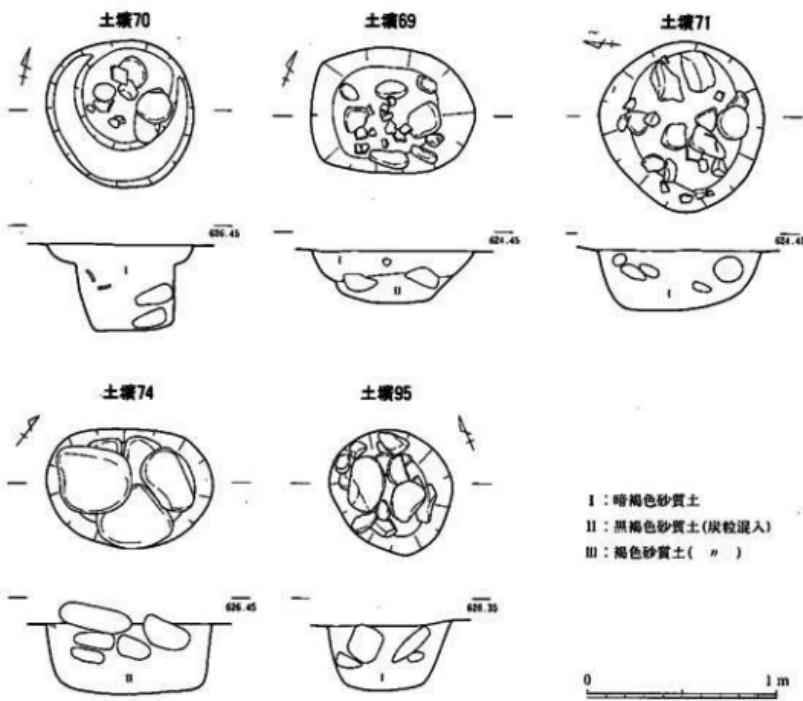
遺物の出土状況は、多くの場合土器小破片が覆土中に少量含まれる程度だが、比較的まとまって出土する場合は前述の礫の有り方と近似している。覆土中あるいは床面に完形に近いものが、礫とともに潰れて存在する場合である（土壌21・51・80・133・150）。土壌133は完形の深鉢（49）が覆土中に倒立していた。また土壌21は形態はむしろ竪穴に近いが、実測可能な土器が14個体、覆土中に潰れていた。しかし完形品は見られなかった。その他石器は各種出土しているが、土壌21を除けばその出土量は少ない。

② 土壌21

III区にあり、3住を切っている。平面形は不整円形ないしは隅丸の三角形を呈し、南北2.1m・東西2.6mの規模を有する。底面は南東側がややくぼみ、軟弱である。深さは約20cmと浅く、ほぼ同時期の所産である3住とは対照的である。覆土は炭を少量含む暗褐色土で、床より5cm程浮いた位置に一括土器や10～20cm大の礫を含む。



第12図 主要土壤 (その1)



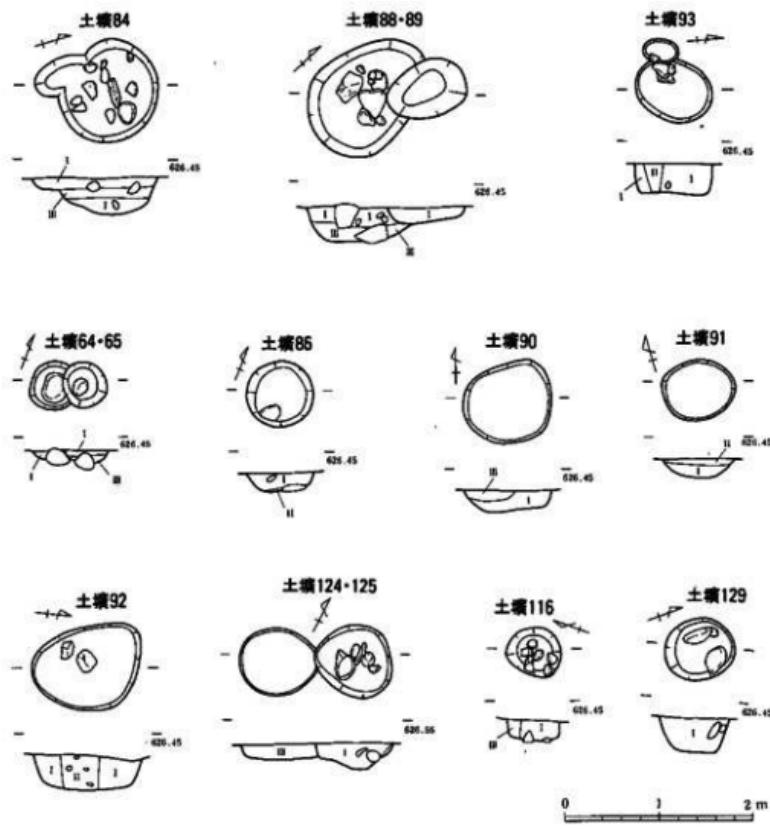
第13図 主要土壤 (その2)

遺物は復元可能な土器が14個体出土した。いずれも完形ではないが、24~29の深鉢は横倒して潰されている。34は他の土器と重なり合い、正位で出土している。石器は石鎚・打製石斧・凹石が合計18点出土している。土器群は中期初頭に属し、良好な一括資料である。

本址は3住に後行するが、土器の様相は差がほとんどなく、3住廃絶後比較的短時間のうちに當まれたものとみなされよう。

③中世以降の土壤

5基が確認された。いずれもIII区中央、柱列2・3に挟まれて存在する。土壤162~166は平面形が円~長楕円形をなし、底面から壁への移行がなだらかな皿形の断面形を呈する。覆土は暗褐色土と灰色土のブロックが混じりあっており、一括埋土の状況を呈する。土壤群の周囲には柱列・ピット等中世の造構が集まっており、一体となって機能したものと考えられる。



第14図 主要土壤 (その3)

3. 遺物

(1) 土器 (第16~43図)

今回の調査で出土した土器は大半が遺構出土だが、破片で存在するものが多い。ここでは遺構の枠を超えて、時代毎に分類して概観してゆきたい。なお個々の土器についての観察は、紙数に限りがあるため一切省いている。

① 繩文土器

第1群土器 前期後葉~末葉の土器を一括した。2類に分けられる。

第1類 諸穢C式に比定され、深鉢・浅鉢の破片が出土している。111・190・237~239は半截竹管状工具による細い平行沈線を地文とし、結節浮線を加えている。110・187~189・225・233は羽状等の平行沈線に円形の貼付をする。端部には竹管の押圧を施す。195は結節浮線を欠き、平行沈線を縦位の羽状に引く。いずれも深鉢の破片である。41は有孔浅鉢である。

第2類 前期末と思われる深鉢の破片2点を挙げた(112・113)。平行沈線、押引、結節浮線で構成される。2点共に器厚は薄手である。

第2群土器 中期初頭に位置づけられる土器群で、本遺跡の主体を占める。器形はほとんど深鉢のみで、鉢・浅鉢がわずかに見られる。以下深鉢を中心に、施文による分類を行いたい。

第1類 半截竹管状工具による平行沈線や単沈線を主要な文様要素として用いる土器をまとめる。基本的には繩文を用いないが、後述する第2類との関連で必ずしもその原則は守られない。文様帶の有り方により以下のように分類される。

A. (1・39・114・137~139・198・208・209・211・249・250・252・255・261・262・270・272~275)

いわゆる集合沈線文による横方向の文様帶を、口縁部~底部にかけて数段行うもの。器形は直線的に立ち上がる体部が外開し、口縁部がくの字状に内折するものと考えられるが、破片のみで全貌の窺えるものはない。口縁部の文様帶は2段になり、上段は羽状(1)・格子目(114・249)・山形波状(250~252)等の横構図を描く。下段は斜位の平行沈線が見られる(1・261・262)。261・262は上段を欠き、代わりに内面肥厚部分に格子目のモチーフを描く。114・249・250・252・255・261・262は端部に爪形文を施す。1は端部が外方にくびれず爪形文帯をもたないが、推定1単位の耳状の突起を有する。体部の文様帶は3段前後に分かれるとと思われ、上2段は横方向に格子目(138~140)瓦状押引(139)などの沈線施文をする。対して下段では縦位に羽状・山形波状文・直線文等の沈線施文が見られ(138~198・208~210)、また山形波状文や直線文を曲線構図で区画するものもある(137~209~210)。なお39は半截竹管状工具を用いておらず、雑な施文をしている。

B. (14~48・50~116~119・134~192~197・201~215~234~250~252~255~258~263~264~269~277~279~282~284)

破片での出土は多いが、全形の知れるものはない。ややふくらみをもった体部より縁部が屈折し

て開き、くの字状に内傾する口縁部をもつ。文様はAと同様、横方向の沈線帯を多用するが、平行沈線はAより粗大で、2単位ないし4単位の沈線または隆線による懸垂文を加えるものが多い点、区別される。口縁部は端部・脣曲部に爪形文を施す。口頭部の文様帯は上下2段構成で、上段は交互刺突文を多用(117・253・254)し、他に斜線文(258)・直線文(48)等が見られる。263・119・116は無文である。下段は平行沈線による格子目モチーフ(117・253・264・269)・縱線文(258)の他、無文(254)や数条の短沈線を巡らすもの(119)もわずかに見られる。体部は次のCと区別できなものもあるが、懸垂文の区画内に横方向の沈線施文を行う。平行沈線による直線文・斜線文・縱線文・格子目文(50・140・192・197・201・215・279・282)、交互刺突文(284・275・281・276)、逆U字形の区画文(196・234・277)が見られる。これらの横方向施文は大半が体上部までと考えられ、下半部に及ぶものは少ない。懸垂文は隆線(197)・平行沈線による直線と波状文(134)がある。Aでは縄文は見られないが、Bでは体部に縱位の縄文を施すものがしばしばみられる(134・234・277)。その技法は第2類と共通する。

C. (22・24・43・44・115・182・199・226・230・266)

図示した数は少ないが、器形の窺えるものが多く、本類の主体となる土器群である。3住・土壙21等に優品をみる。Bで見られた口頭部文様帯の上段が欠失し、交互刺突文が見られない点に特徴がある。器形は口縁部がキャリバー形に内湾して開き、体部は直線的なものと肩の張るものがある。文様帯は口縁部と体部に分かれ、後者が無文となるものが1点ある(43)。口縁部は端部直下に平行沈線を1~2条引くのが常で(22・44・115・266)、端部に爪形文を施すものもある(22・24)。44・266は縄文帯を置き、第2類との関連を思わせる。頭部にかけては縱位ないし斜位の平行沈線を充填する。24・44は一部横位の沈線を4単位入れ、円・三角形・7字形・蝶形・橋状等貼付突起を施し、全体として8単位構成になっている。体部は縱位・横位の平行沈線を横方向に巡らすが、24は結節隆線の懸垂4単位・沈線の懸垂8単位を施文する。その他頭部下に数条の平行沈線や単沈線・交互刺突を巡らすだけのものも見られるが(182・230)、D・Eのものかも知れない。

D. (2・4・45・49・123・165・175・176・244・246・251・259・260・265)

Cの省略形である。口縁部文様帯は端部に沿って平行沈線ないし単沈線を1~数条巡らすだけである。交互刺突(176・260)・沈線に沿う刺突(45・49・244)等も少數見られる。爪形文は見られず、代わって口唇や隆線上に刻目を加えるものが目立つ(2・4・45・49・165・176・246・260)。体部も省略傾向が窺え、頭部下に文様帯が巡るのみである。特に49は肩部に刺突文と単沈線を巡らすのみで、体部の大半は無文である。懸垂文は2・265に見られ、前者は8単位の施文となる。また逆U字形・V字形の貼付突起が頭部にみられる(45・49)。器形はCと同様のキャリバー形、頭部が2段にくびれるもの(4・49)がある。波状口縁が両者にみられる。

E. (130・131・141・142・256~258)

口頭部が短く、無文帯を置くものを一括した。器形は口縁部が短く内湾して開くもの(141・256・

257) と、底部がやや張り出し体部から外反して開く器形 (131・142・268) があり、前者には体部が張るもの張らないものがある。体部の文様帶は C・D と同様の構成をとる。

F. (25・51・56・57)

口頭部文様帶そのものを欠失する一群をまとめた。器形は単純に外開するか、ゆるく張る体部に短くくびれる口縁部を取り付く (51)。文様構成は上部が横方向の構成、以下懸垂文等縦位の構図となる。25は下半が省略される。施文は刺突または交互刺突を伴う単沈線 (25・51)・梯子形の単沈線による懸垂文 (51・57) の他、57は沈線間に刺突を充填している。

以上第 1 類のうち、本遺跡では C~F が主体的に存在している。

第 2 類 本類は縄文や細線文を地文として多用する土器群である。量的には第 1 類を上回り、本遺跡の中期初頭土器では最も主体的に存在するものである。文様帶の有り方により以下のように分類される。

A. (40・55・124・169・186・228・242・285)

口頭部に地文として細線文を用いる土器を A とする。量的には少ないが、器形の復元できるものが 2 点存在する。器形は頭部が 2 段にくびれ、底部が張り出す器形 (40・186・242) か、キャリバー形に開く口頭部をなすと考えられる。口頭部の文様帶は 2 段になると思われ、上段は縦位の細線文を横帯させ、下段も横方向に三角印刻文 (242・285)・半截竹管状工具による刺突文などを連ねる。186は無文帶になっている。口縁部は平縁だが、40のように突起を 4 単位付するものを見られ、また 40・186 は頭部に橋状の突起も加えられる。体部は 40のみ確認でき、結節縄文を縦位に間隔をあけて転がしている。55は鉢形の土器であるが、爪形文を付す端部直下に細線文帯が見られ、爪形文を付した隆線によって口縁部を区画している。体部は隆線に沿って平行沈線による Y 字状文を連続させている。この Y 字状文は深体の体部にも施されるようである。

B. (3・5・7・11・23・26~29・42・53・60・120~122・125~129・132・133・135・136・144・167・168・170~173・179~181・184・185・194・200・203~205・207・212~214・217~224・229・235・236・240・241・243・245・247~248・283・287)

口縁直下に横方向の縄文帯をもつ土器群である。実測図・拓本とも多くを図示した。文様帶の有り方は a 縄文帯以外無文の構成をとるもの、b 口縁部文様帶をもつが体部は無文となるもの、c 口縁部・体部ともに文様帶をもつもの、の 3 者に分けられる。しかし破片の中にはこの関係に分離できない小破片が多く、ここではまとめて、文様帯毎に記述を進める。量的には 3 者とも大差ない。器形はキャリバー形に内湾して開く口頭部に直線のかゆるくふくらむ体部が取り付くものが多く、少量単純に外開する器形が加わる。両者とも波状口縁は少ないので、端部の小突起は多く見られる。縄文の施文は口縁部では端部にそって帯状に横回転させるが、全面同方向に施すものも見られる (60・167・170・184・218・240)。28は縄文帯でなく、爪形文を 2 条加えている。体部は縦位に、若干間隔をあけて帯状に施すが、間隔の詰まるものや重なるものもみられる。11は全面横位に施文

するが原体も特殊であり、外来要素として後に触れる。原体は単節LRが圧倒的に多い。縄の両端もしくは片側には結節を付するのが常であり、後者が多くみられる。その他特殊なものは後述する。口縁部縄文帯と文様帯は1~2条程の平行沈線ないし単沈線で区画される。沈線には下向きに刺突を加えることが多い。端部側面にもしばしばみられ、また端面に刻目を加えるものも存在する。文様帯は5・26・184のように平行沈線により縦線・くの字形・鍵形等のモチーフで構成されるものや、7字状・橋状等突起を4単位加えるものが見られる。波状口縁の場合は波状部に218・204・171等沈線・隆線の渦巻文が施される。体部と頸部の区画は隆線により行われ、縄文が横位に施される。隆線に沿って刺突を施す沈線がしばしば施文される(5・53・121・218等)。体部の文様帯は横位の文様帯のみの場合と、懸垂文を4単位前後加える場合とがあり、後者は少ない(23・135・179・180・219)。モチーフはY字文あるいはアーチ形の懸垂文を連続させるもの(5・144・213・23・236)・沈線により横帶区画を設け、直線・くの字形・U字形・逆V字形・鍵形・菱形等の構図を組み合わせるもの(26・28・144・181)・弧線により三角形の横帶区画を描き、内部に渦巻文・円文等を配するもの(27・53・133・282)が多く見られる。その他の文様としては11は縦位・横位・斜位の沈線により区画文を描き、219は懸垂文と渦巻・弧線文を組み合わせる。3はV字形の貼付と横位に縦位沈線を巡らしている。

C. (147・195)

2点のみだが、鍵形の沈線や隆線の構図をもち、縄文を施文しないものを挙げる。両者ともキャラパー形の口縁部をもつ器形で、147は体部が張る。195は口縁端部に刻目を施し、鍵形に隆線を配する。隆線にも同様の刻目が加えられる。147は口縁部にY字状の印刻を垂下させ、体部には鍵形の平行沈線をY字状の印刻文と組み合わせて充填している。

D. (6・8)

口縁部の縄文帯・施文が見られないものである。6は波状口縁を呈し、端部及び頸部隆線に刻目を付す。V字状の突起を貼付、縄文を縦位に施す他施文されない。8は外反して開く小形の深鉢で、4単位の波状口縁頂部に刻みを入れる。波状に対応して隆線の懸垂文を4単位描き、縦位に縄文を施文する。

E. (9・10・38・46)

全く施文されない一群である。他の第2類土器同様、口縁部が内湾して開くもの(9)と、外開するもの(10・46)とがある。46は4単位の突起があり、対応して貼付文を施すようである。

第3類 第2群土器には少量、外来系の土器が伴っている。その比率は数%でごくわずかである。大きく3系統に分けられる。

A. (11・45・143・148・231・286)

器形・技法・胎土等は在地の特徴を有するが、特殊な縄文原体により地文を施すものを一括する(注1)。148・286は木目状撚糸文を縦位に押捺する。原体はLの撚糸を用いている。231は網目状

撚糸文を縦位に施文している。45・143は一見無節Lのようだが直前段反撚Lの原体を縦位に回転させている。11も網目状撚糸文に見えるが、網目の中に別の原体が観察でき、無節Lの原体に「」の原体を網目に巻きつけた付加条L+「」の繩文と判明した。これらの繩文は本群には非一般的なものであり、広く北陸～東北地方との関連で考えてゆく必要があろう。

B. (18・19・178)

東海系の土器をまとめる。器形の窺えるものが2点ある。18は体部が張り、短くくびれる口縁部をもつ深鉢で、口縁部・肩部にほどこされた爪形文帯が特徴となる土器である。口縁部の爪形文帯は3条あり、低い隆線上に施している。端部に沿うものは2個1単位の小突起に繋がる。頭部無文帯には橋状の把手が推定4単位貼付され、口縁部下段の爪形文帯と連結している。肩部以下の施文は細かいRL繩文を横位に施文した後、上端をくさび形に印刻した縦位沈線を充填している。178は18と同様の施文をもつ深鉢把手部分であろう。19はやはり頭部に無文帯をおく深鉢で、頭部がやや内湾するほか直線的に底部より開く形態をなす。端部は小突起を有し、半截竹管状工具の腹部で整形をしている。口縁部の施文はRL繩文を横位に施した後太い平行沈線を巡らし、三角形の印刻を連続して加える。頭部には橋状の把手が付加され、把手にも繩文を施している。体部は18と同様の縦位沈線を施文するが、把手と接する部分にはU字形・逆U字形の平行沈線の結合した懸垂文を加えている。地文はRL繩文を横位に転がしている。293は18と同じ器形になると思われるが、施文は体部に刺突を付加した太い平行沈線で区切る繩文帯を配している。4点ともに胎土には雲母の微粒や石英が目立ち、在地のものとは異なっている。内面の整形は横方向の工具によるナデを行っている。これらの土器は東海地方の北襄C1式の特徴を備えており(注2)、18・178は第1類、19・293は第2類に相当すると思われるが、製作地は不明である。

C. (154・294・295)

関西系のものを一括する。295は口縁部破片である。キャリバー形に立ち上がる口縁部は端部が水平な面をなし、外方に拡張される。外面端部より2cm程度がった位置には頂部が稜をなす横走突帯が貼付され、内面にも1cm程度下がって稜をなす突帯ないし段が付加される。それぞれの突帯と端部の間は内湾した形状になる。施文は外面のこの内湾した面に、特徴的な節をもつRL繩文が横位施文され、外面突帯・端面・端部内面には爪形文が施されている。爪形文はゆるく、C字形を描く幅1.2cmの工具を用いる。154は体部破片で、節の細長いRL繩文を斜位に回転し、網目を縦位に作り出す。294は体部上半と思われ、幅1cmの連続爪形文を横走・斜走させ逆三角形の構図を描くようである。地文はRL繩文を横位充填する。これらの土器の諸特徴をまとめると154・295は硬い繊維を燃ったような、細長い節目のRL繩文をもつ、295・294は爪形文を多用する、薄手に作られる点が挙げられよう。胎土は砂粒・石英粒を多量に含むが、硬く焼きしまっている。これらの土器も在地の土器とは胎土が異なり、搬入されたものと考えられる。そして器形・文様は関西地方の大歳山式～鷹島式に見られるものである(注3)。

以上、第2類土器を概観してきたが、ここで簡単に各類の位置付けをしておく。なお今回の分類にあたっては、当該期の土器編年が混乱している状況の中、三上徹也氏の指摘する縄文系・沈線文系の2系分類（注4）が合理的かつ学史の原点にたちもどったものと考え、参考とした。土器型式についても所謂踊場式から神殿・唐沢式までを梨久保式とする立場をとった点付け加えておく。

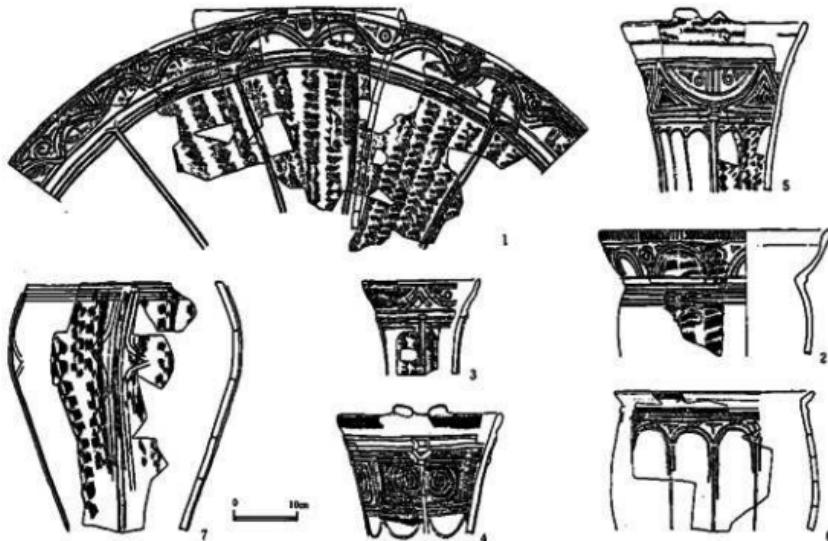
第1類A・第2類Aは從来踊場式・梨久保式とされてきたもので、古い段階に位置付けられる。本類の確実な遺構は土壙51のみであるが、39の構図が雖に描かれる点・40の口縁部が梨久保遺跡等の典型例（注5）よりも短くなっていることなど若干下るものと思われる。

第1類B～Fは山口明氏がF形態としたもの（注6）に概ね該当する。くの字形の口縁部や交差刺突文を多用するCは原村大石遺跡（注7）や八王子市西野遺跡（注8）に多く見られるが、本遺跡ではほとんどないといってよい。これらB～Fの相關関係については山口氏も指摘しているようにいまだ判然としていないが、本遺跡ではCの多くに施文技法の古さを感じ、D～Fの多くとは時間差があるかと思われる。これはCよりもD～Fの形態が新しいという事ではなく、D～Fの多くに対応するCの形態が本遺跡では欠如しているものと考えたい。わずかに116や119等簡素なものがそれに該当しようか。今後検討を進める必要があろう。

第2類Bは本群で最も多く見られる一群で、宮の原貝塚（注9）に類例が多くみられるようである。土壙21で第1類D～Fと共に存し、これと併行すると思われる。C～Eも同様と思われる。

まとめてると本遺跡の土壙21の一括土器群に代表される第1類C～F・第2類B～Eはおおむね一つの時間的まとまりを持つものと考えたい。そして第3群が客体的にこれに伴っているのであろう。この中の時間差・型式差などは紙幅・時間に余裕がなく、執筆者の浅学も手伝って今回成しえないが、最後に松本市内で当該期のまとまった資料をもつて雨堀遺跡と比較をしておく。

雨堀遺跡2次調査土器一括廃棄遺構出土の土器（注10）は、器形的には本遺跡に主体的に見られるキャリバー形・底部より直線的に開く形の深鉢がみられる。しかし頭部が2段にくびれるものはない。施文は縄文系では口縁部や体部に単沈線による弧線文を連ね、円文・三叉文の所謂玉抱き三叉文を区画内に配するもの（第15図1～5）、懸垂文として単沈線をアーチ形に連ねるもの（同図5・6）が主体的にみられる。地文は縄文を口縁部は横位、体部では縦位に施す。沈線文系は明確に独立して捉えられるものは少なく、先の弧線文を口縁部に配する土器体部に隆線の4単位懸垂文と頭部に沿って数条引かれる沈線文の構図（同図1・3・7）が見られる。本遺跡との関係をみると、第15図1～3の弧線文・玉抱き三叉文を口縁部に横帯させる手法は本遺跡では見られない。7の体部に弧線による横帯区画文を構成する手法は、第2類Bの27・53・181等に見られ、特に53は単沈線を用い、構図は雨堀のものに近い。逆に181の菱形・逆U字形のモチーフは古く第1類Aの体部下半に見られるものであり、全体的に本遺跡のものが先行する要素をもっている。アーチ形の懸垂文もY字状文や23・236の系譜上にあると考えられる。沈線文系も体部の横位文様帶が縮小・省略された形と考えられる。さらに雨堀遺跡では単沈線に角押文がみられ、前葉段階へ繋がる内容をもってい



第15図 雨堀遺跡2次調査出土遺物

る。

このように両遺跡の土器群は連続する要素をもちつつ、雨堀遺跡により新しい要素が見られる。また雨堀1次調査B1住（注11）では雨堀2次資料に統く、梨久保式最終末の一括資料が得られており（注12）、ここに松本平での梨久保式後半の変遷段階として林山腰（土壙21）——雨堀土器一括廃棄——雨堀B1住の羅列が可能と考えられる。

第3群土器 中期後葉～末葉に属する土器である。20・21は台付土器で、接合部に隆線を1条巡らす。298は唐草文系の深鉢体部下半で、U字形に巡らす隆線内外に斜行沈線を充填する。曾利III～IV式に併行しようか。297も唐草文の深鉢で、C字文が見える。曾利V式併行であろう。

第4群土器 後期前葉～中葉の土器を一括する。

第1類 堀之内II式に比定される一群で、第4号住居址出土品が大半を占める。

A. 精製土器 本類の多勢を占める。器形は深鉢・鉢形土器・注口土器が見られる。

深鉢A (62～67・299・302・320・321～325・332・331)

外反して開く器形を呈する。端部内面は若干肥厚するか、沈線を1条巡らす(61・63・299)。大半が平線だが、波状を呈するものも少数見られる(63・299・325)。63は内面の文様帯、端部の押圧をもち、鉢形土器の口縁部に似る。外面口縁下にはヘラ状工具の刻みを施した隆線が1条巡らされ、4単位ほど8の字状貼付文を施す。隆線を沈線に置き換えたものもある(61・65・302・323)。体部の文様は体中央部に1条の横走沈線を引き、口縁との間に横位の区画文を描く。区画文は三角形

(61・64・67・299~301・324)・菱形(63・65・302・325)・曲線(332)・無文(323)が見られる。区画沈線は2~3重に引かれるが、時に多重のものも見られる(324~325)。区画内はL R繩文が施される。

深鉢口(68・304・305~310・313・314・319・326・327・329・330・334~340)

体部が張り、ゆるく収束した頸部より外反する口縁部をもつ深鉢である。端部は短く内屈し、外面に太い沈線を巡らす。小さく波状をなすものが多く、円孔・渦巻文・縦位の弧線を組み合わせた突起が付加される(68・304・305・307・308・326・327・330)。頸部は無文で、体部と口縁部を繋ぐ刻目を施した隆線が下りる。体部の文様は8の字状貼付文・刻目を施す横走隆線で頸部と画され、以下縦位を基調とした弧線・曲線・渦巻文・列点等による重線モチーフを描く。縄文はL Rが多い。

鉢形土器(77・78・328)

数量は少ない。体部が丸く張り、口縁部は屈折して大きく開く。口縁内面には太い沈線を2~3条巡らし、77は端部に刻目と5?単位の押圧を加える。体部文様帶は横位に行い、77はJ字文を、78は縦位4単位の刻目隆線・横走沈線の区画内に渦巻モチーフを描く。

注口土器(76~92・343・344)

完形品はないが個体数が多い。器形は体部中央がふくらみ、器高に比して最大径が大きい。把手は1対が取り付き、上端には円形の突起が付される。有文(79~81・343・344)と無文があり、前者は体上部に横位の文様帶をもつ。内容は曲線・円・渦巻文による磨消縄文である。把手も沈線で加飾され、突起には渦巻文等付される。

B. 粗製土器(93~96・341・342)

深鉢がある。腰が張り、頸部がくびれる形態をなす。小形品(93)と大形品(95・96)があり、後者が多いようである。口縁部は小突起を4~8単位付すものが見られる(93・96)。体部は無文で、外面には左上がりの、口縁部では右から左へのケズリ痕が観察される。ケズリの後にはナデを施すようだが、徹底されていない。内面は横位ないしや左上がりのナデ痕が見られる。

C. 外来系の土器(351~352) 4住に2片(同一個体)見られた。胎土に石英を多く含み灰色~明橙色を呈する、見慣れないものである。器形・文様も異なり、他地域からの搬入と思われる。

第2類(345~350) 加曾利B式土器で、注口土器片が4住より得られている。体部上半を中心、櫛歯状の施文具により半円・羽状等の構図を描く。胎土は第1類のものより精選される。

注1 原体の解説にあたっては島田哲男氏の示教を受け、11・45の実測図も氏にお願いした。

2 増子康眞「東海西部の縄文中期半期半型式縄年試験」『岐阜県八百津町南森道路発掘調査報告』八百津町教育委員会 1980

3 関西系土器については山岸洋一氏の示教を受けている。

4 三上勝也「縄文時代中期初頭土器の分類と検討」『型久保遺跡』興谷市教育委員会 1980

5 例えば注4文献の第7回66など。

6 山口明「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」『駿河史学』第43号 1978

7 伴宿夫他「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財公庫地発掘調査報告書』原村その1 1976

8 東京西縄及び北八王子市竈町所遺跡調査会「北八王子西野遺跡」 1974

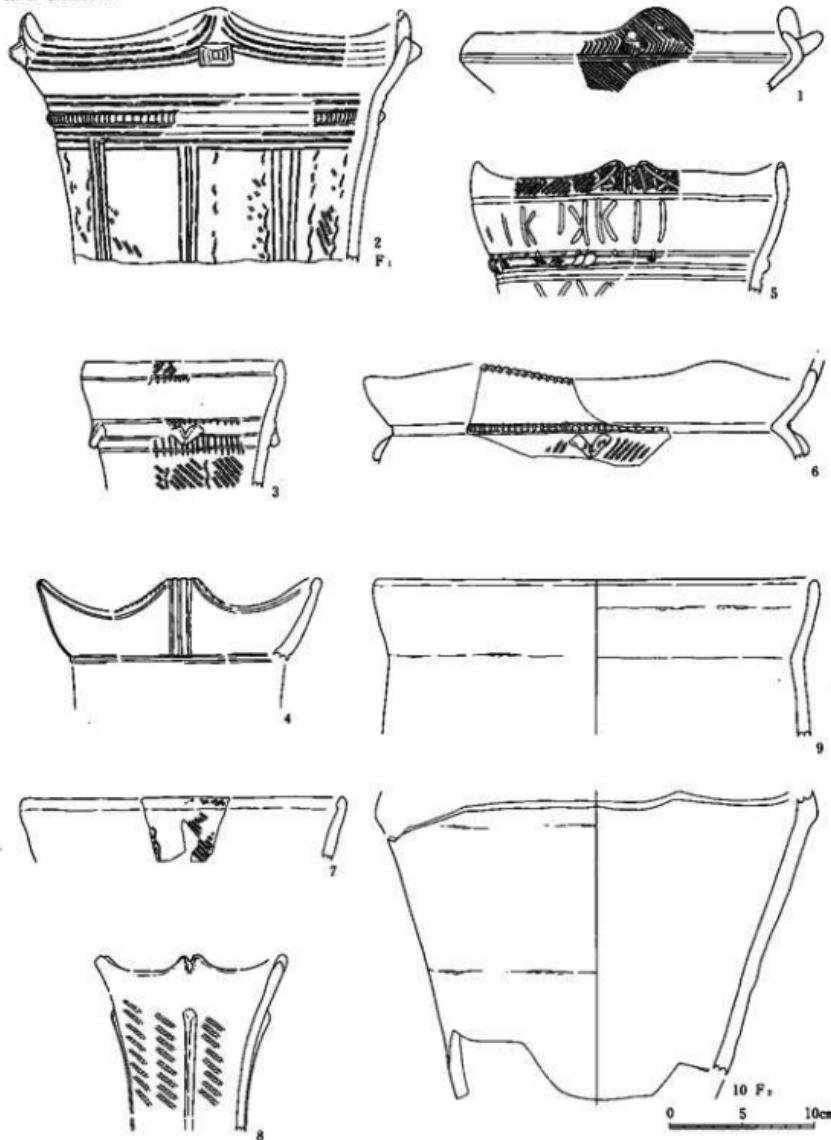
9 今村恭輔他「東の原貝塚」武藏野美術大学考古学研究会 1972

10 松本市教育委員会「松本市内田雨森遺跡第一第2次発掘調査報告書」 1982

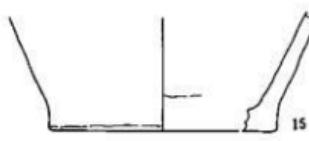
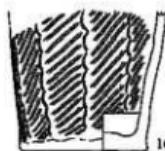
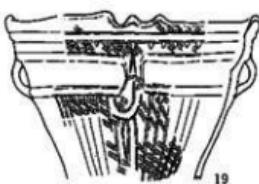
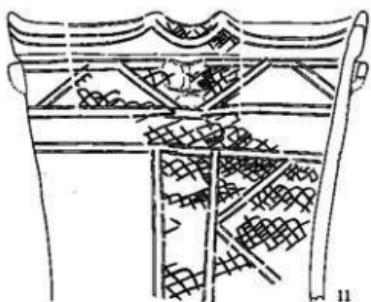
11 松本市教育委員会「松本市内田雨森遺跡第一緊急発掘調査報告書」 1981

12 注11文献参照。位置付けについては注10文献において島田哲男氏が行っている。

第3号住居址



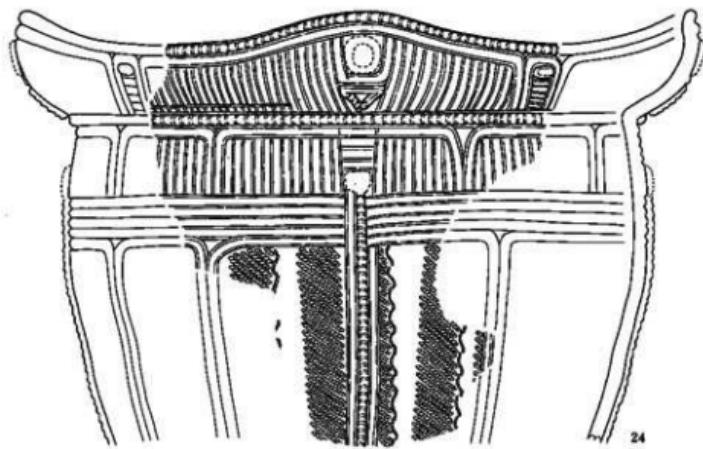
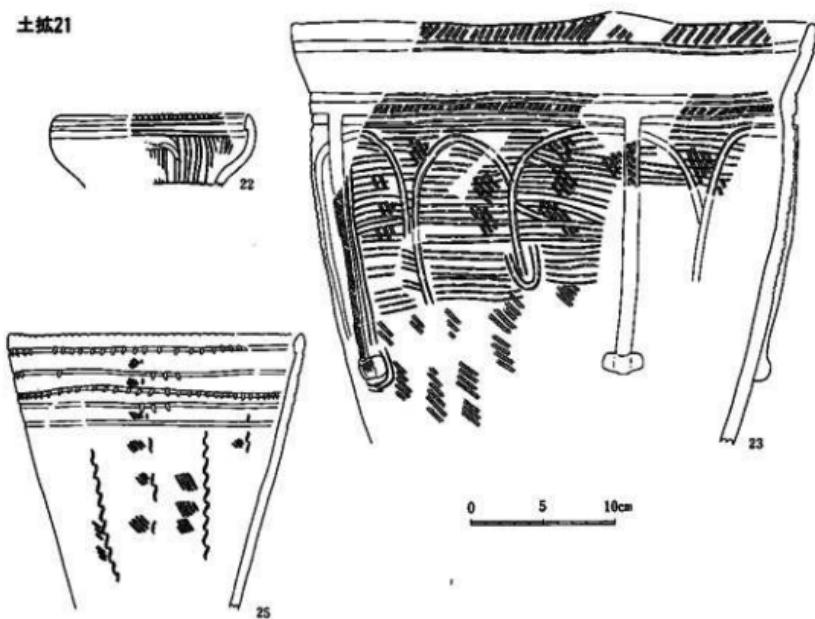
第16図 出土土器 (1)



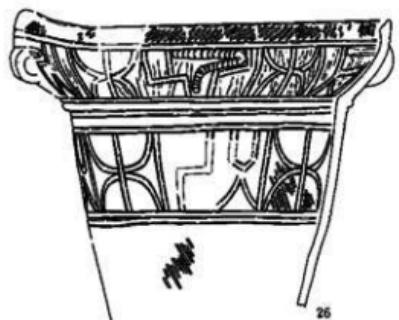
0 5 10cm

第17図 出土土器 (2)

土紙21



第18図 出土土器(3)



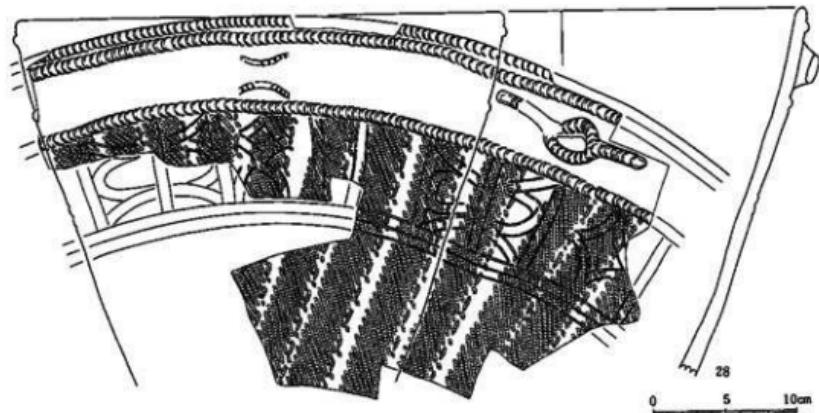
26



27

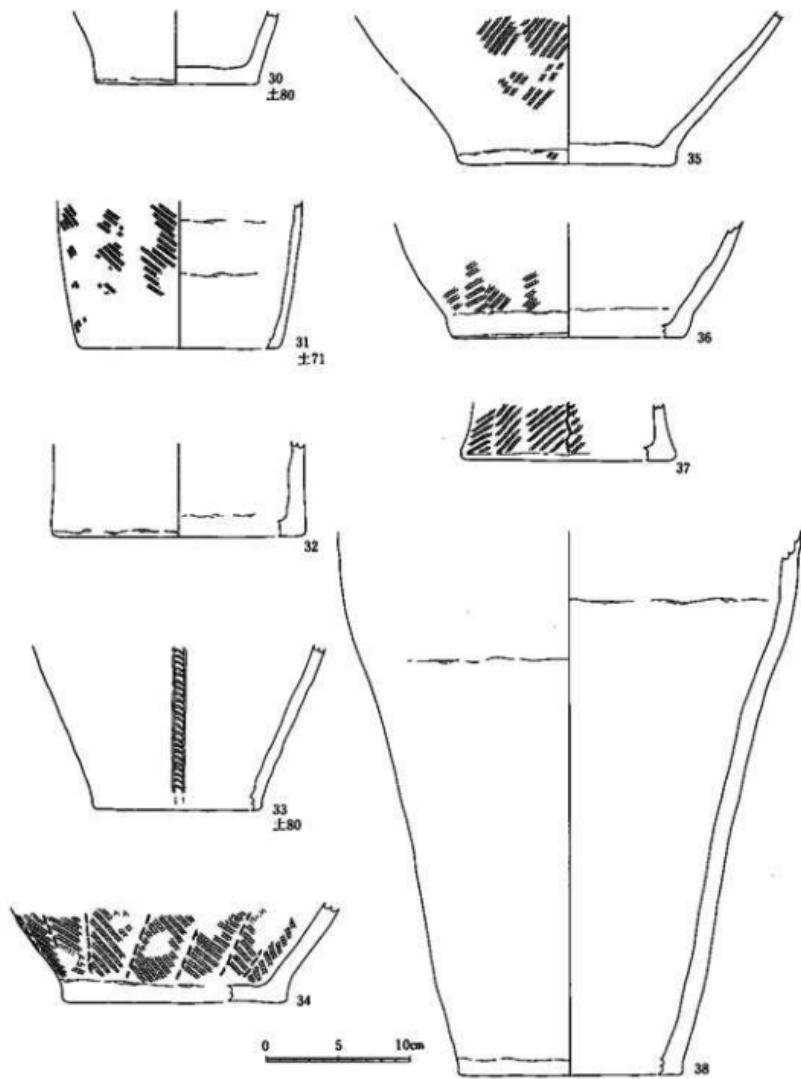


28

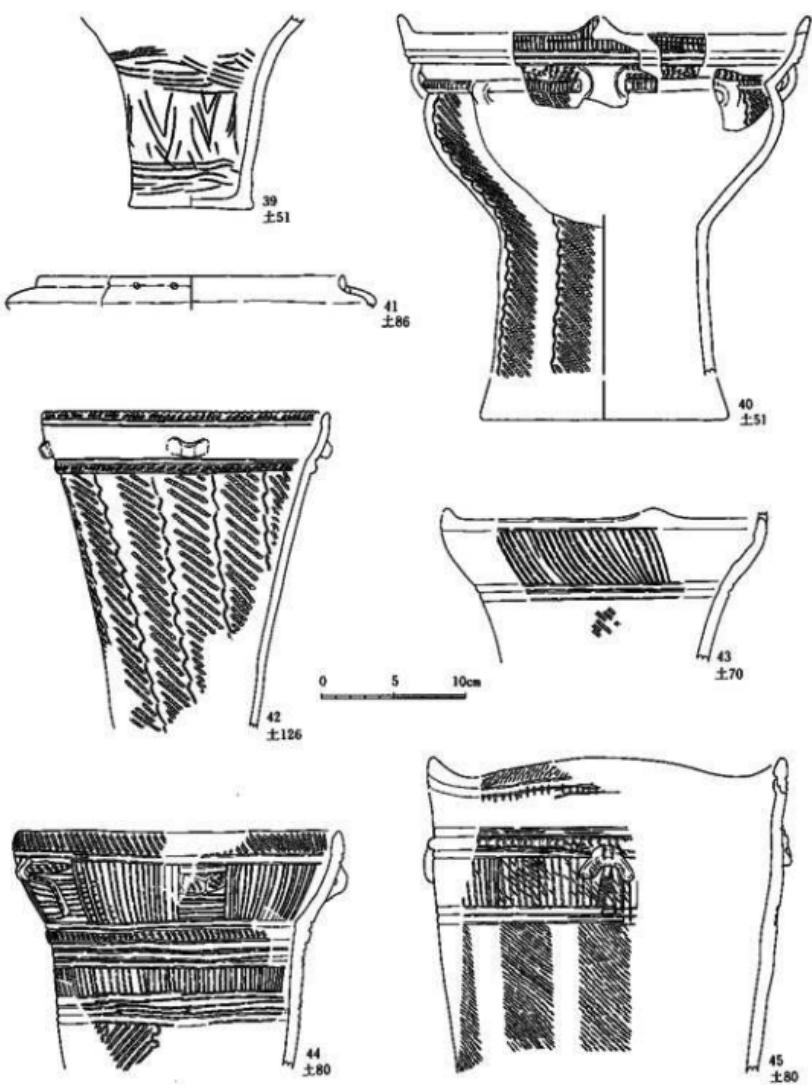


0 5 10cm

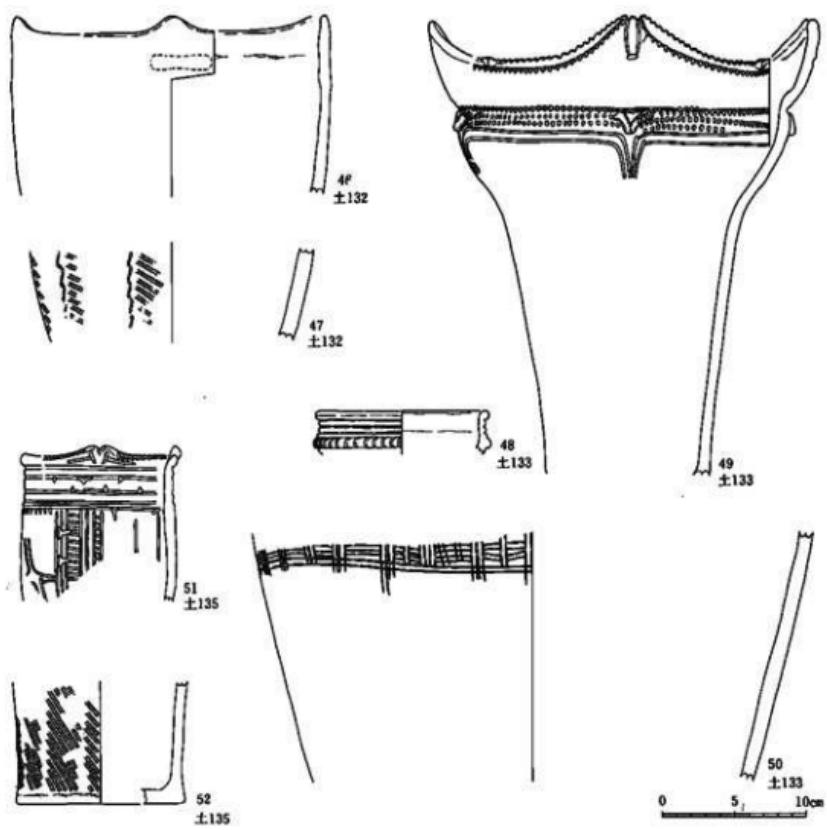
第19図 出土土器 (4)



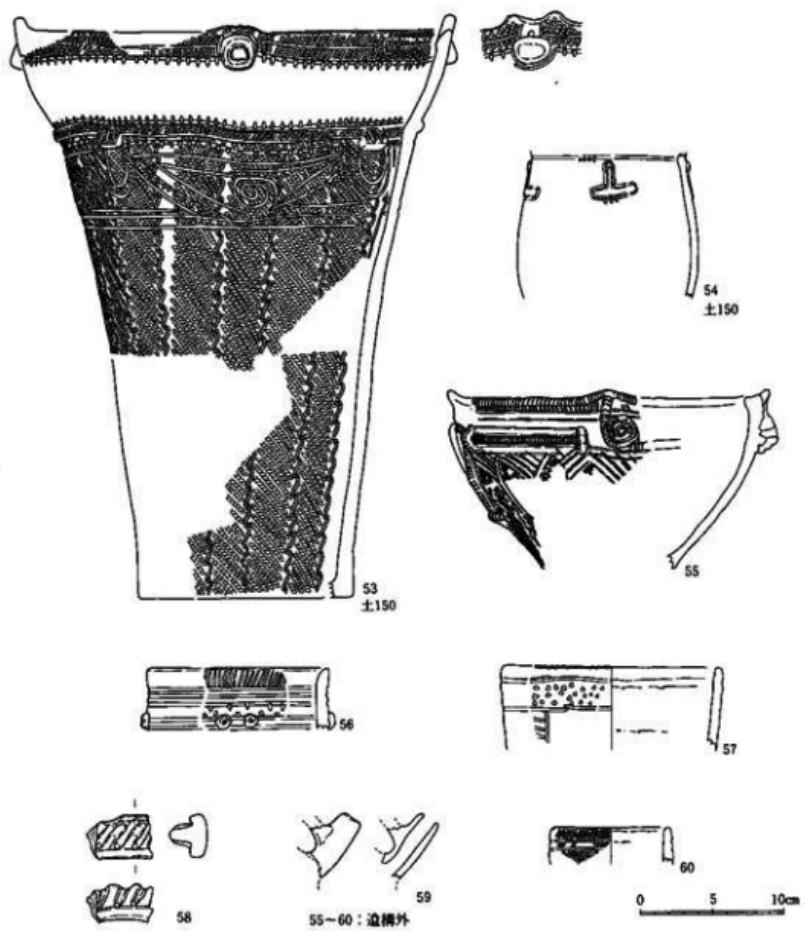
第20図 出土土器(5)



第21図 出土土器 (6)

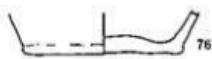
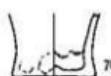
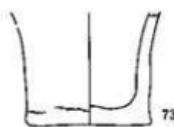
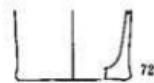
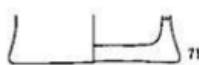
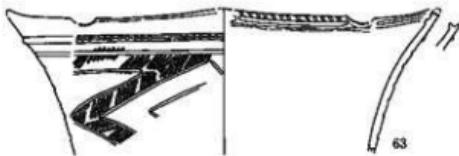
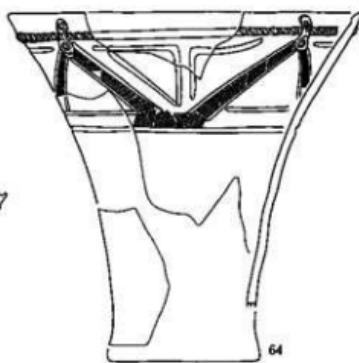
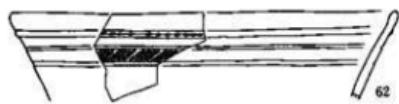
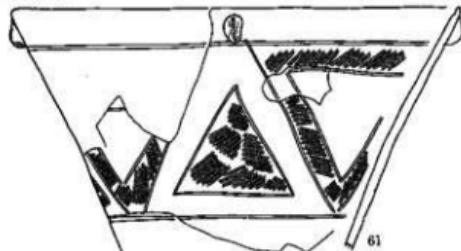


第22図 出土土器 (7)



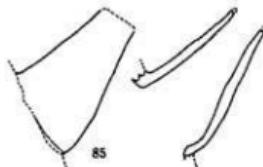
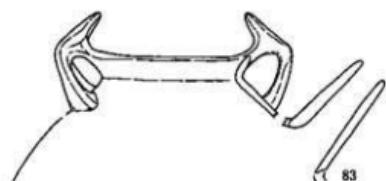
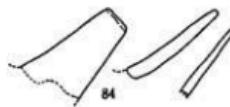
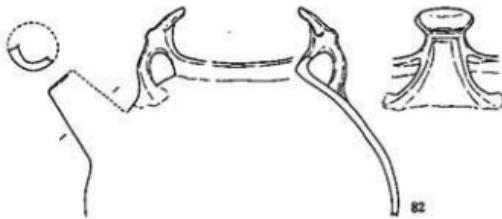
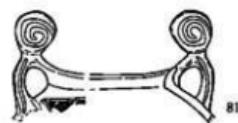
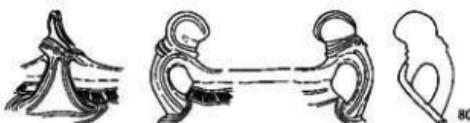
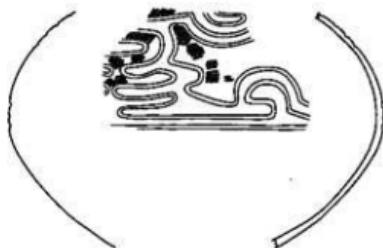
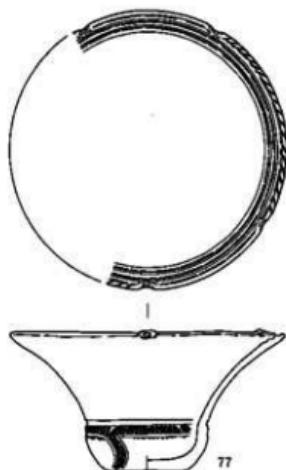
第23図 出土土器 (8)

第4号住居址



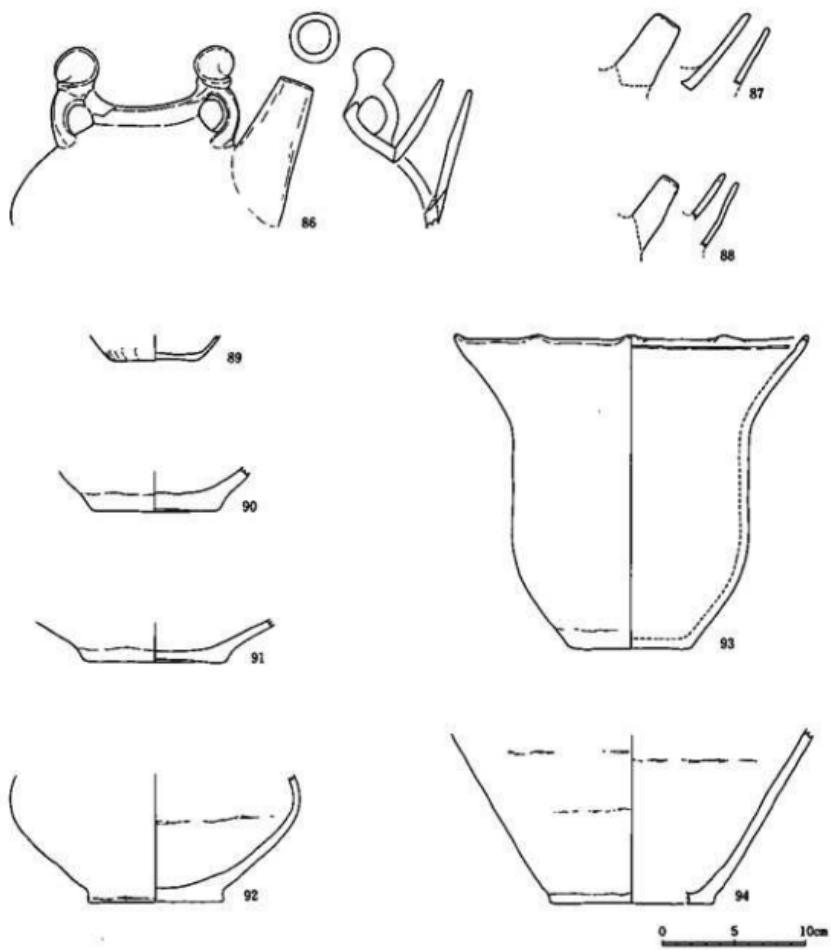
0 5 10cm

第24図 出土土器 (9)

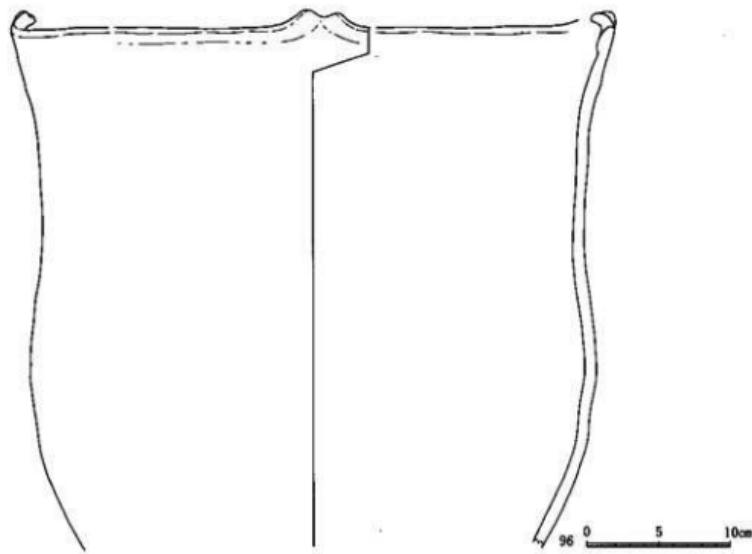
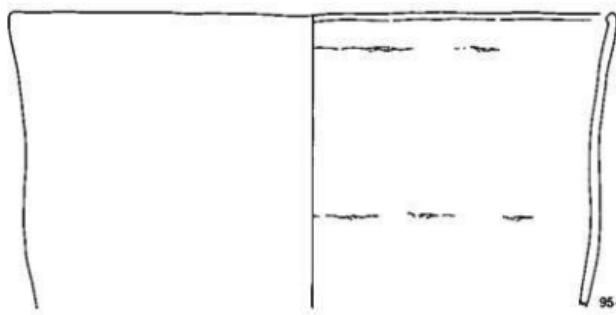


0 5 10cm

第25図 出土土器 (10)



第26図 出土土器 (1)

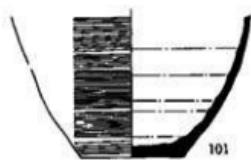


第27図 出土土器 (1)

第2号住居址



97



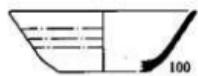
101



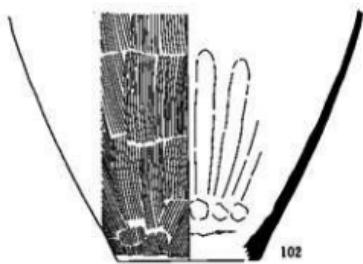
98



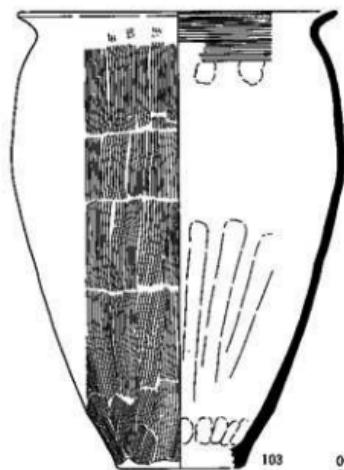
99



100

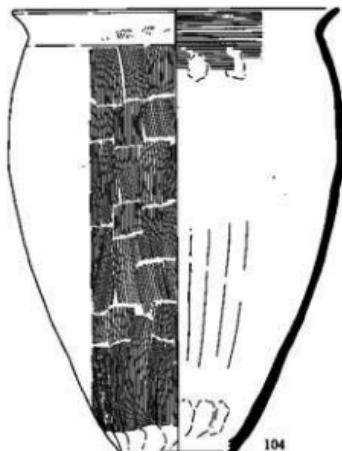


102



103

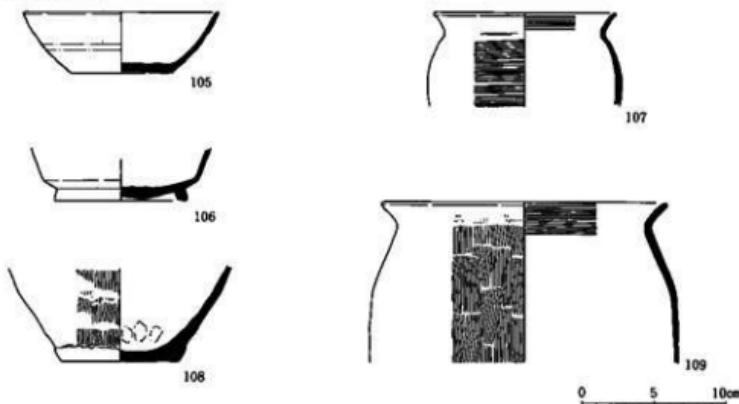
0 5 10cm



104

第28図 出土土器 ⑬

第8号住居址



第29図 出土土器 (14)

②平安時代の土器

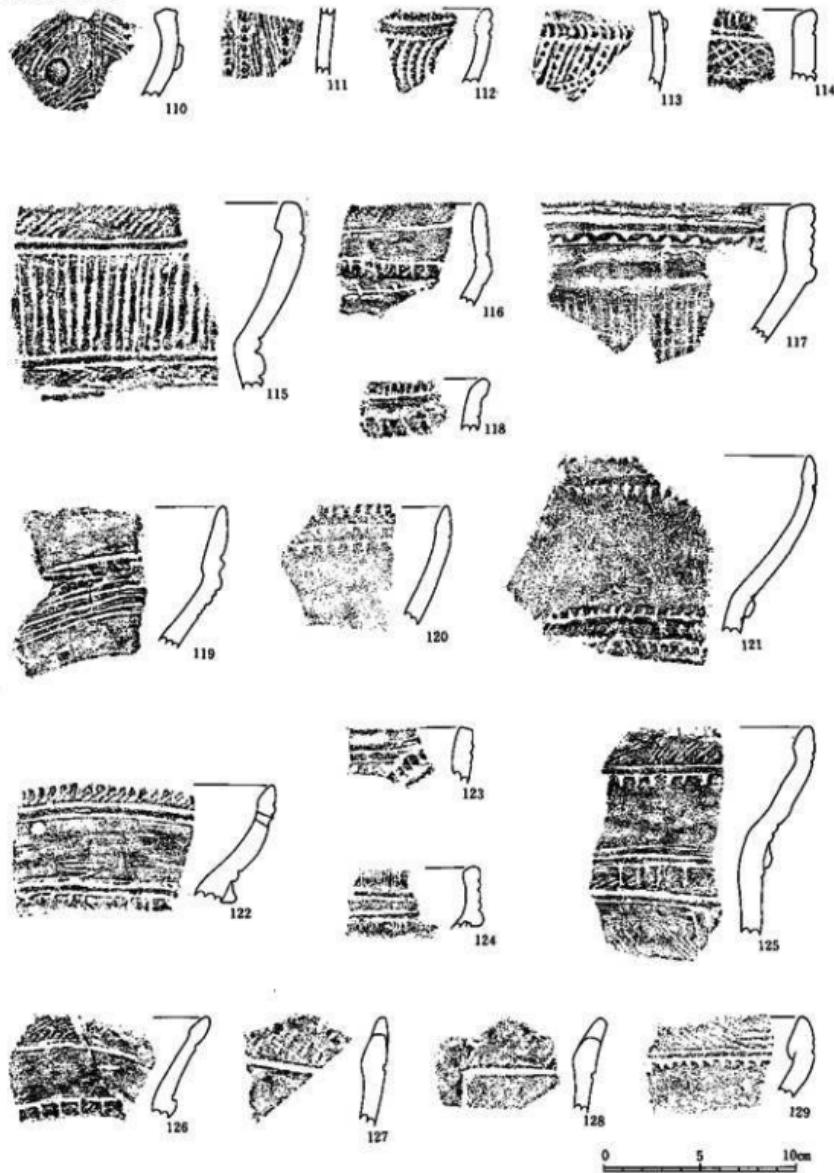
第2号住居址 (97~104) 器種は土師器杯・小形甕・甕、須恵器杯がある。土師器杯は内面黒色処理を行い、回転糸切痕をのこす底面よりやや内湾気味に開く器形をなす。須恵器杯も同様な形態で、回転糸切痕を残す無台のものである。99には墨書きが見られ、98は焼成が甘く灰色を呈する。小形甕は外面にカキメ調整を施す。甕は長胴で胴上部に最大径をもつ。外反する口縁部を有し体部外面は縦位ハケ調整、口縁部内面にはカキメを施す (103・104)。

第8号住居址 (105~109) 須恵器杯・土師器小形甕・甕がみられる。須恵器杯は有台・無台があり、どちらも回転糸切痕が観察される。無台杯 (105) は底部よりやや内湾気味に開く。有台杯は底面外周に回転ヘラケズリを行うが中央部は糸切痕を残す。小形甕は胴部外面、口縁部内面にカキメ調整を施す。器形は上半に最大径をもつ丸味のある胴部に、短く外反する口縁部が付く。甕 (108・109) は103と同様の器形・調整である。

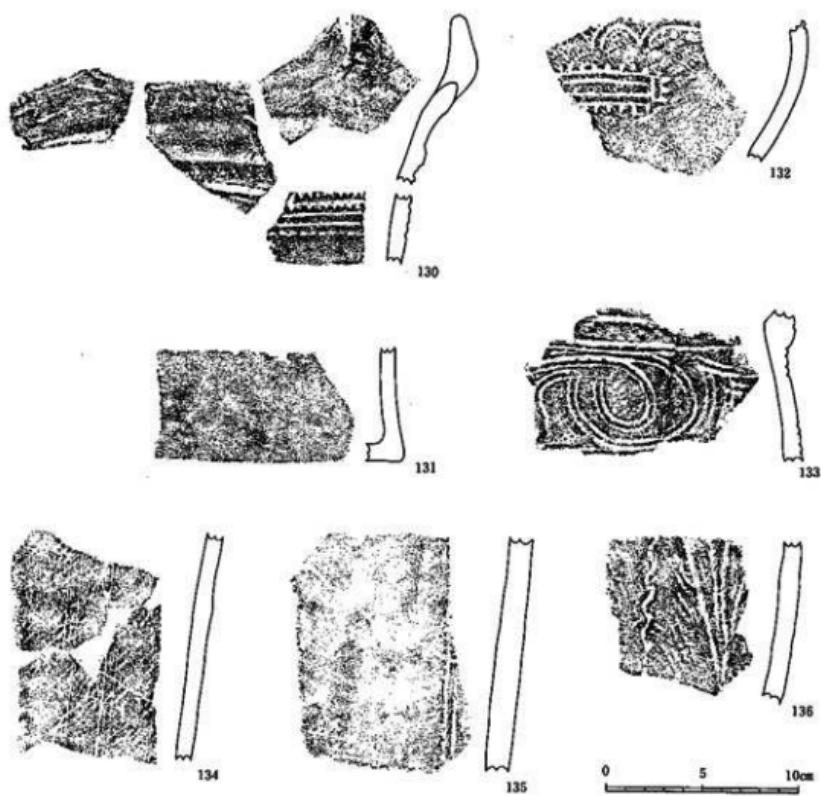
これらの土器は9世紀前半、南栗編年(注)に当てはめるとVII~VIII期の様相を呈する。2住と8住の時間差はほとんど認められず、造構の有り方からみても連続するものと言えよう。

注 松本市教育委員会『松本市島立南東・北東道路、高橋中学校遺跡、朱里の造構内』1985参照

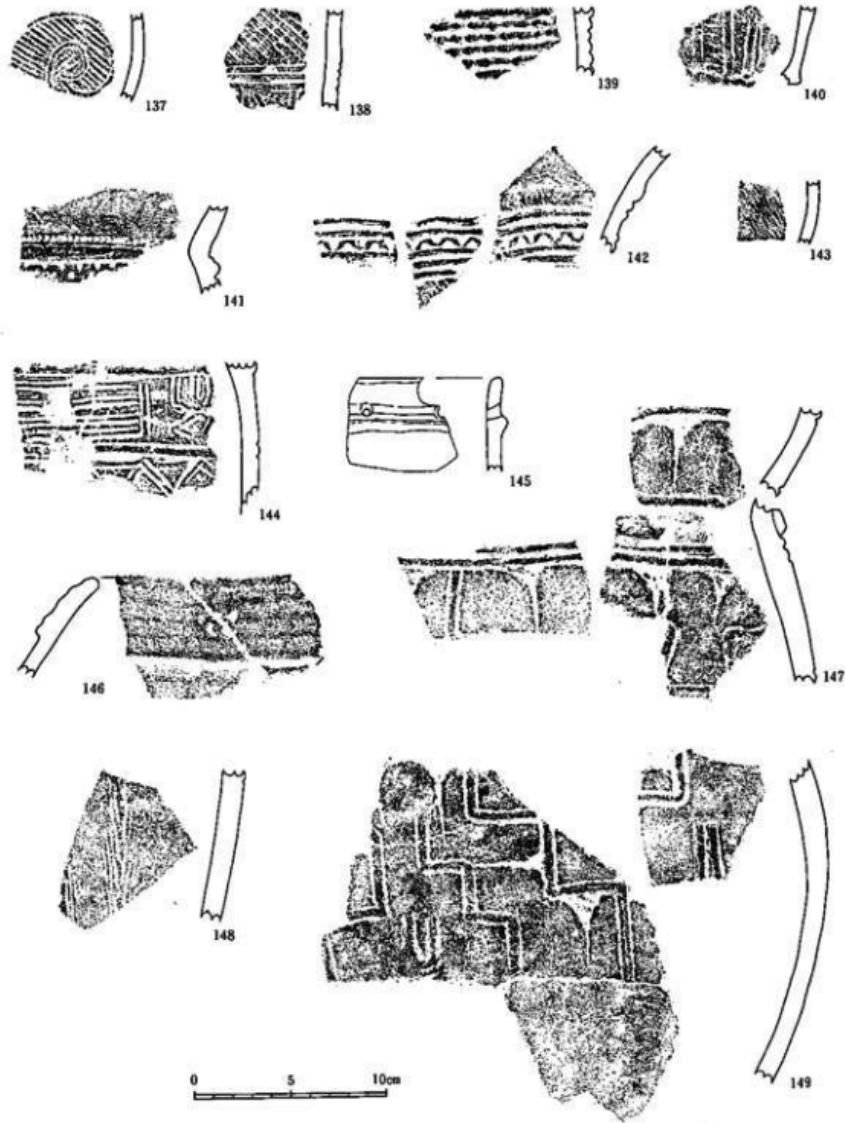
第3号住居址



第30図 出土土器拓影(1)

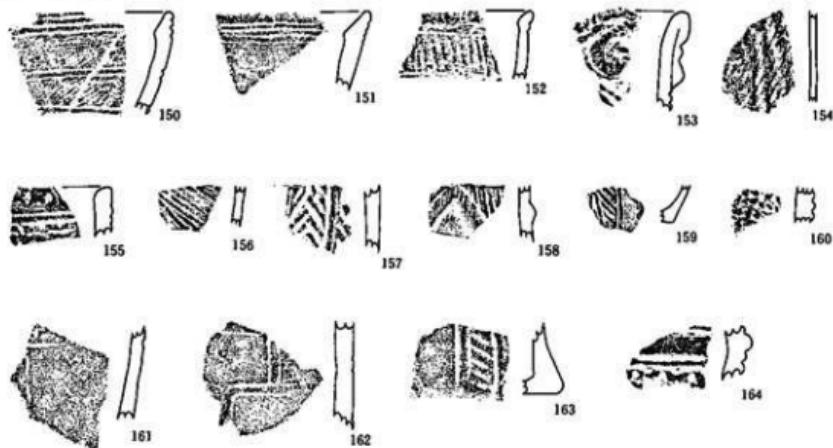


第31図 出土土器拓影 (2)

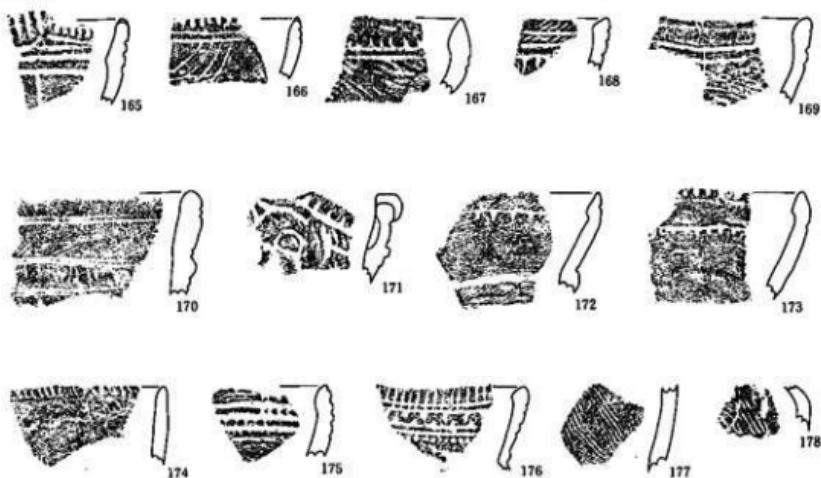


第32図 出土土器拓影 (3)

第5号住居址

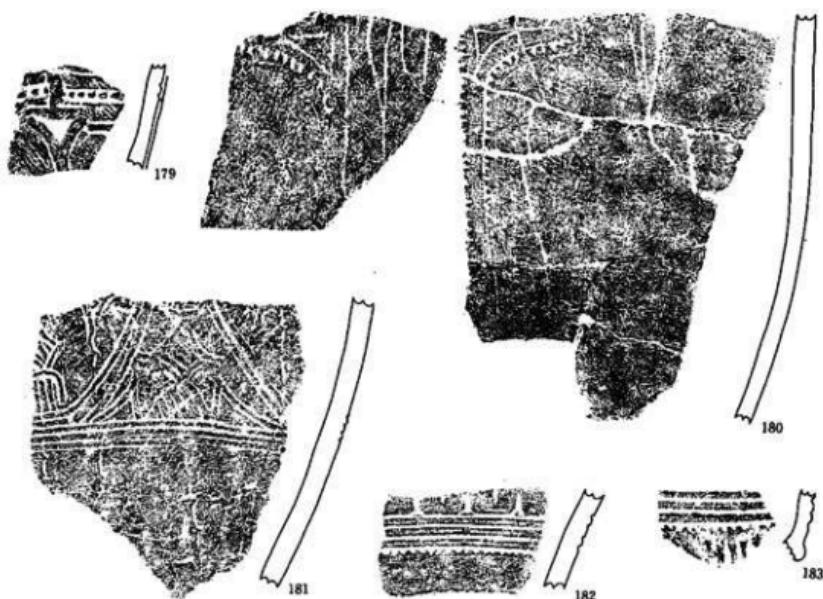


土坑21

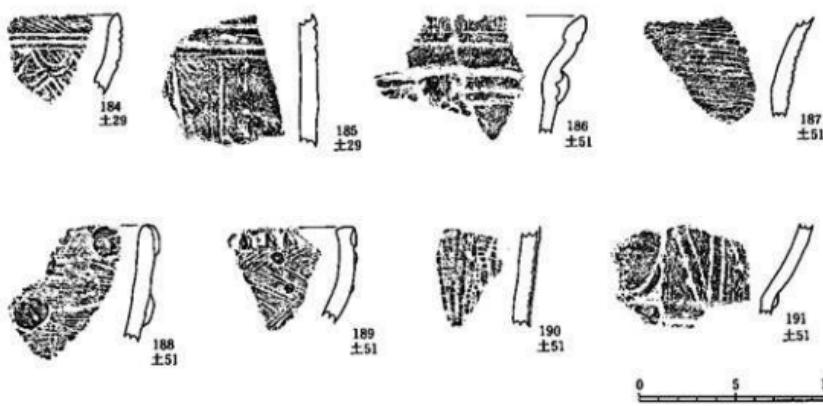


0 5 10cm

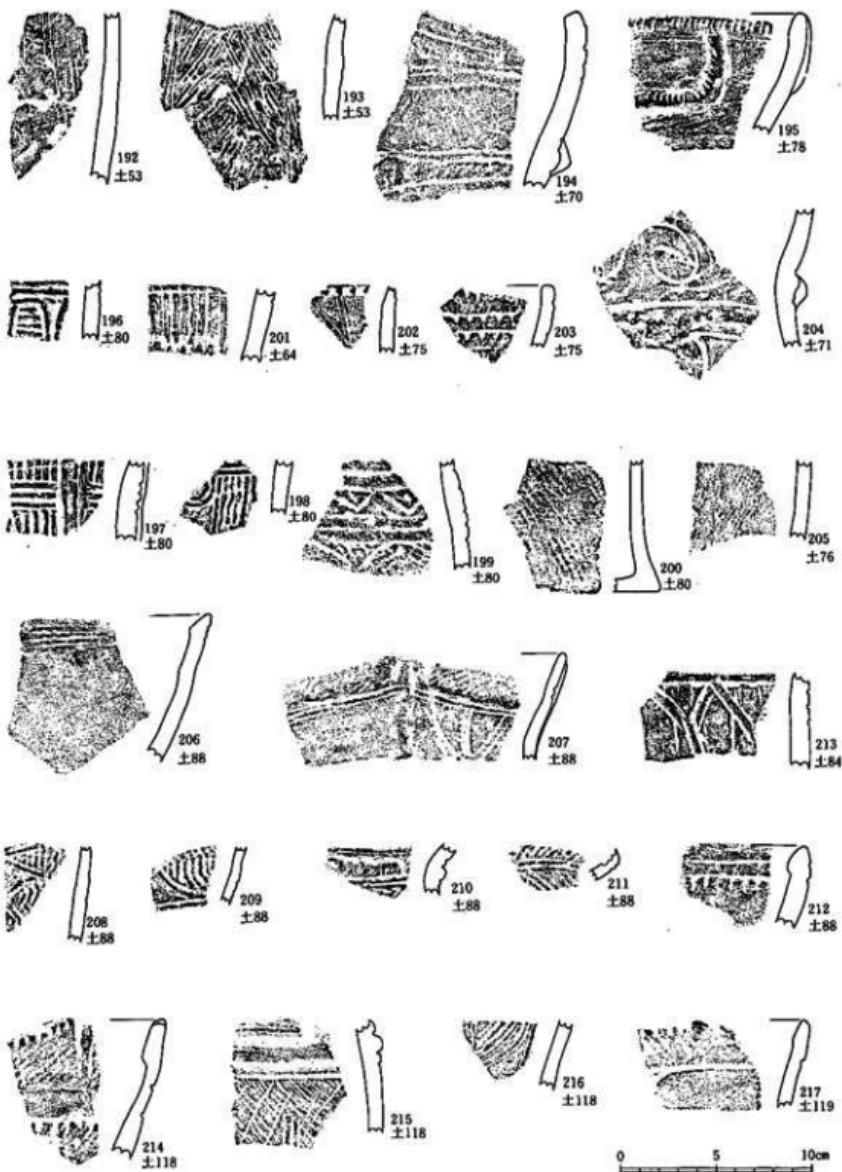
第33図 出土土器拓影 (4)



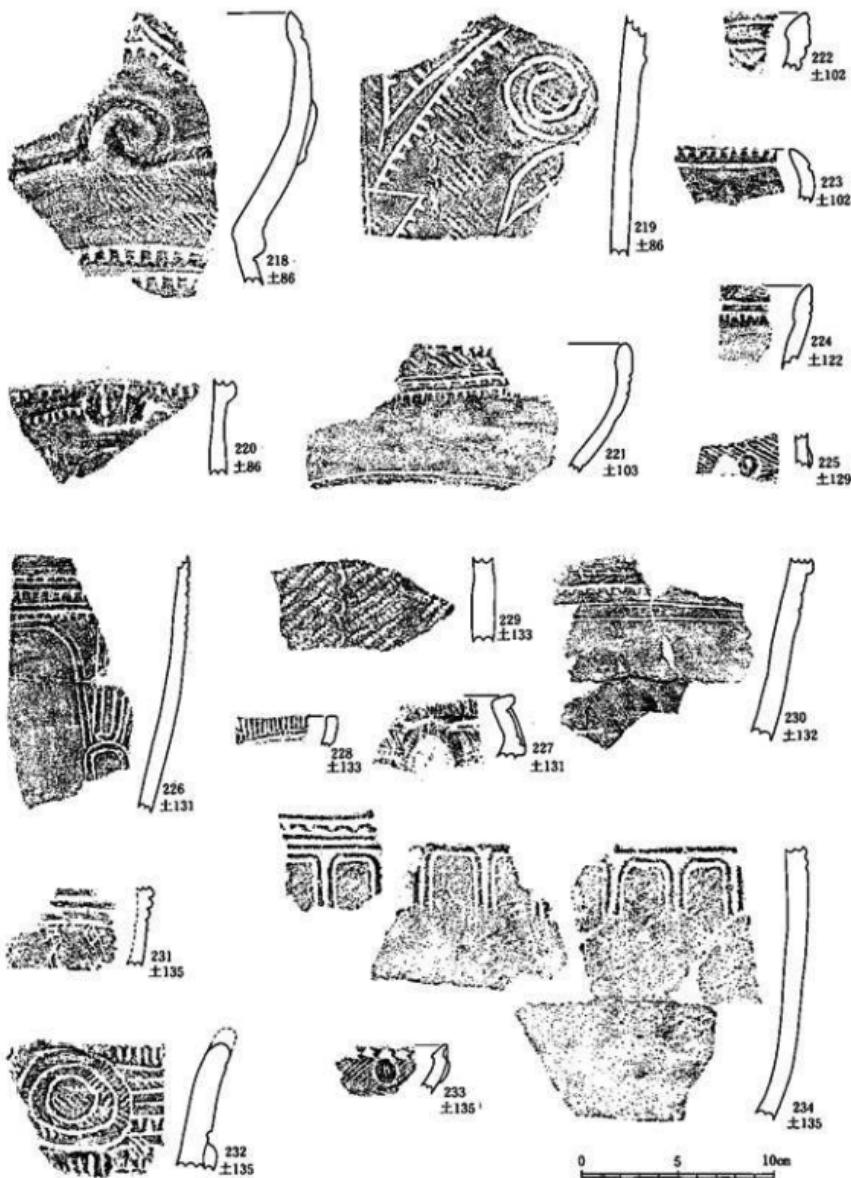
各土器



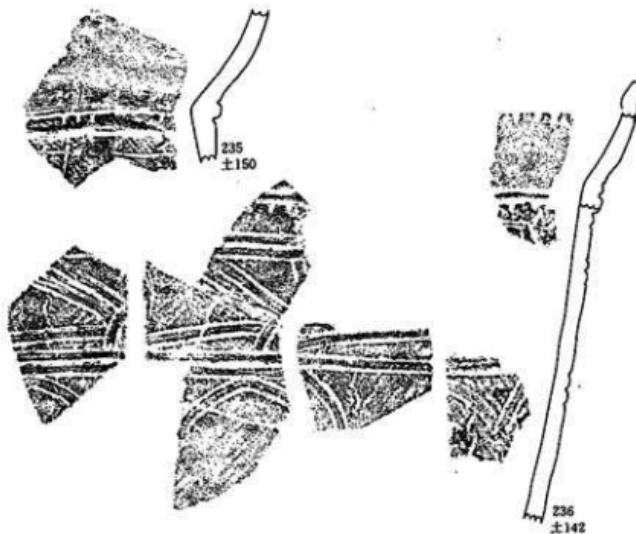
第34図 出土土器拓影 (5)



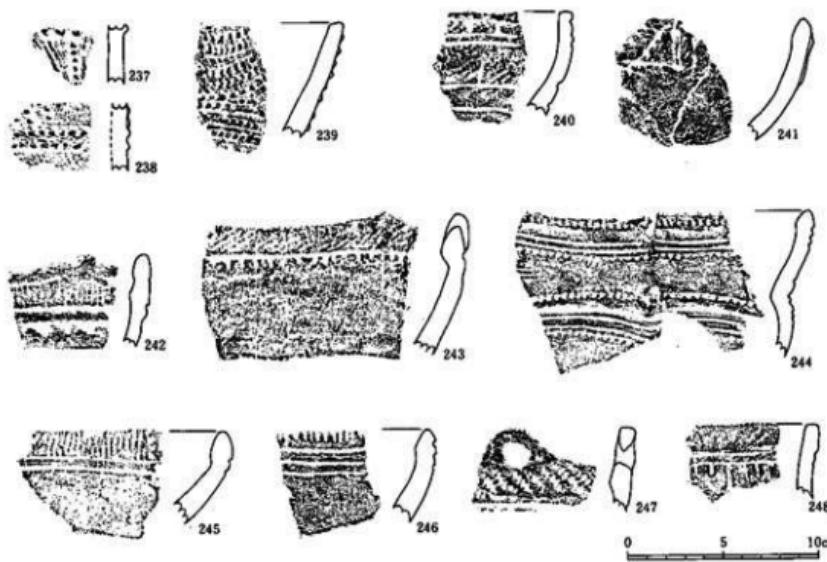
第35図 出土土器拓影 (8)



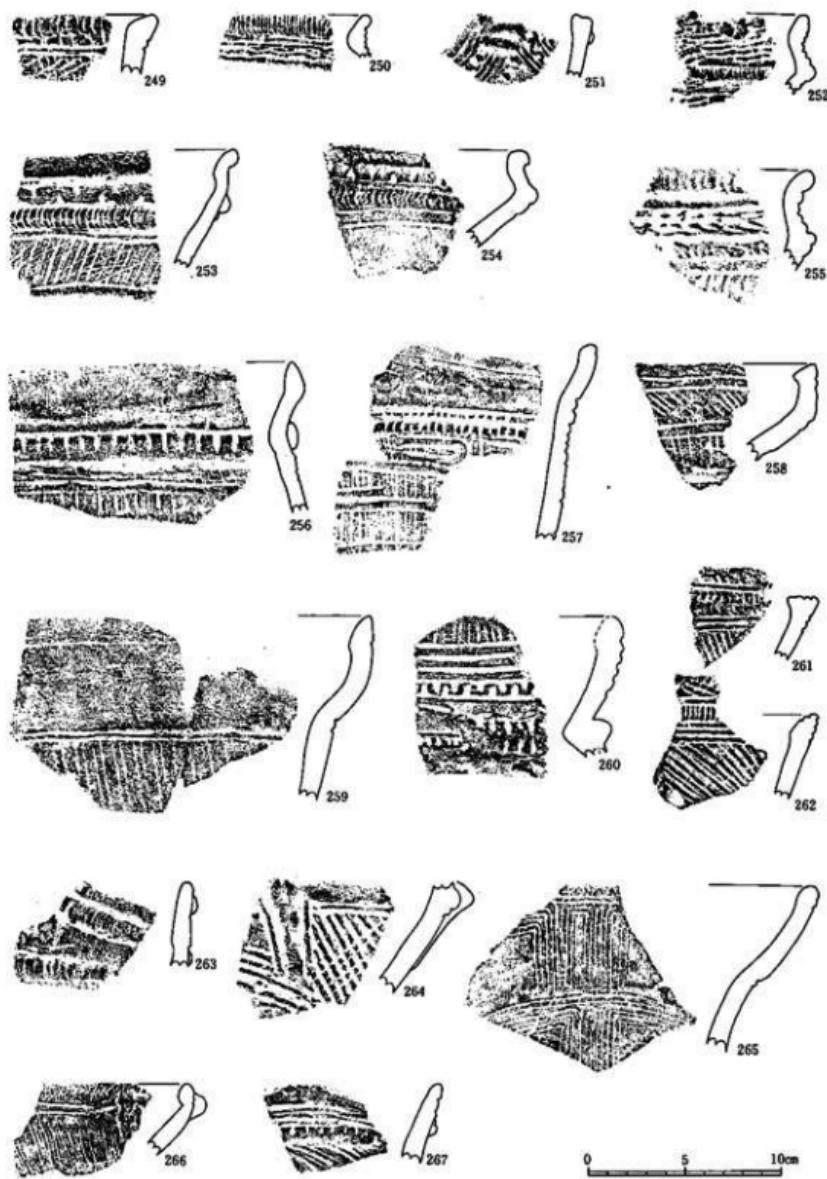
第36図 出土土器拓影 (7)



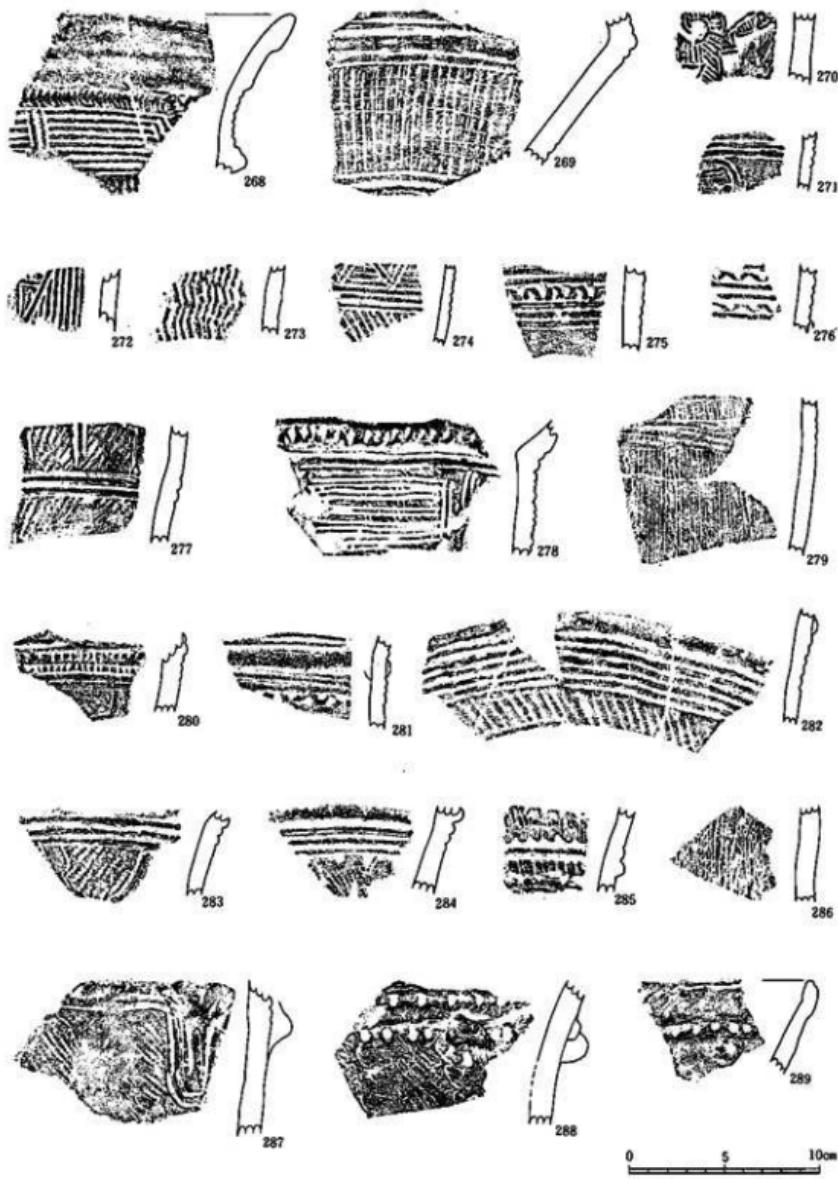
造構外



第37図 出土土器拓影 (B)



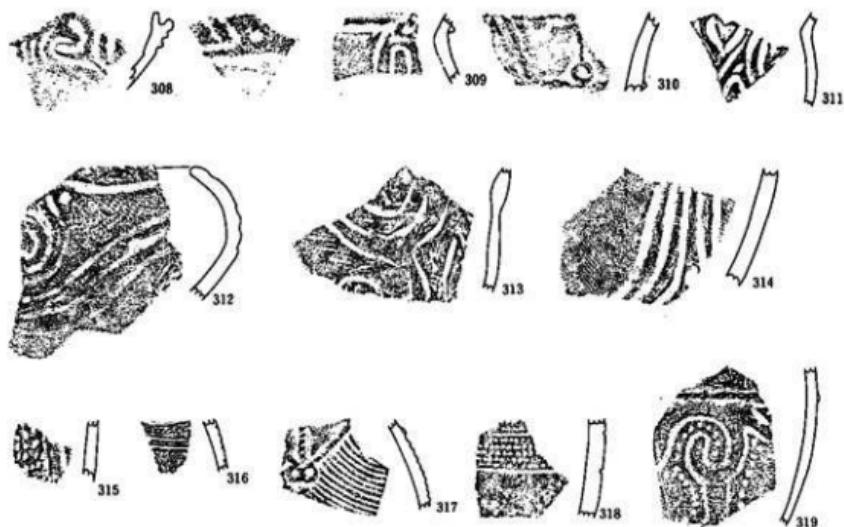
第38図 出土土器拓影(9)



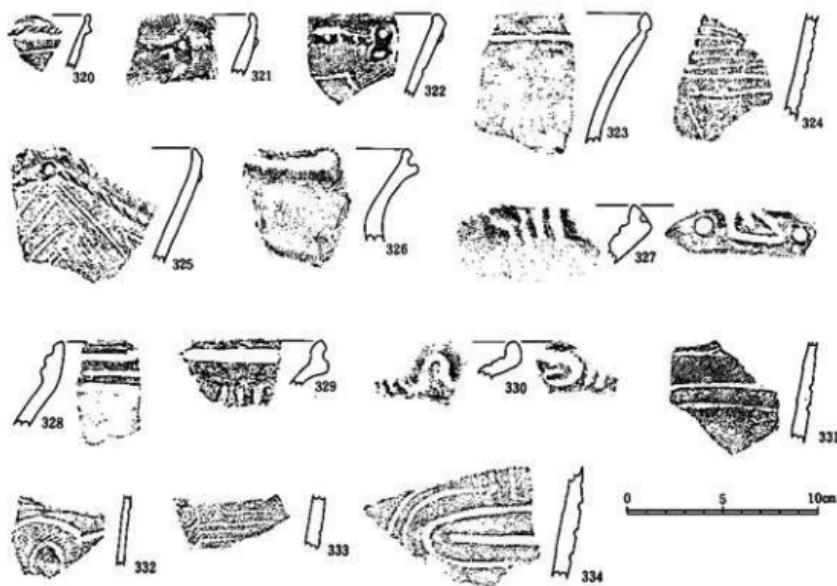
第39図 出土土器拓影 (10)



第40図 出土土器拓影 (I)



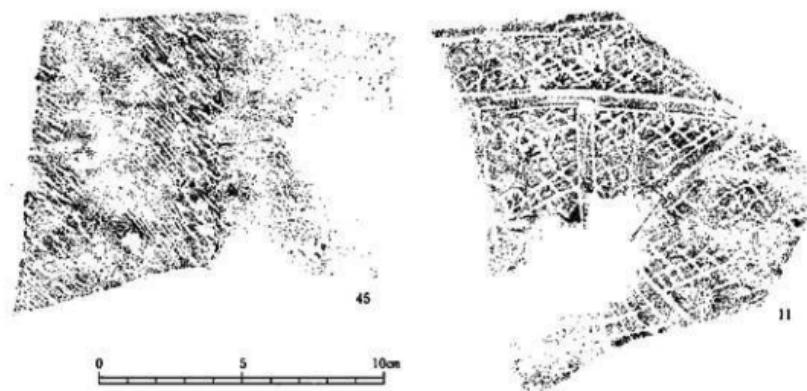
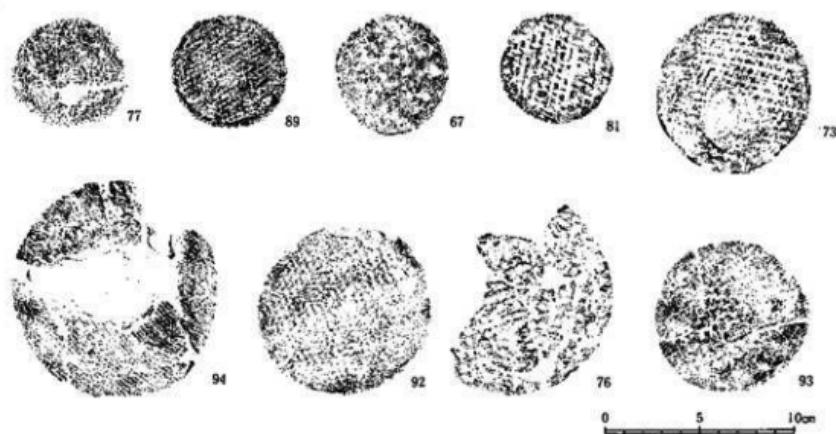
第4号住居址



第41図 出土土器拓影 (2)



第42図 出土土器拓影 (13)



第43図 出土土器拓影 (14)

(2)石器（第44～48図）

発掘調査では、定形的な石器・2次加工のある剝片・使用痕のある剝片・剝片・碎片が多数出土している。今回はこれらのうち定形的な石器に限って報告することにした。整理についてはすべての石器について法量・石質・欠損状況などを一覧表に登載し、図化は完形品、製作・使用の痕跡を残す遺物、特徴的な遺物を中心に行った。また、石質の鑑定については太田守夫氏のご教示を受けた。なお、石器の記述にあたっては各器種内の通し番号を用いている。

①黒曜石・チャートの剝片 林山腰遺跡では、小形の定形的な石器の素材として黒曜石とチャートが石材選択されている。定形的な石器を除いたこれらの内訳は、黒曜石が原石・剝片-371点(1762.30g)・2次加工のある剝片-9点(22.65g)・使用痕のある剝片-4点(8.45g)、チャートが剝片-15点(96.20g)・2次加工のある剝片-1点(19.00g)・使用痕のある剝片1点(14.80g)である。出土状況をみると、2号住居址の南壁際から黒曜石の剝片77点(215.65g)、チャートの剝片(15.30g)が出土している。とくに、黒曜石については打面と凸形のバルブをもつ剝片が多いが、原石も少量出土している。また、2号住居址の北側で土壤64・125・126に囲まれた地点で、褐色土面上からマイナス10cmの間で黒曜石の原石28点・剝片2点(合計608g)が出土している。このうち後者については時期は確定できないが黒曜石の屋外貯蔵例として考えられるものである。

②石鎌 26点出土。黒曜石製22点、チャート製4点。未製品の可能性がある8と基部が失われているものを除くとすべて凹基無茎鎌である。

③石錐 4点出土し、すべて黒曜石製。2は棒状錐だが頭部の両側に剥離を行ってつまみ状の抉りをつくりだしている。3は錐部には調整剥離はみられないが、両側の突出する剥離面の稜が摩耗しつぶれており回転穿孔に使用されている。

④石匙 5点出土。すべて横形で、小形・黒曜石製の2のはかはチャート製。1・3はつまみと刃部の間に明瞭な肩をつくりだしている。刃部は1・2が円刃、4・5が直刃である。なお、4は片面だけに急斜度の刃部をもち、片刃状を呈している。

⑤スクレイバー 4点出土。1・2は横刃形石器とされているもの。2の石材の硬砂岩は打製石斧にも利用されているが、付近にはなく搬入の可能性をもつものである。3は黒曜石製で、縦長剝片の片側縁辺部に押圧剥離と考えられる両面加工の刃部をもつもの。

⑥ピエス・エスキュー 3点出土し、黒曜石製。すべて截断面をもつ。1は上端に自然面をもち、そこから加擊している。3は上端部につぶれが観察される。

⑦打製石斧 37点出土。形態でみると撥形20点・短冊形11点・不明6点、刃部は円刃7点・直刃4点・偏刃10点・不明16点である。また、6点には着柄痕と考えられる側縁部のつぶれが観察される。石材としては、砂岩・硬砂岩・ホルンフェルス(砂岩)が主体を占めている。

⑧磨製石斧 8点出土。不明の1を除いて定角式石斧である。石材は蛇紋岩製5点・閃綠岩製2点・玉髓製1点である。このうち閃綠岩については付近での採取は可能である。

⑨凹・敲・磨石 80点出土している。このうち第3号住居址から27点、第4号住居址から25点、土壙21から7点出土している。石材としては安山岩が64点で大半を占め、石英閃緑岩ほかの石材が一部利用されている。多くは円形・橢円形の河原石を利用しておらず、器面にはくぼみ（アバタ状の浅いものから深いものまである）・敲打痕・磨面が観察される。本遺跡出土のものは単独で磨面をもつものと、磨面にくぼみ・敲打痕が伴うものが多い。くぼみ・敲打痕を単独でもつものは少ない。このことは、これらの石器が一つの機能をもって使用されるのではなく、複数の機能をもって使用されていたためであろう。次に、特徴的なものについて述べることにする。41は乳棒状を呈し、下部に敲打痕を残している。74は平安時代や中世にみられる球状の礫の中央に深いくぼみをもつものである。76はひとつの面に複数のくぼみをもち、片面は小形の石皿状を呈している。2面が同時に使用されていたのか転用されたものかは不明である。

⑩石皿 19点出土。第3号住居址から3点、第4号住居址から16点出土している。このうち第4住は16点のうち、完形は2点でそのほかは破損品である。しかも、破損品の14点のうち同一個体の可能性があるのは14と19の2点のみである。また、9・10は底面に大きな剥離度をもち、厚さを減じている。これらのことから第4住出土の石皿には敷石住居の石材に転用されているものがあると考えられる。完形品の4は使用部分の凹部が磨面でなくアバタ状の敲打痕からなり、すりつぶすよりは叩きつぶす作業が行われたと考えられるものである。

⑪石棒 7点出土。6点が第4号住居址から出土している。1・2は完形で敷石住居の張出部に立てられていたものである。他は破損品で、4・5は被熱して表面が一部赤色化している。

石 器 一 覧 表

石器

No.	番 No.	分 類	住 居	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1		凹基・無基	2住	2.12	(1.24)	0.39	(0.70)	黒曜石	片脚欠	
2		凹基・無基	2住貼床内	(1.73)	(0.99)	(0.37)	(0.50)	黒曜石	先端・片脚欠	
3	1	凹基・無基	3住東ベルト	(1.90)	1.68	0.42	(1.05)	チャート	先端欠	
4		凹基・無基	3住南東中層	4.14	3.47	0.59	9.70	チャート	完形	未製品
5	2	凹基・無基	3住石4	(2.41)	(1.79)	0.46	(1.40)	黒曜石	片脚欠	
6		凸基・無基	4住No.481	1.42	(1.06)	0.19	(0.20)	チャート	片脚欠	
7	3	凹基・無基	4住S.506	1.99	1.30	0.35	0.70	チャート	完形	
8		円基?	4住東直	(1.95)	1.72	0.42	(1.20)	黒曜石	先端欠	未製品か
9		凸基・無基	4住	(0.83)	1.20	(0.31)	(0.25)	黒曜石	上半部欠	
10		凹基・無基	土壙21No.15	2.25	(1.31)	0.34	(0.70)	黒曜石	片脚欠	
11	4	凸基・無基	土壙21No.17	1.34	1.07	0.23	0.25	黒曜石	完形	
12		不明	土壙21No.18	(1.89)	(0.98)	(0.40)	(0.65)	黒曜石	片脚・両脚欠	
13		不明	土壙21No.28	(2.08)	(1.37)	0.44	(1.10)	黒曜石	下半部欠	
14		凹基・無基	土壙21	(1.82)	2.14	0.41	(1.35)	黒曜石	上半部欠	
15	5	凹基・無基	土壙21北西	(1.43)	1.48	0.43	(0.75)	黒曜石	上部汚欠	
16		凹基・無基	土壙111	(1.73)	(1.43)	0.36	(0.65)	黒曜石	先端・両脚端欠	
17	6	凹基・無基	土壙129	1.44	(1.24)	0.34	(0.40)	黒曜石	片脚端欠	

No	図 No	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
18		凹基・無茎	土壤134	1.74	1.12	0.25	0.35	黒曜石	完形	
19	7	凹基・無茎	土壤142	2.10	(2.03)	0.37	(1.10)	黒曜石	片脚消失	
20	8	凹基・無茎	2区T7	(1.32)	1.55	0.23	(0.45)	黒曜石	上半部欠	
21	9	凹基・無茎	2区Tレンチ	(2.44)	(1.51)	0.40	(1.00)	黒曜石	先端・片脚欠	
22	10	凹基・無茎	2区検出面	1.50	1.72	0.58	0.90	黒曜石	完形	
23		凹基・無茎	2区	1.83	(1.32)	0.45	(0.75)	黒曜石	片脚欠	
24	11	凹基・無茎	3区赤土	(2.58)	(1.45)	0.32	(1.00)	黒曜石	先端・両脚欠	
25		凹基・無茎	不明	(1.75)	(1.13)	(0.35)	(0.55)	黒曜石	縫に半欠	
26		凹基・無茎	不明	(1.29)	(0.94)	(0.17)	(0.15)	黒曜石	片脚残	

石錐

No	図 No	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	12	つまみ	2住覆土	2.06	1.22	0.49	0.85	黒曜石	完形	
2	13	棒状	3住石7	4.20	1.06	0.57	2.40	黒曜石	完形	
3	14	棒状	土壤79	2.99	0.92	0.75	1.75	黒曜石	完形	側部摩耗
4	15	不明	土壤79	(2.63)	(0.91)	(0.75)	(1.75)	黒曜石	端部欠	

石匙

No	図 No	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	16	横形・円刃	3住石1	3.64	5.45	0.42	6.25	チャート	完形	
2	17	横形・円刃	5住北西	(1.28)	1.81	0.31	(0.45)	黒曜石	つまみ先端欠	
3	18	横形・不明	土壤21北西	(4.42)	(2.82)	(0.55)	(5.75)	チャート	刃部両端欠	
4	19	横形・直刃	2区検出面	2.90	4.22	0.53	5.35	チャート	完形	
5	20	横形・直刃	2区南側検出面	2.88	(5.21)	0.79	(9.95)	チャート	刃部片端欠	

スクレイパー

No	図 No	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	21	3住覆土	7.66	7.12	2.25	120.05	砂岩	完形	
2	22	2区T4	11.12	5.90	0.90	75.55	硬砂岩	完形	
3	23	不明	5.64	3.98	1.47	35.70	黒曜石	完形	

ピエス・エスキュー

No	図 No	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	24	2住粘土内	1.52	1.10	0.55	0.90	黒曜石	完形	
2	25	2住覆土	2.49	1.70	0.67	3.10	黒曜石	完形	
3	26	4住	2.96	2.98	1.15	10.25	黒曜石	完形	

打製石斧

No	図 No	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1		短柄・不明	2住T7	(15.60)	8.03	(1.90)	(317)	石英閃綠岩	下側端欠	
2		短柄・不明	2住床下	(9.26)	(5.47)	(2.28)	(154.50)	硬砂岩	頭部端・刀部欠	側緣部つぶれ
3		短柄・円刃	2住床内	(12.10)	5.51	(2.24)	(212.65)	砂岩	頭部端欠	未製品?
4		短柄・円刃	2住東北覆土	8.75	4.11	0.92	32.70	砂岩	完形	
5	27	短柄・偏刃	2住	9.16	4.46	1.44	68.10	砂岩	完形	側緣部つぶれ
6	28	短柄・偏刃	3住石器No8	8.28	4.63	1.02	54.85	硬砂岩	完形	
7	29	短柄・直刃?	3住右9	(10.86)	(4.28)	1.66	(113.30)	千枚岩	頭・刀部欠	
8	30	短柄・四刃	3住右12	12.05	4.89	2.18	118.90	硬砂岩	完形	
9		短柄・不明	3住61	(5.42)	(4.48)	(1.20)	(32.10)	砂岩	頭・刀部欠	
10		短柄・不明	3住S97	(9.33)	(4.68)	2.12	(124.65)	砂岩	刀部欠	
11		短柄・偏刃	3住S115	(10.54)	(5.69)	(1.94)	(151.55)	砂岩	頭部欠	

No	図 No	分 類	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
12		不明・直刀	3往447	(8.70)	(9.70)	(3.64)	(435)	緑色火山岩	上半欠	
13	31	直・直刀	3往北ベルト	8.15	4.27	1.00	40.95	硬砂岩	完形	
14		直・円刀	3往	(12.05)	(5.26)	1.17	(98.60)	砂岩	頭部欠	
15		短身・不明	3往南東上層	(5.74)	(4.14)	(0.86)	(29.90)	砂岩	下半欠	
16		短身・円刀	3往南東上層	10.80	4.09	1.23	75.20	ホルンフェルス(鉄鉱) ホルンフェルス(鉄鉱)	完形	
17	32	短身・直刀	4往Na2	(13.09)	(5.32)	2.68	(289.10)	ホルンフェルス(鉄鉱) ホルンフェルス(鉄鉱)	頭部端欠	頭部端つぶれ
18		直・不明	土壠19南東	(8.57)	(4.80)	(0.95)	(44.80)	砂岩	刀部欠	
19		短身・直刀	土壠19南東	(9.74)	4.55	1.45	(87.55)	砂岩	頭部欠	
20		直・直刀	土壠19南東	(12.52)	4.44	1.87	(93.50)	砂岩	頭部端欠	
21	33	直・直刀	土壠21Na16	11.52	7.66	1.49	(126.40)	硬砂岩	完形	
22		直・不明	土壠21Na20	(6.65)	(4.66)	(1.12)	(45.05)	砂岩	下半欠	
23		直・不明	土壠21Na39	(8.89)	(3.93)	1.14	(50.95)	硬砂岩	刀部欠	
24		不明・不明	土壠21Na43	(4.06)	(4.84)	(0.73)	(23.75)	砂岩	頭・刀部欠	
25		短身・直刀	土壠21	(5.02)	(4.44)	(1.08)	(34.05)	砂岩	上半欠	
26	34	短身・円刀	土壠79	10.21	4.90	1.76	106.90	硬砂岩	完形	
27		不明・不明	土壠88	(5.43)	(4.38)	(1.99)	(75.45)	硬砂岩	下半欠	
28		直・不明	土壠88	(9.93)	(5.33)	1.89	(132.25)	ホルンフェルス(鉄鉱) ホルンフェルス(鉄鉱)	頭・刀部欠	頭部端つぶれ
29		直?・不明	土壠133Na1	(10.25)	(5.30)	1.49	(81.50)	砂岩	頭部端・刀部欠	
30		不明・不明	2区T4	(5.00)	(4.62)	(1.33)	(47.50)	千枚岩	頭・刀部欠	
31		不明・不明	2区T4	(7.30)	(5.44)	(1.00)	(46.15)	砂岩	頭・刀部欠	
32		短身・直刀	2区T5	(7.73)	(4.03)	(1.31)	(57.55)	ホルンフェルス(鉄鉱)	頭部欠	
33		不明・不明	2区鉢土内	(9.39)	(5.97)	(2.81)	(203.35)	ホルンフェルス(鉄鉱)	下半欠	
34		短身・円刀	2区検出面	(8.12)	3.15	(1.42)	(39.65)	ホルンフェルス(鉄鉱)	頭部欠	
35	35	直・不明	3区南検出面	(8.86)	(6.31)	1.36	(76.40)	ホルンフェルス(頁岩)	刀部欠	頭部端つぶれ
36		直・直刀	3区南検出面	11.99	6.78	1.21	139.05	砂岩	完形	
37	36	短身・直刀	3区鉢土	(12.11)	(7.06)	(2.82)	(294.85)	硬砂岩	頭部欠	頭部端つぶれ

磨製石斧

No	図 No	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1		3往石3	(3.29)	(1.12)	(0.35)	(1.55)	閃綠岩	一部欠	
2		3往北東上層	(2.91)	(3.17)	(0.89)	(7.40)	蛇紋岩	刀部の一部欠	
3	37	4往石岸Na1	7.27	3.53	0.71	33.70	蛇紋岩	完形	
4		4往S503	(9.33)	(7.21)	(2.78)	(306.10)	蛇紋岩	上半・刀部欠	
5	38	4往NaX	(10.46)	(7.68)	(4.12)	(637)	閃綠岩	上半	
6	39	4往覆土	(10.30)	(5.41)	(2.54)	(258.40)	玉髓	刀部欠	
7		4往	(5.61)	(3.22)	(0.72)	(14.70)	蛇紋岩	頭~刀部欠	
8	40	5往Na1	(10.76)	(5.29)	2.18	(238.60)	蛇紋岩	刀部欠	

四・敲・磨石

No	図 No	凹 部	敲打痕	磨面	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1			○	○	2往板土	11.29	10.11	4.87	680	安山岩	完形	被熱
2			○	○	3往石10	(12.18)	(9.15)	(5.24)	(827)	安山岩	刃欠	
3			○	○	3往石13	9.01	8.38	6.54	638	安山岩	完形	
4			○	○	3往石15	12.99	6.16	5.35	578	安山岩	完形	
5			○	○	3往19	(10.62)	(9.86)	(7.43)	(930)	安山岩	刃欠	被熱
6			○	○	3往64	(9.37)	(6.92)	(5.61)	(324)	砂岩	一部欠	礫石?
7	○ (1+1)	○	○	○	3往85	(9.88)	(8.41)	(5.47)	(464)	安山岩	刃欠	被熱
8			○	○	3往87	16.50	10.85	6.33	1100	安山岩	完形	
9	○ (2)		○	○	3往106	(12.26)	(7.49)	(3.80)	(430)	安山岩	頭に刃欠	
10			○	○	3往140	12.75	10.26	7.64	1200	安山岩	完形	

No	露 Xa	凹 部	敲打錠	磨面	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm) ²	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
11		○			3往148	10.28	9.27	7.72	790	安山岩	完形	
12		○ (1+1)		○	3往166	10.65	8.25	4.54	382	安山岩	完形	
13				○	3往南西下層	(7.55)	4.47	4.20	(189)	石英閃綠岩	両端欠	
14		○ (1+1)			3往北東下層	6.51	5.79	3.45	165	石英閃綠岩	完形	
15			○	○	3往北東下層	(5.92)	(8.31)	(4.21)	(259)	石英閃綠岩	汚欠	
16		○			3往	10.92	6.89	6.75	520	安山岩	完形	
17		○	○		3往	(13.58)	6.83	4.87	(620)	安山岩	先端僅かに欠	
18		○ (1+1)	○		3往	9.18	7.88	6.98	504	安山岩	完形	
19				○	3往	10.14	7.18	4.53	325	安山岩	完形	4条の沈層
20		○ (2+1)			3往	13.70	8.31	6.24	879	安山岩	完形	
21		○ (2+3+2)	○		3往	(12.15)	10.53	6.29	(855)	安山岩	上端欠	
22				○	3往	(8.46)	(7.14)	(6.90)	(607)	石英閃綠岩	汚欠	
23			○		3往	(6.58)	(6.94)	(4.90)	(251)	安山岩	汚欠	脈絡
24		○ (3)			3往	7.94	6.78	4.92	320	安山岩	完形	
25		○	○		3往	(6.70)	(8.25)	(6.82)	(257)	安山岩	汚欠	
26				○	3往	14.61	9.56	5.82	1250	石英閃綠岩	完形	
27		○ (2+2)	○		3往	17.10	12.53	8.19	2010	安山岩	完形	
28		○ (2+2)	○		3往	10.90	9.04	6.34	675	安山岩	完形	
29		○ (1+1)		○	4往11	14.85	13.49	10.40	2900	安山岩	完形	
30		○ (1+1)	○		4往28	12.22	8.67	6.23	766	安山岩	完形	
31		○		○	4往36	16.10	6.90	7.67	967	安山岩	完形	
32		○ (3)	○		4往91	11.80	9.83	8.58	800	安山岩	完形	
33			○		4往108	(14.50)	(7.25)	(4.52)	(718)	砂岩	片端欠	表面から剥離
34			○		4往122	10.93	7.39	5.49	571	安山岩	完形	
35		○ (3+?)			4往468	12.31	9.00	6.36	936	石英閃綠岩	完形	
36		○ (2)	○		4往490	(14.80)	(10.86)	(4.83)	(806)	安山岩	汚欠	表面凹凸一石目分
37	41	○ (18+15<)			4往495	15.20	15.30	8.90	3010	安山岩	完形	
38			○		4往518	13.15	11.36	6.45	1400	安山岩	完形	
39		○ (5+?)	○	○	4往519	15.90	12.50	7.15	2400	安山岩	完形	
40		○ (1+1)	○		4往524	(11.03)	8.91	5.60	(732)	安山岩	先端欠	
41	42		○		4往P11	10.48	5.62	4.97	320	浮岩	完形	
42		○ (2+2)	○	○	4往床底	10.20	7.72	4.06	439	安山岩	完形	
43			○		4往	(12.66)	(3.57)	(7.91)	(623)	安山岩	汚欠	
44		○ (1+5)	○	○	4往病部	11.37	6.67	5.84	677	安山岩	完形	
45			○	○	4往	8.31	6.18	7.64	517	安山岩	完形	
46			○		4往南側中層	(7.36)	(8.16)	(6.02)	(425)	安山岩	両端欠	
47		○ (1+2)			4往	(8.00)	(8.63)	(3.52)	(262)	安山岩	汚欠	
48	43	○ (2×4)	○	○	4往	11.30	5.97	4.71	561	安山岩	完形	
49			○		4往	(9.10)	(10.66)	(6.36)	(679)	安山岩	汚欠	
50		○ (2+2)		○	4往	13.89	6.56	4.40	600	粉岩	完形	
51		○ (1+2)	○		4往	10.06	9.08	6.06	715	安山岩	完形	
52		○ (1+1)	○		4往	14.70	11.96	6.29	1100	安山岩	完形	
53			○	○	4往	12.06	11.31	6.01	1010	安山岩	完形	
54		○ (1+1)		○	堅2	10.11	7.05	5.74	479	安山岩	完形	
55			○		土壤21Na14	(9.47)	(11.04)	3.11	(528)	安山岩	両端欠	石墨化
56			○	○	土壤21Na19	(8.50)	(6.73)	(4.44)	(360)	安山岩	汚欠	
57		○ (1+1)	○		土壤21Na22	(8.92)	(9.30)	(4.49)	(479)	安山岩	汚欠	
58	44	○ (1×3)			土壤21Na23	(8.46)	(6.49)	(3.86)	(331)	安山岩	汚欠	
59		○		○	土壤21Na26	(9.23)	(10.63)	(3.22)	(500)	石英閃綠岩	両端欠	
60	45	○ (2+2)		○	土壤21Na40	(9.51)	(7.68)	(3.35)	(390)	石英閃綠岩	汚欠	
61			○		土壤21	(10.01)	(6.67)	(3.43)	(364)	安山岩	汚欠	

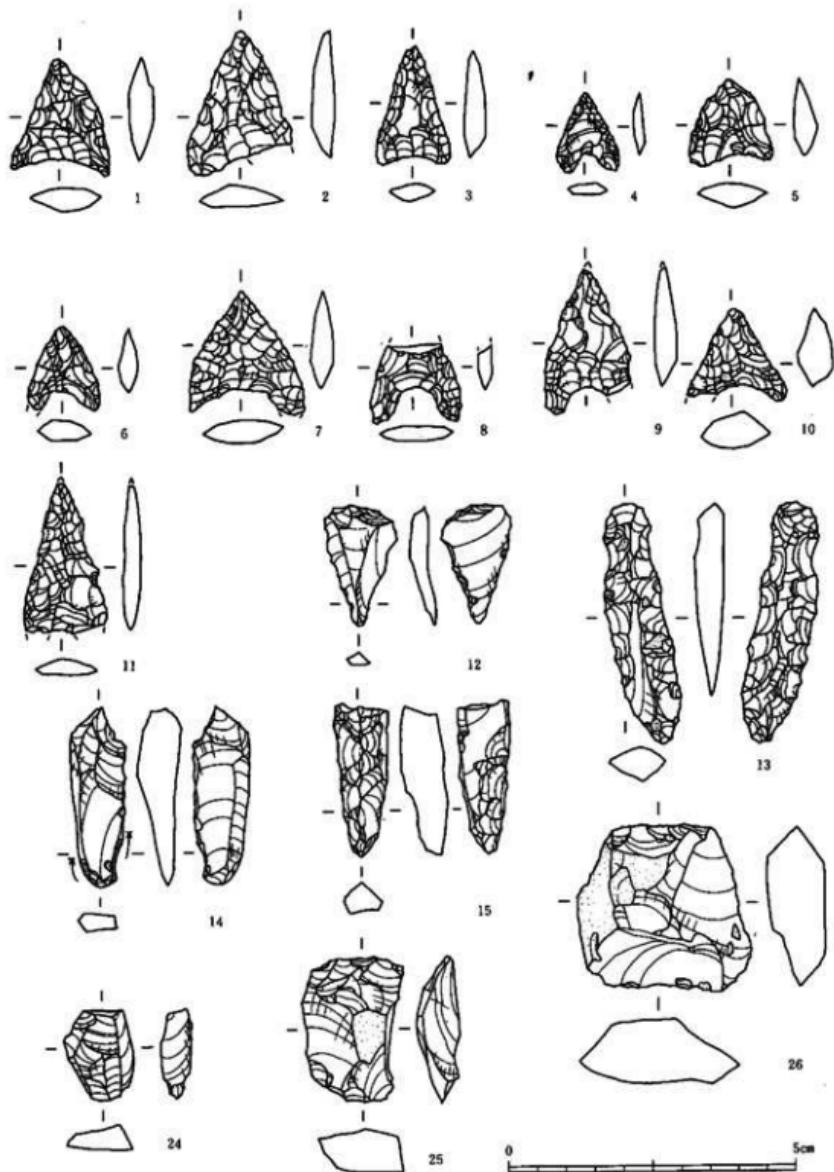
No	図 No	凹 部	敲打痕	磨面	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
62		○ (2)		○	土壤69	11.57	10.17	8.55	1400		完形	
63		○			土壤88	6.22	5.39	3.98	169	石英閃緑岩	完形	
64		○ (1+1)			土壤88	10.80	9.26	6.59	769	安山岩	完形	
65				○	土壤123	(12.68)	(7.98)	(5.66)	(538)	安山岩	円欠	
66		○ (2+2)	○		土壤123	11.11	6.41	5.02	499	安山岩	完形	
67			○	○	土壤134	10.26	(6.27)	(4.18)	(270)	安山岩	輕に円欠	被熱
68				○	土壤135	(8.25)	(5.69)	(4.23)	(198)	纖質砂岩	両端欠	
69	46	○ (3+3)	○		土壤148	10.80	7.61	4.52	514	安山岩	完形	
70	47	○ (1+1)			2区T1	9.92	8.94	5.25	465	安山岩	完形	
71				○	T4	11.91	10.65	4.80	745	安山岩	完形	
72	48	○ (1+1)	○		2区T5	9.57	8.58	3.54	363	安山岩	完形	
73				○	2区検出面	8.94	8.14	(2.49)	(200)	纖岩	上部剥離	
74	49	○			3区南側出面	8.13	7.27	4.77	346	安山岩	完形	
75		○		○	3区南側出面	7.18	6.88	4.48	248	安山岩	完形	
76	50	○ (6)	○		3区鉢	13.06	7.72	3.01	362	安山岩	完形	磨耗石として使用
77		○ (1+1)	○	○	検出面	(7.22)	(7.89)	(3.90)	(201)	安山岩	円欠	石籠への転用か
78				○	検出面	5.98	5.95	2.48	102	安山岩	完形	磨面は凹状
79				○	不明	4.93	4.79	3.44	97	安山岩	完形	
80				○	不明	(8.75)	(7.05)	(3.59)	(249)	石英閃緑岩	円欠	

石 壁

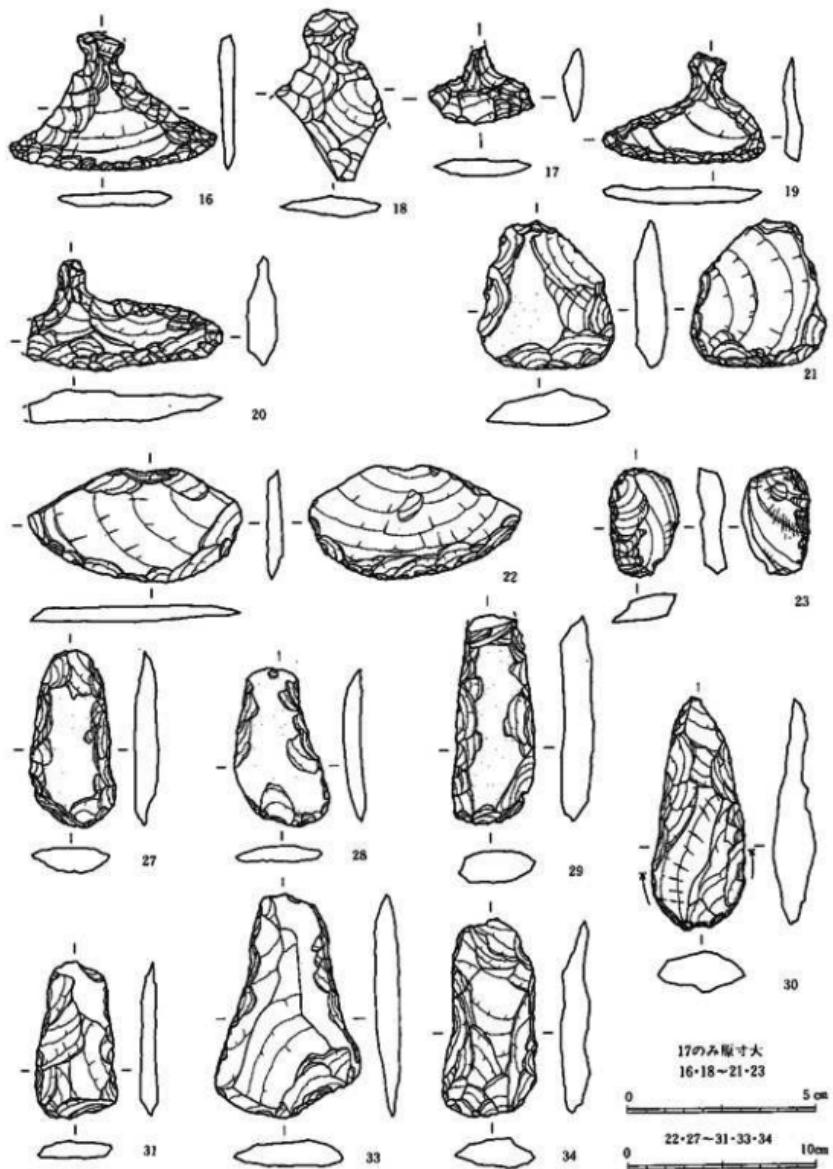
No	図 No	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1		3住111	(12.30)	(10.80)	(5.28)	(947)	石英閃緑岩	円欠	
2		3住135	(9.25)	(9.86)	(6.05)	(903)	纖質砂岩	円欠	
3		3住	(15.10)	(13.55)	(7.81)	(1800)	安山岩	円欠	
4	51	4住炉内	17.40	13.85	5.06	2280	安山岩	完形	底面に磨面
5		4住床110	(10.40)	(16.20)	(5.55)	(1800)	安山岩	円欠	底面に磨面
6		4住6	(29.75)	20.75	8.25	(8850)	安山岩	先端欠	側面を打削(整形削除)
7		4住30	(15.80)	(27.75)	(8.10)	(4150)	安山岩	円欠	底面に磨面
8		4住69	(18.00)	(9.75)	(8.95)	(2750)	安山岩	一部残	
9		4住146	(31.00)	(18.85)	(8.99)	(6660)	安山岩	円欠	底面を打削
10		4住171	(15.55)	(12.75)	(6.88)	(2000)	安山岩	円欠	底面を打削
11	52	4住204	(24.50)	(16.05)	(13.00)	(6300)	安山岩	円欠	底面に磨面
12		4住254	(19.85)	(14.60)	(4.16)	(1550)	安山岩	円欠	
13		4住370	(30.30)	(17.70)	(14.15)	(9450)	安山岩	両端欠	側面に磨面
14		4住376	(15.32)	(11.13)	(4.55)	(991)	砂岩	円欠	
15	53	4住395	30.15	34.60	7.65	800	安山岩	完形	底面に磨面
16		4住408	(27.85)	(19.50)	(12.25)	(880)	安山岩	円欠	
17		4住464	(14.25)	(19.60)	(4.12)	(1650)	砂岩	円欠	
18		4住	(18.70)	(11.65)	(6.55)	(1750)	砂岩	両端欠	底面に磨面
19		4住	(6.89)	(9.88)	(3.28)	(224)	砂岩	円欠	14と同一個体か

石 棒

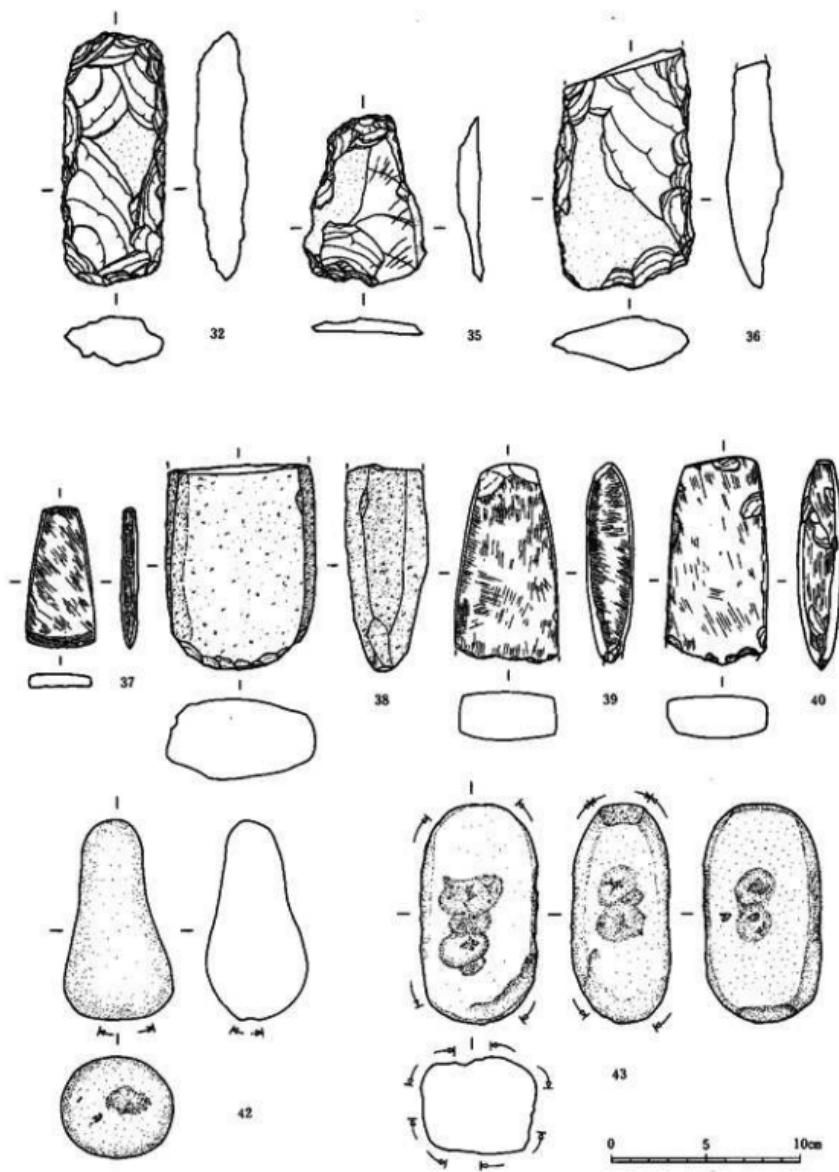
No	図 No	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1	54	4住柄立石	29.55	10.10	8.75	4750	安山岩	完形	東側。敲打のあと研磨
2	55	4住柄立石	48.05	14.90	10.10	11000	円巻	完形	西側。磨面
3	56	4住	(21.05)	(10.65)	(10.15)	(3100)	安山岩	先端・下半欠	
4		4住	(10.55)	(9.73)	(9.17)	(945)	安山岩	一部残	被熱により外側剥落
5		4住	(8.38)	(8.78)	(8.22)	(559)	纖質岩	一部残	被熱
6		4住	(7.93)	(13.45)	(8.04)	(864)	安山岩	一部残	
7		堅2ペルト520	(7.12)	(8.54)	(3.94)	(340)	安山岩	一部残	



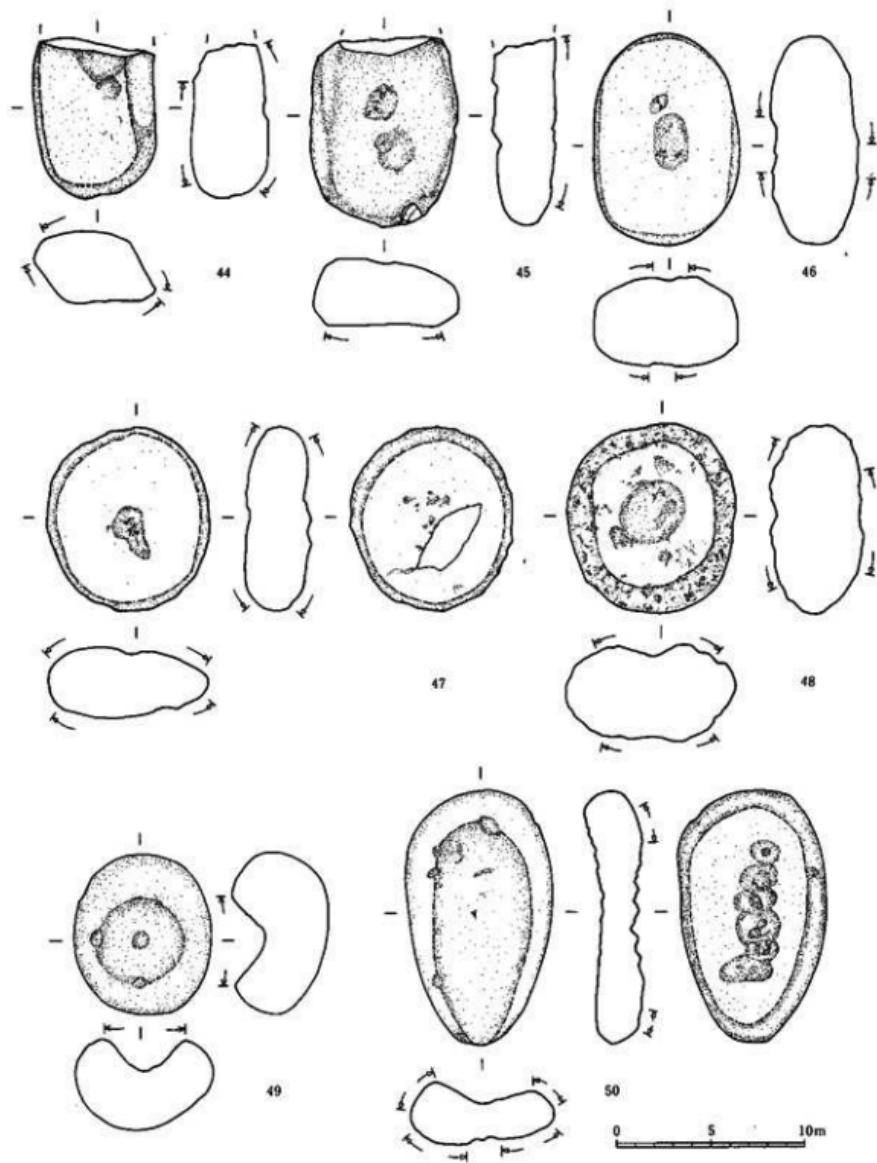
第44図 出土石器 (1)



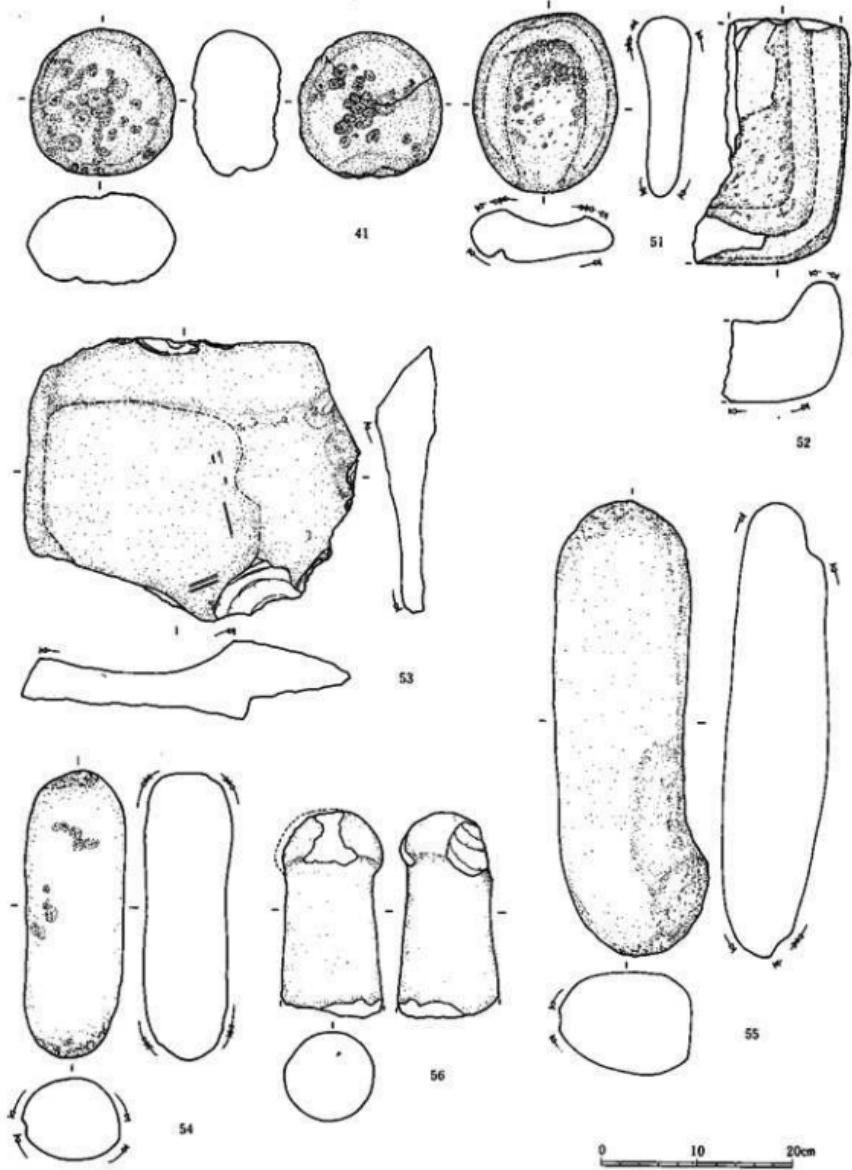
第45図 出土石器 (2)



第46図 出土石器 (3)



第47図 出土石器 (4)



第48図 出土石器 (5)

(3)土製品（第49図）

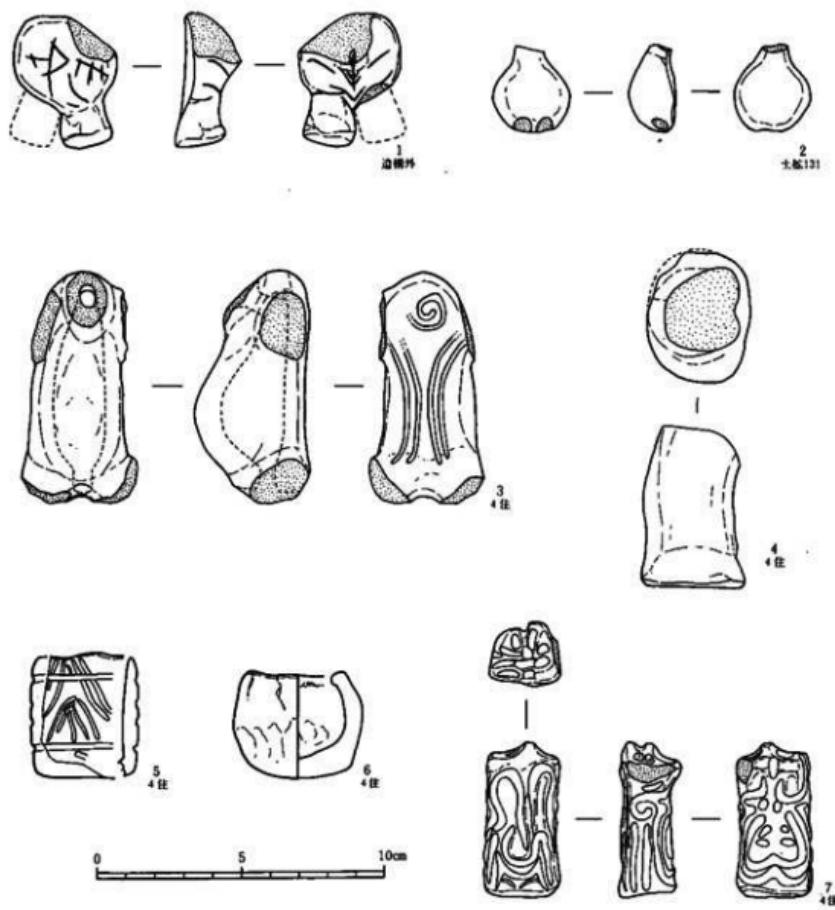
本調査で出土した土製品は7点を数える。内訳はミニチュア土器2・土偶5である。

ミニチュア土器（5・6） 4点より出土している。5は覆土中より出土した破片である。形態は直線的な体部を有し、口径3.3cm・器高4.2cmを測る。端部は細く終わり波打っている。外面には沈線文が施され、上下の横走沈線内に、三角形モチーフを描いている。6は丸みを帯びる底面よりやや屈折して体部が立ち上がるが、中央でふくらむため全体に丸い印象を受ける。器壁内外には手づくねによるオサエ痕を残し、施文はされない。口径・器高ともに3.5cmを測り、炉址西方の床面より下向きで出土している。これら2点とも本址に伴う、つまり後期の所産と考えられる。

土偶（1～4・7） 図示した4点はそれぞれ異なった特徴を示し、3時期程に分かれるようである。1・2は中期初頭のものと思われ、どちらも半球形の体部を有する。1は頭部・左脚部を欠損する。体部はふくらむ面が前面で頂部にへそとみられる刻みを施す。脚接合部から腹部にかけて細い沈線で体を表現している。背面にも何の表現か沈線による構図が描かれている。脚部は円筒形で開き気味に貼付する。現存高4.5cm。2は1と同様ふくらんだ面が腹部だが、施文はされない。首は体部を収束させて表現する。脚部は欠損するが、その痕跡を残している。この2点はおそらく妊婦を表現したと考えられ、特に1には妊娠線と思われる表現がある。大石遺跡・雨堀遺跡等中期初頭の遺跡に同形態のものが見られ（注）、本例も初頭に属すと考えられる。7は直方体の体部を呈するが、頭部・脚部は省略されている。大きさは幅2.5cm・高さ5.3cm・厚さ1.8cmを測る。体部は全面太い沈線文により表現されている。正面は上半に逆U字形の沈線を左右に配し、胸部を表現する。下半部はM字形の沈線モチーフで下腹部を表している。背面は下半にハート形に引く沈線で尻部を描く。左右側面にも直線、渦巻文が配され、前面・背面の沈線とつながっている。上面には中央に突起が見られ、左右に短い沈線ないし列点を施す。頭部がないことから考えて、顔面を示しているようにも思える。3は明らかな妊娠土偶である。頭部・腕・脚部は欠損し、現存高7.9cm・幅3.1cm・厚さ3.9cmを測る。正面は文様を施さず、器面を大きくふくらませて腹部を表現している。胸部の表現は見られない。背面は平坦で上部に沈線の渦巻文、以下に弧線を左右対称に引いている。頭部はやや前方に付けられ、猫背を思わせる。頭部より円孔が穿たれ中空の腹部を通じており、さらに陰部からも円孔が通する。技術的に見ると腹部を凹めて作り、板状の粘土で蓋をして背面を作り出している。7及び3は沈線文の手法からみて中期後半かと思われるが、中期の土偶で中空のものは他に例を知らない。4は脚部で右足とみられ、踏ん張る形状をとる。裾部はやや広がるが爪先の表現はない。4は北西部の床上より出土しており、後期のものと考えられる。

注 伴信夫他「大石遺跡」「長野県中央道埋蔵文化財保護地免復調査報告書 原村その1」 1976

松本市教育委員会「松本市内田雨堀遺跡－第2次緊急発掘調査報告書－」 1982



第49図 出土土製品

IV 調査のまとめ

縄文時代中期初頭の土器について

今回の調査では前章で述べたように、土壌21を中心として良好な一括土器資料が得られた。これらの位置付けについては繰り返さないが、雨堀遺跡の第2次調査で出土した土器群、さらに雨堀遺跡第1次調査のB1住の土器と比べ、先行する要素を持つものであった。従来、松本市域においては縄文前期末から中期初頭にかけては良好な資料に恵まれなかっただけに、本資料の意義は大きい。縄文前期末の遺跡・土器資料は白神場遺跡で十三菩提式併行の住居址・土器を得ているが、今回の主体となる土器群とはなお大きな隔たりが存在する。今回2群1類A・2類Aとしたものがこの間を埋めるものとなるのだが、いまだ良好な資料に恵まれず、今後の調査が期待されるところである。なお今年度調査を行った前田木下遺跡では、本土器群と近接する段階の資料が出土しており、また向畠遺跡でも当該期の遺構・遺物の出土を見、これらの分析によってはいま少し空白が埋まるかもしれない。

第4号住居址について

4号住居址は柄鏡形の敷石住居であることが判明したが、これも松本市内では初の調査となった。残存状況は必ずしも良好ではなかったが、構造を知るには十分であった。本址調査時は明科町北村遺跡、望月町平石遺跡、戸倉町福田遺跡等でも偶然敷石住居址の発見が相次ぎ、前2者については現地説明会等見学の機会を得た。この中で特に平石遺跡では張出部を5段の石積みが囲んでおり、床面の敷石も完存している見事なものであった。また床面の敷石は主体部が鉄平石の割石を、張出部には河原石と石材の使い分けがなされており、本遺跡例にもそのまま当てはまるものであった。更に4住の張出部周囲の石組も、平石遺跡のように石積みになっていた可能性も考えられる。主体部と張出部の結合部より翼状に配置された石組も同遺跡の住居址と同じ構造がみられ、規模は本遺跡が大きいものの構造は非常によく似ていることが指摘できよう。柱穴は平石遺跡では壁周囲に見られるが、本遺跡4住では土色が不明瞭で検出し得なかった点、残念であった。北村遺跡や小諸市久保田遺跡J13住は主体部に礫堤をもつもので、本遺跡や平石遺跡例とは異なった構造を呈する。今後敷石住居の機能や系譜等改めて論議を呼ぶものと思われるが、そうした中で本遺跡4住の占める位置も大きいと思われる。ただ、今回広範囲にわたる当該期遺構の調査ができなかった点、また現時点における敷石住居址資料の集成と論考を成し得ない点に課題を残した。

その他、4住からは後期堀之内II式の良好な土器資料が得られ、今回詳細な分析と位置付けをしていないが、前述の明科町北村遺跡等とともに今後松本平の当該期縄年資料になると思われ、貴重な資料を提供することとなった。一方本住からは多くの石器も出土しており、特に石棒は6点を数え、多くは破損しているものの被熱しているものもあり、注意される。また2点は張出部に立てら

れていたものであり、柄鏡形敷石住居、特に張出部の機能を考える上で示唆的と言える。その他にもミニチュア土器・土偶など精神生活に関わる遺物が非常に目立つ遺構であった。

以上、今回の調査は少ない面積のため、集落の全貌を明らかにすることは出来なかったものの、不明瞭だった本遺跡の内容が明らかになった点、また中期初頭および後期の土器編年資料が得られた点、更にそれぞれの時期の典型的な住居址が良好な状態で検出できたことなど非常に意義のあるものだった。ただ紙幅や時間に限りがあり全てを掲載できず、日頃接することの少なかった時期のものだけに、それらの分析が十分に成しえなかった点が惜しまれる。

最後に本調査にあたり、炎天下調査に参加された作業員の方々、また報告書作成においては連日夜遅くまで作業を共にしていただいた方々、さらに終始発掘調査に惜しみない御理解と御協力を賜った薄川土地改良区をはじめ地元の皆様に深甚なる感謝の意を表して終わりとします。

図 版





上 全景(南より)

第4号住居址

下 張出部(南より)





II・III地区近景

I地区(北)より臨む 後方の谷
は大嵩崎集落



II地区全景

南より



III地区全景

北より 手前は第3号住居地



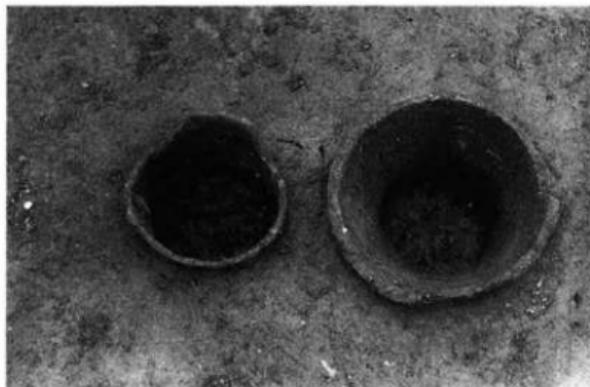
第2号住居址
東より 手前の壁中央はカマド



第3号住居址上層疊出土状況
北より 右上は土壙21



同全景
南より 西(左)壁下にテラス状の高まりがあり中央、南北に並んで埋蔵かが見られる



第3号住居址埋廻
右よりF1・F2



第4号住居址出土状況
西より張出部には大形の石材
が多い



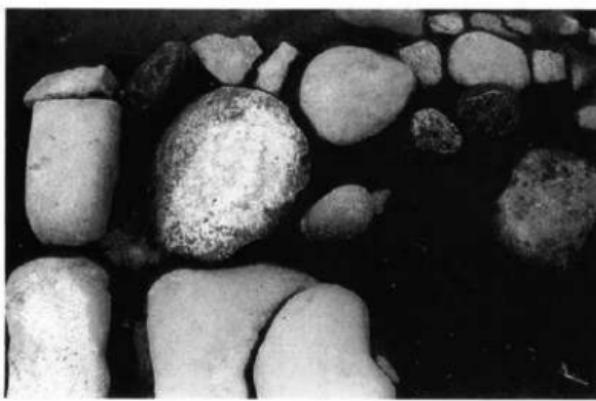
同 焼石検出状況
東壁下のもの 鉄平石の別石を
用いている



第4号住居址石組炉
南より東及び南の石材は抜きとられ
とられる



同 敷石検出状況
張出部を北より見る。
石材は河原石を用いる



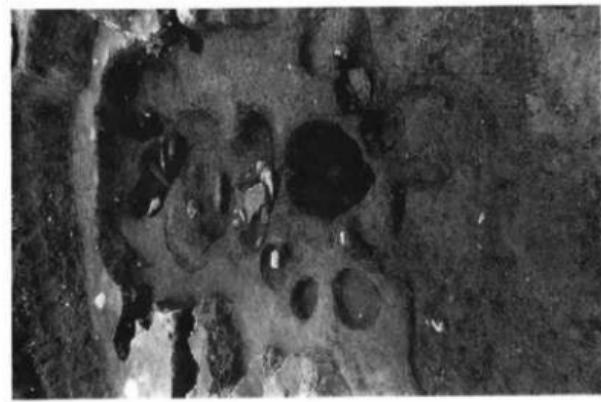
同 張出部石棒
西より やや傾斜して立つ



第4号住居址敷石検出状況
中央の石材を挟み、2本の石棒
が見える



同 敷石検出状況
張出部東壁沿いの石材
配置と壁外石組



同 張出部敷石下のピット
北より



第4号住居址壁外石組
右端張出部より翼状にのびる



第5号住居址全景
西より 灶手前のピットは
土塙150



同 石組が
南より



第5号住居址磨製石斧出土状況
北壁



土塚21全景
南より



同 土器出土状況
南半 南より



土塁21土器出土状況
北半 西より



同 土器出土状況
南半 拡大



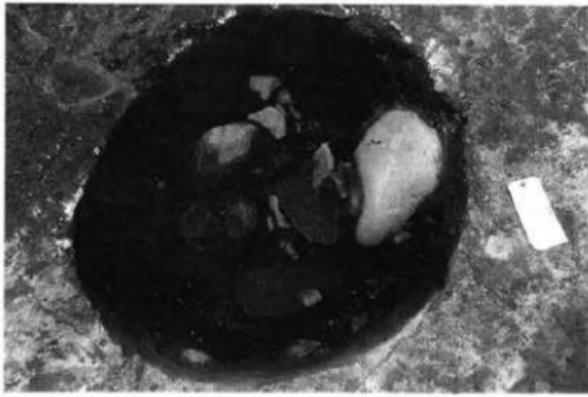
II地区土塁群
土塁133付近 南より



土壤70



土壤71



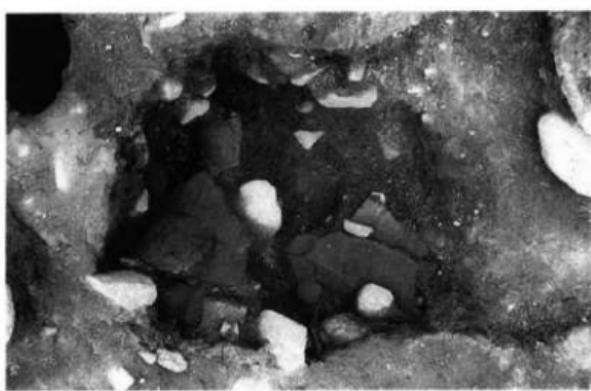
土壤80



土壤95



土壤133



土壤150





25



28



24



29



44



49



40



51



42



19



55



18



295



294



45



93



73



64



67



63



86



80



77



6

1



3

7



97

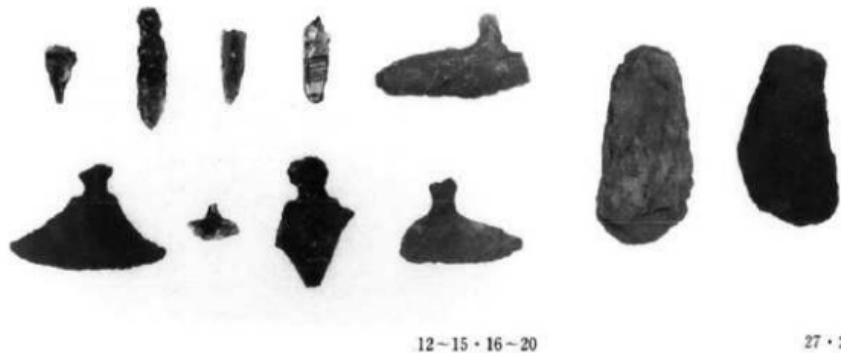
104



1~11

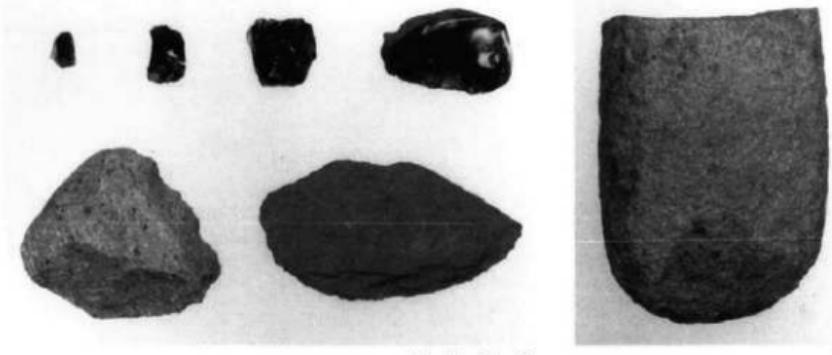
37

39



12~15・16~20

27・28

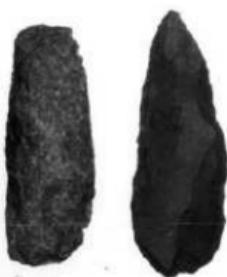


21~23・24~26

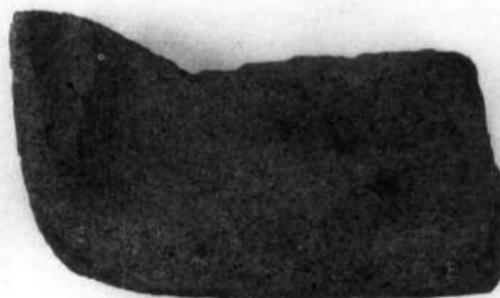
38



56



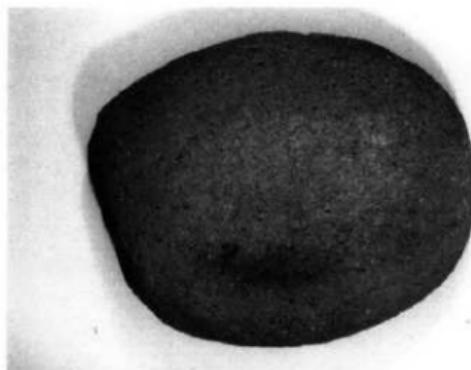
29 + 30



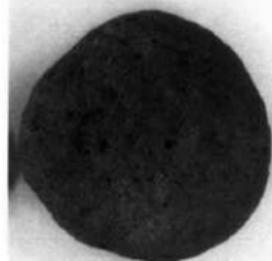
52



50



51



41

松本市文化財調査報告No.61

松本市林山腰遺跡

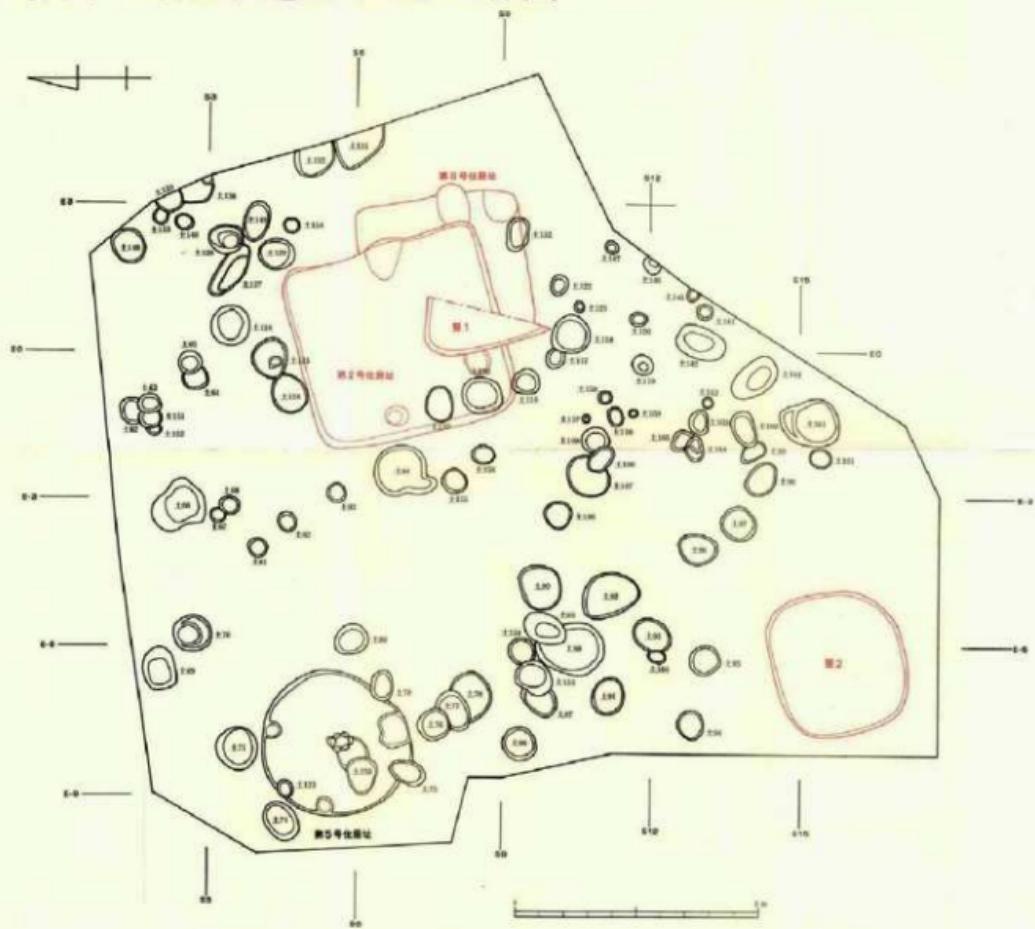
昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月31日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 株式会社綜合印刷

付図1 林山腰遺跡II地区全体図



付図2 林山腰遺跡III地区全体図

